

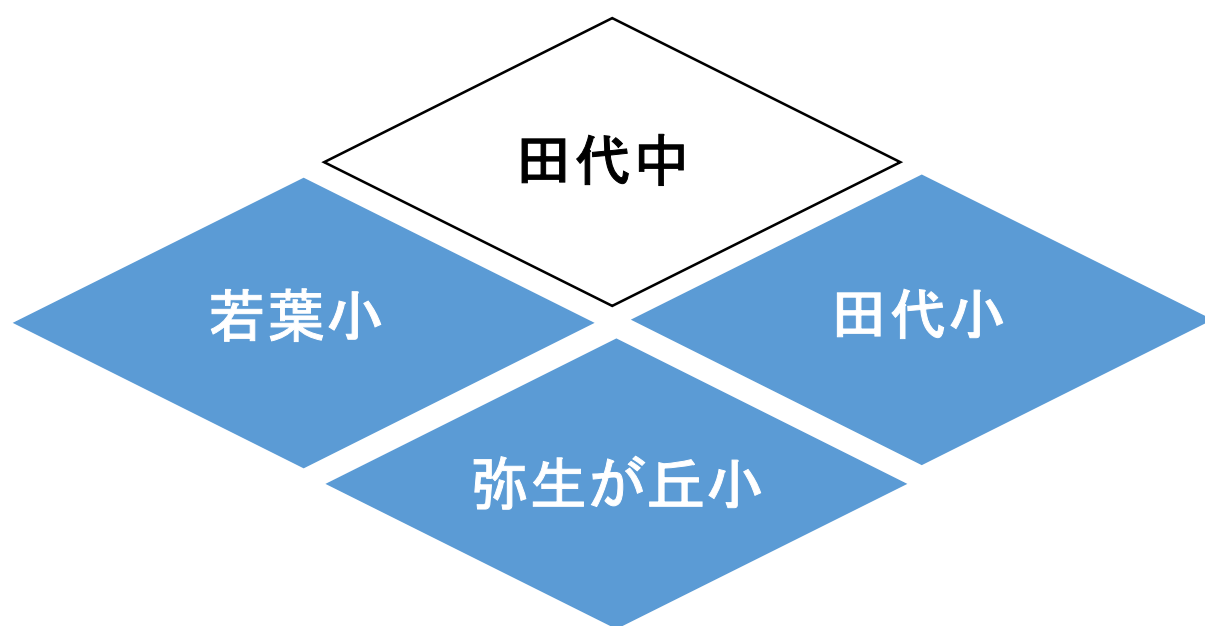
令和6・7年度 鳥栖市教育委員会委嘱

「教育課程特例校における教科『日本語』を中心とした小中一貫教育に関する調査研究」

田代中学校区小中一貫教育 研究紀要

研究主題

豊かな人間性と自立心を培い、生き抜く力をもった児童生徒の育成
～小中9年間を通じた取組～



令和7年11月6日（木）

鳥栖市立田代中学校・鳥栖市立田代小学校

鳥栖市立若葉小学校・鳥栖市立弥生が丘小学校

はじめに

本日、令和6・7年度鳥栖市教育委員会委嘱「教育課程特例校における教科『日本語』を中心とした小中一貫教育に関する調査研究」に関する研究発表会を開催しましたところ、鳥栖市内外の多数の先生方、また田代中校区に関わっていただいております多くの方々にご参加いただき、心から感謝申し上げます。

鳥栖市では、平成24年度から市内全中学校区において小中一貫教育が実施され、平成28年度からは、教科「日本語」を小中一貫教育の柱として位置づけ、各中学校区での取組が進められています。

田代中校区の田代小学校、若葉小学校、弥生が丘小学校、田代中学校の4校におきましても、平成24年度から、小中一貫教育で期待される効果を目指して、義務教育9年間のつながりや連続した学びを創造・継続し、これまで実践を積み重ねてまいりました。

令和6・7年度の調査研究につきましては、「豊かな人間性と自立心を培い、生き抜く力をもった児童生徒の育成 ～小中9年間を通した取組～」を共通の研究主題とし、4つの部会を組織し、教科「日本語」を中心に、協働的な学びを通して自分の考えをもち、自分の言葉で説明する力を育てる授業づくりや、他者と関わる力や自己表現力、社会性を高め育む教育活動に取り組んでいます。「無理なく、持続可能な、効果がある取組」となるよう、知恵を出し合い実践を進めているところです。

今回の研究発表では、すでに各学校におきまして授業公開を実施し、多くの先生方に参加していただき、貴重なご意見やご感想をいただきました。誠にありがとうございます。

本日の研究発表会では、「小中一貫 つなぎ続ける力 ―持続可能な共育の設計図―」をテーマとし、児童・生徒・地域・保護者・教師の代表による「トークセッション」を実施いたします。小学生・中学生代表からは、学校生活での思いや未来への期待が、地域、保護者の代表からは、子どもたちの成長を支える視点や、学校と地域社会をつなぐ在り方が、さらに、教師代表からは、小中一貫教育における実践や課題、今後の学びの方向性などが語られるのではないかと期待しております。そして、この「トークセッション」を通して、異なる立場の声が交わることで、「つながり」をキーワードとした新たな気づきや、持続可能な教育の在り方をともに描けるような機会となることを期待しております。

多くの先生方より感想やご意見、お気付きの点をお知らせいただき、今後の研究に繋げていきたいと考えておりますのでどうぞよろしくお願いいたします。

最後になりましたが、田代中校区小中一貫教育研究の充実のためにご示唆を賜り、本日、コーディネーターをしていただきます西九州大学 副学長 上野景三先生をはじめ、佐賀県教育委員会、鳥栖市教育委員会など、ご指導やご支援を賜りました多くの関係者の皆様に深く感謝申し上げ、ご挨拶といたします。

田代中校区小中一貫教育研究会
会長（田代中校長）中島 達也

令和7年9月5日

関係者各位

鳥栖市教育委員会 教育長 佐々木英利
鳥栖市立田代中学校 校長 中島達也
鳥栖市立田代小学校 校長 豆田幸彦
鳥栖市立若葉小学校 校長 江頭尚子
鳥栖市立弥生が丘小学校 校長 今村昇治

令和6・7年度（2年次）鳥栖市教育委員会委嘱
「教育課程特例校における教科『日本語』を中心とした小中一貫教育に関する調査研究」
田代中学校・田代小学校・若葉小学校・弥生が丘小学校 研究発表会（2次案内）

初秋の候、皆様におかれましては、ますますご清祥のこととお喜び申し上げます。

さて、田代中校区では、「豊かな人間性と自立心を培い、生き抜く力をもった児童生徒の育成～小中9年間を通した取組～」を研究主題とし、教科「日本語」を中心に、協働的な学びを通して自分の考えをもち、自分の言葉で説明する力を育てる授業づくりに、小中合同で取り組んでいます。

そこで、下記のとおり、研究発表会を開催いたします。研究発表会当日は、研究の概要説明とトークセッションを実施いたします。

つきましては、本校区の小中一貫教育の更なる充実を図りたいと考えておりますので、多くの皆様のご出席、ご参観を賜りたくご案内申し上げます。

記

1 日 時 令和7年11月6日（木） 14：00受付開始

2 場 所 鳥栖市立田代中学校 体育館
〒841-0016 佐賀県鳥栖市田代外町 651 番地 1

3 日 程

14:00～	14:30～	15:00～	～16:30
受付	開会 行事	研究概要 説明	トークセッション（80分間） コーディネーター 西九州大学 副学長 上野 景三 氏 「小中一貫 つなぎ続ける力 ー持続可能な共育の設計図ー」 閉会 行事

◆◇トークセッションの参加予定者◇◆

- ・中学生代表
- ・小学生代表
- ・地域代表
- ・PTA 代表
- ・教師代表



◆◇トークセッションについて◇◆

西九州大学の上野景三先生をコーディネーターに迎え、「小中一貫 つなぎ続ける力ー持続可能な共育の設計図ー」をテーマに、児童・生徒・地域・保護者・教師の代表が一堂に会し、それぞれの立場から率直に意見を交わします。

小学生・中学生代表からは、学校生活での思いや未来への期待が語られ、地域・PTA代表からは子どもたちの成長を支える視点や学校と地域社会をつなぐ在り方が示されます。さらに教師代表からは、小中一貫教育における実践や課題、今後の学びの方向性が語られます。また、フロアの皆様からのご意見もお待ちしております。

異なる立場の声が交わることで、「つながり」をキーワードとした新たな気づきや、持続可能な教育の在り方を共に描く貴重な機会となるでしょう。

- 4 申し込み 別紙用紙に記入し、FAX にてお申し込みください。締切は10月23日(木)までとします。
- 5 駐車場 田代中学校運動場をご利用ください。(詳細は別紙参照)

鳥栖市立田代中学校

教 頭 原田 聡子

主幹教諭 伊達 幸長

TEL：0942-83-2758

FAX：0942-83-2822



目次

○はじめに

○開催要項

1	研究の概要	
(1)	研究主題及び主題設定の理由	… 1
(2)	研究の目標(田代中学校区の小中一貫教育に期待される効果)	… 2
(3)	研究組織及び研究の全体計画	
(4)	研究内容と方法	… 5
2	研究の具体的な取組	
(1)	学力向上・ICT 部会	… 6
(2)	人間関係づくり部会	…51
(3)	特別支援教育部会	…60
(4)	教科「日本語」部会	…71
3	研究全体の成果と課題	…95

○おわりに

○令和6・7年度の組織図

1 研究の概要



1 研究の概要

(1) 研究主題及び主題設定の理由

研究主題

豊かな人間性と自立心を培い、生き抜く力をもった児童生徒の育成
～小中9年間を通した取組～

小学校学習指導要領および中学校学習指導要領においては、義務教育9年間を見通した学びの系統性と連続性の確保が重視されている。特に、小学校から中学校への移行期においては、児童生徒が円滑に学校生活へ適応できるよう、両校種が連携して教育を進めることの必要性が強調されている。文部科学省の調査でも、小中連携は中1ギャップの緩和や学習意欲の維持・向上に効果があることが示されており、児童生徒の学習指導や生徒指導上の課題に対応するためには、小中一体となった取組が不可欠である。

田代中校区の4校（田代中学校、田代小学校、若葉小学校、弥生が丘小学校）においても、従前より各学校での課題解決や小中連携の取組が進められてきた。しかし、少子化や情報化・グローバル化、地域コミュニティの弱体化や核家族化など、児童生徒を取り巻く社会の変化は著しく、課題は一層多様化・複雑化している。具体的には、中学校進学時の中1ギャップ問題、学習理解度や学校生活への肯定感の低下、学習方法への不安、暴力行為・いじめ・不登校件数の増加といった実態が指摘されている。また、言語能力や人間関係づくりに課題を抱える児童生徒もおり、自己表現や社会性に不安を抱える傾向も見られる。

こうした状況を踏まえ、本校区では、4つの部会（学力向上・ICT部会、人間関係づくり部会、特別支援教育部会、教科「日本語」部会）に分かれ、課題の解決に向けて取り組んでいる。特に、教科「日本語」を中核に据えて、小中一貫教育を推進している。詩やことわざ、礼儀作法、伝統文化の学びを通して、言葉の力を育むとともに、自己肯定感や社会性を高めることも目的としている。教科「日本語」での学びは、児童生徒が自分の考えをもち、それを自分の言葉で表現し、他者と共有・協働する力の育成に直結する。さらに、言語活動を通して思考を整理し、対話や交流の中で学びを深める経験は、豊かな人間性や自立心を培い、生き抜く力を育てる基盤となる。

研究授業においては、小中9年間を見通して次の2つの共通の視点を重視する。

- ・協働的な学びを通して、課題に取り組む姿が見られたか。
- ・自分の考えをもち、自分の言葉で説明する姿が見られたか。

これらの視点は、教科「日本語」で重視する言葉を通じた思考と表現の力と深く関わっている。児童生徒が学びの中で自らの考えを言葉に表し、他者と関わり合いながら成長していく姿を、小中9年間の系統的な指導を通して育んでいくことこそが、本研究の核となる。

以上を踏まえ、田代中校区の研究主題を「豊かな人間性と自立心を培い、生き抜く力をもった児童生徒の育成～小中9年間を通した取組～」とし、4校が共通理解と共通実践を図りながら研究に取り組むこととした。

（２）研究の目標（田代中学校区の小中一貫教育に期待される効果）

① 学力の向上

校内研究、教科「日本語」、学習習慣の定着等を共通の手立てとして、義務教育９年間の児童生徒の発達状況に即した系統性（学習内容のつながり）と連続性（学習の進め方の繋がり）のある指導を行い、学力を向上させる。

② 社会性の向上

教科「日本語」を通して、小小連携及び小中連携を図りながら言語力や礼儀作法、文化理解を高め、他者と円滑に関わる力や自己表現力を向上させる。また、構成的エンカウンターや田代スタイル（時間・掃除・挨拶）の内容や方法に系統性をもたせて、実践することで、更なる社会性の育成を目指す。

③ 教職員の意識の醸成

小学校と中学校の文化の違いやそれぞれの良さを理解し、互いの協力関係を構築する。

④ 生徒指導上の諸問題の改善

小中の教職員が情報を共有した上で継続性のある指導を徹底し、生徒指導上の諸問題において未然防止・早期対応を図ることにより、不登校や問題行動の減少をさせる。

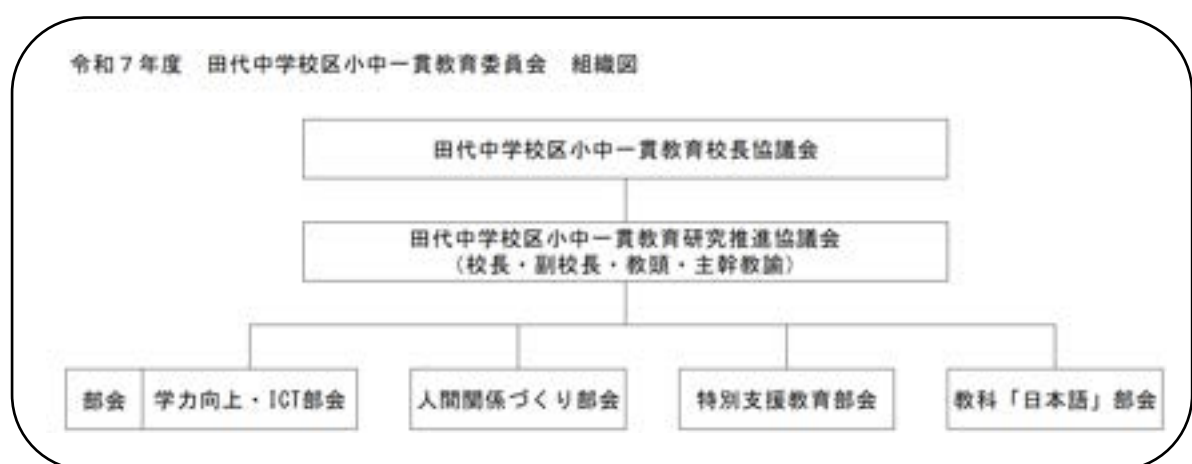
⑤ 地域の教育力の向上

田代中校区が一体となった教育活動を通して、保護者や地域の信頼を高め、学校・地域・家庭が一体となった取組の実施など、地域の教育力を高めることにつなげる。

（３）研究組織及び研究の全体計画

① 組織図

校舎分離型の小中一貫教育であるため、４校の職員が一堂に集まることは困難である。そこで、各校の教員がそれぞれの立場から参加し、取組の内容や方法について工夫や検討を行う「研究推進協議会」（組織図参照）を設置した。



② 研究の全体計画 R6.7 年度

月	研究計画及び実施
R6. 4 月	4. 1 組織編制 ・各部会立ち上げ、組織づくり ・令和 6 年度の研究の方向性について
8 月	8. 1 各部会(オブザーバー、部会長、副部長) ・部会の方針、今年度の取組について ・小中情報交換
1 1 月	11. 8 基里小学校・基里中学校 研究発表会参加 ・研究主題「自ら学び続ける基里っ子の育成」 11. 5～11. 8 田代中校区内 授業参観ウィーク
1 2 月	12. 12 第 1 回小中一貫教育に係る研修会(教頭・主幹教諭) ・研究主題について ・令和 7 年度の研究の方向性
R7. 2 月	2. 17 第 2 回小中一貫教育に係る研修会(教頭・主幹教諭) ・令和 7 年度の研究発表に向けて 発表の形、期日、講師の選定 ・次年度の研究の方向性について 研究の内容、方法、流れ、職員への周知
4 月	4. 1 組織編制 ・各部会立ち上げ、組織づくり ・令和 7 年度の研究の方向性について
5 月	5. 1 第 1 回運営委員会(事務局・部会長) ・全体計画の把握、部会の動きの見通し ・全体名簿作成(部員の集約) 5. 26 第 1 回各部会(代表者) ・部会メンバーの確認 ・部会の目的、研究の内容等
6 月	6. 1 第 2 回運営委員会(事務局・部会長) ・講師による研修計画 ・各校研究授業の日程確認 ・発表当日の動き ・研究紀要の概要 6. 18 第 3 回運営委員会(事務局・部会長) ・講演会の持ち方 ・研究紀要について(詳細) 6. 25 第 1 回拡大運営委員会(事務局・部会長＋オブザーバー) ・運営委員会第 1 回～第 3 回の確認 6. 27 講師との打合せ ・講演会の概要 ・トークセッションについて ☐ 第一次案内発送
7 月	7. 2 若葉小学校授業公開 ・⑤時間目、教科「日本語」、加藤 一帆 教諭 7. 25 小中一貫教育田代校区合同研修会 上野先生講演会 ・オンラインにて実施 ・講演「田代中校区ー小中一貫教育を目指してー」 7. 25 第 2 回各部会(全員) ・研究授業の案情報共有 ・研究の進捗状況の確認

8 月	8.7 運営委員会(教頭のみ) ・トークセッションのテーマ決定 ・トークセッションの参加者案 ☐ 研究紀要原稿執筆 ☐ 各部会(随時)
9 月	9.10 田代中学校授業公開 ・⑤時間目、1年3組、保健体育科、伊東 麟太郎 教諭 9.12 運営委員会(事務局・部会長) ・メールと紙面で開催 ・研究紀要執筆の確認 9.12 弥生が丘小学校授業公開 ・⑤時間目、4年2組、教科「日本語」、西川 萌 教諭 9.18 田代小学校授業公開 ・⑤時間目、6年2組、国語科、宮崎 万智 教諭 ☐ 第二次案内発送(PDF) ☐ 教育委員会に案内文書発送
10 月	10.1 第4回運営委員会(事務局・部会長) ・研究紀要原稿チェック ・トークセッションについて ・全体会及び発表会当日の動き確認 10.14 第2回拡大運営委員会(事務局・部会長＋オブザーバー) ・最終確認、打合せ 10.30 第5回運営委員会(事務局・部会長) ・全体会リハーサル、最終打合せ ☐ 研究大会参加者集約 ☐ 研究紀要完成 ☐ 全体会説明資料、説明原稿作成 ☐ 研究紀要を市教委、上野先生に送付
11 月	11.6 研究発表会 ・会場 田代中学校
12 月	上旬 第6回運営委員会(事務局・部会長) ・研究発表会の振り返り ・持続可能な取組の選定 ・今後の田代中校区小中一貫教育の取組の検討
R8. 2 月	中旬 第7回運営委員会(事務局・部会長) ・次年度以降の組織及びスケジュールの確認 ・引継ぎ資料の確認 紙面 拡大運営委員会(事務局・部会長＋オブザーバー) ・第6回と第7回運営委員会の内容の確認 ・次年度以降の役割の確認、引継ぎ事項の確認

(4) 研究内容と方法

① 授業公開

各学校1回ずつ研究授業を公開した。教科「日本語」の授業を2本、教科の授業を2本である。教科「日本語」の授業を若葉小学校と弥生が丘小学校、教科の授業を田代小学校と田代中学校が公開した。

② 各部会の主な取組内容

学力向上・ICT 部会

- ・ 主体的・協働的な学びに向かうための授業改善
- ・ 小中連携した ICT 利活用の共通理解と共通実践

人間関係づくり部会

- ・ 田代中学校区「田代スタイル」再徹底の取組
- ・ 9年間を見通した構成的グループエンカウンター指導計画・系統表の作成と実践

特別支援教育部会

- ・ 「自分の考えをもち、自分の言葉で説明する姿」を目指した取組
- ・ 「協働的な学びを通して、課題に取り組む姿」を目指した取組
- ・ 小中合同の取組

教科「日本語」部会

- ・ 縦と横のつながりを意識した教科「日本語」の取組
- ・ 教科「日本語」の授業改善

※研究授業においては、小中9年間を見通して次の2つの共通の視点を共有し、実践を行ってきた。

- ・ 協働的な学びを通して、課題に取り組む姿が見られたか。
- ・ 自分の考えをもち、自分の言葉で説明する姿が見られたか。

これらの視点は、教科「日本語」で重視する言葉を通した思考と表現の力と深く関わっている。そのため、授業の中でその姿を引き出す活動を指導案上では赤枠で囲んで示すこととした。

2 研究の具体的な取組



2 研究の具体的な取組

(1) 学力向上・ICT 部会

①部会の目指すところ

○主体的・協働的な学びに向かうための授業改善

ア 「見通し」と「振り返り」を重視した授業を実践することによって主体的な学びを目指す

- ・「見通し」を児童生徒にもたせることにより、学習の道筋が明確となり、不安が軽減され、学習への前向きな姿勢が生まれると考える。さらには、学習に対して目的意識が生まれ、「なぜこの学習をするのか」という意味付けが可能となり、主体的な学びへとつながっていくと考える。
- ・「振り返り」をすることにより、児童生徒自身で学習の成果や成長を実感することができ、達成感が得られ、次の学びへの意欲が高まるとともに、自分のつまずきや課題を自覚し、解決に向けて主体的に取り組む姿勢が育つと考える。

イ タブレット端末を活用した授業を実践することによって協働的な学びを目指す

- ・タブレット端末を使って、児童生徒が自ら調べ、意見をまとめ、他者と共有することで、学習への主体的参加が促される。さらには、グループや全体での意見交換・プレゼンテーションにおいて、視覚的に分かりやすいデジタル資料や図を共有しながら議論が活性化され、協働的な学びへとつながっていくと考える。

ウ 相互授業参観「参観 week」を設定し互いの授業を参観し合うことによって、小学校・中学校の学習環境や児童生徒の学びの様子を把握し授業改善を目指す

○小中連携した ICT 利活用の共通理解と共通実践

ア それぞれの学校で指導してきたタブレット端末利用に係るきまりを見直し、統一することで、9年間を通した一貫性のある指導を目指す

- ・児童生徒全員が同じルールのもとでタブレット端末を使用することで、小学校・中学校での運用の差をなくし、ICT の使い方やマナーに関する指導を効果的に行うことができる と考える。

イ 中学校を見据えて、小学校のうちから発達段階に応じたタブレット端末利用に係る力を身に付けさせておく

- ・様々な ICT ツール（Canva、ロイロノート等）があるが、基本的な入力スキルが不十分な場合、学習活動全体に影響を及ぼすため、小学校のうちに十分なタイピングの力を身に付けておく必要がある と考え、児童が意欲的にタイピングに取り組むことができる環境整備を行っていく。

②実践内容

○主体的・協働的な学びに向かうための授業改善

ア 「見通し」と「振り返り」を重視した授業実践

イ 「タブレット端末活用」を重視した授業実践

※ア・イの実践（指導案）については、学力向上・ICT 部会資料の最後に掲載

ウ 相互授業参観「参観 week」の実践

互いに授業を参観し合うことで、小学校・中学校の学習環境や児童生徒の学びの様子を把握し、授業改善につながると考える。

2週間（昨年度は1週間）の「参観 week」の週を設け、朝の時間帯から帰りの時間帯まで自由に参観できるようにした。その期間に4校の公開授業等を行うことで、より多くの参観者となった。参観後の感想（【資料1】）を4校で共有し、今後の取組の一助とした。

《参観者の感想の一部》

（中学校→小学校）

- ・実際に小学校を参観させていただいたことで、現状を知り、小学校でとても細かく指導されていることや児童の学習に対するやる気を感じることができ、大変有意義な時間となった。
- ・3年生の総合の時間を拝見したが、タブレットでカフートを活用するなど、中学校以上に活用しているのではないかと感じるくらいだった。集中が難しい(離席しがち)児童への対応をどのようにされているのか、気になった。
- ・小3は、かけ算の勉強をタブレットの学習ゲームを活用して、苦手な生徒でも前向きに取り組む工夫がなされていた。また、キャンバも楽しそうに操作していた。
- ・小5は、比較的落ち着いて授業を受けているようだった。授業規律はとても大事だと思った。
- ・小学校2年生が授業中に上手にタブレットを使って学習に取り組んでおり、児童に聞くと「楽しく勉強している。使い方も覚えた。」と言っていたため、タブレットが学習のツールとしてしっかり浸透していると感じた。
- ・休み時間を見学した。子どもたちが元気に挨拶をしてくれた。元気に外遊びを楽しんでいた。教室内の掲示物が整理されていた。廊下の掲示物の子どもの作品等があり、見ていて和やかな気持ちになった。

（小学校→中学校）

- ・生徒が明るくのびのびと学習に向かう姿が見られた。教師の問いかけや指示にも素直に反応していて、教師と生徒との人間関係がうまく成り立っていることが伺えた。
- ・子供たちにとって中学校の先生方の専門性は何よりも学習のモチベーションになると思うので、小学校段階では「とにかく運動が楽しい」「挑戦するって面白い」「友達と学ぶと勇気がもらえる」といった運動に対する障壁をどれだけ取ることができるかを意識して授業を行いたいと思った。
- ・中学生なりにしっかりと自己理解を促したうえでの進路指導がされていた。小学校では、キャリア教育といっても高い意識がもてていないので、発達段階に応じた自己理解、未来を拓くような機会をもうけていく必要性を感じた。主に参観したクラスは意見を気兼ねなく言える雰囲気が醸成されていた。
- ・渡り廊下には、生徒会選挙ポスターが掲示してあり、小学校での頑張っていた子たちが中学校でも更に頑張ってくれている様子が分かった。子供たちの成長や頑張りを全小中学校の教員で見守っていくような雰囲気ができればいいなと感じた。

（小学校→小学校）

- ・日本語の授業の際の環境づくりがされていた。（本や事前の学習の作品など）「たしかに」「それもいいね」など児童同士の声掛けが支持的でいいなと思った。
- ・ICTを活用された協働的な学びの工夫を知ることができた。実際に活用されているICTの実践例なども教えていただき、今まで使っていなかったものもこのように使えば、効果的な使い方になるのかと分かった。反対に、ICTを使うことを目的とした授業にならないこと、情報リテラシーに注意することが大切だと改めて感じた。

【資料1 相互授業参観「参観 week」の参観者の感想】

○小中連携した ICT 利活用の共通理解と共通実践

ア 9年間を見通したタブレット端末利用に係るルールの作成

作成の手順として、①4校の ICT 推進リーダーによる Classroom 上での情報交換
②4校で現在作成し指導している「タブレット端末使用に係るルール」をもとに4校で統一したルールの検討・作成 ③ルールの完成 の順で ICT 推進リーダーを中心に行っていった。Classroom 内での情報交換では、タブレット端末に係るルール作りの内容だけでなく、タブレット端末の授業活用方法や AI ドリル、授業で活用している ICT ツール等について、学校における ICT 利活用に関する情報交換を行うことができた。

ルール作りに際し、「文章が多いと分かりづらい」「観点を絞ってすっきりした方がよい」という意見があり、最終的には【資料2】のように6観点でまとめることとなった。指導の徹底を図るため、教室掲示はもちろんのこと、ルールの表を児童生徒のタブレット端末の壁紙に使用することとした。また、小・中学校で統一するところ及び発達段階に合わせて表現(文面)を変えるところは、各学校の実態に合わせて変更していった。

タブレット端末活用についてのルール 2025年8月～			☆は校区内の小中学校共通のルールです。		
授業中・休み時間の使い方について		カメラやアプリについて		端末の使い方・持ち運びについて	
☆タブレットは「文房具」です。学習に関係のないサイトやゲームのために使いません。		☆カメラは先生がOKを出したときに使います。勝手にカメラを起動しません。		☆ていねいに使います。(聞いたまま持ち歩いたり、走ったりしません)	
☆休み時間は、先生から許可があったときは使えます。		□休み時間に使うことができるアプリは、ロイロノート、Googleのアプリ、弥生が丘小やっていることリストのみです。その他のアプリを使うときは、先生に尋ねます。		☆他の人のタブレットを持ち運びません。(貸し借りは禁止です)	
□タブレットを使用しないときは、充電をしましょう。				□タブレットがこわれたり調子が悪かったりしたときは先生に言います。	
ネットへの投稿・書き込みについて		アカウントや個人情報の管理について		タブレットの設定について	
☆だれかを傷つける書き込みをしたり他人の写真を載せたりしません。		☆IDやパスワードは自分でしっかりと管理し、ほかの人に絶対に教えません。(みなさんのアカウントには、さまざまなサービスがひもづいています)		☆背景の画像やカーソルの形など、タブレットの設定をはじめの状態から勝手に変更しません。	
□インターネット上に個人情報の書き込みはしません。		□他人のアカウントを絶対に利用しません。		□先生からの許可なく、アプリ・動画・音声・画像などをインターネット上からダウンロードしません。ウイルスがあるかもしれません。	

【資料2 小・中学校で統一化を図ったタブレット端末に係るルール（掲示用）】

イ 9年間を見通したタブレット端末利用に係る身に付けさせたい力

(小学校においてタイピングの力を高めるための実践)

小学校では近年、AIドリル(eライブラリ等)やロイロノート、CanvaなどのICTツールを活用する機会が増えており、児童も教員もそれらを抵抗なく使いこなせるようになってきている。中学校においても、AIドリルやロイロノートなどのICTツールを授業で積極的に活用しており、ICTを活用した学習が定着しつつある。

一方で、中学校からは「中学校入学時には、最低限のタイピングスキルを身に付けてほしい。タイピングに時間がかかると、すべてのICT活用の進行が遅れてしまう。」といった要望がある。ICTツールの操作方法自体は中学校でも習得可能である

が、基本的な入力スキルが不十分な場合、学習活動全体に影響を及ぼすという指摘であった。

このような意見を踏まえ、小学校段階で児童が意欲的にタイピングに取り組めるような環境を整えていく必要があると考える。また、児童が中学校でもスムーズに ICT を活用できるよう、今後も継続的に環境整備と指導の充実を図っていく。

《実践例 若葉小学校 「タイピング記録会」》

○実施回数 年間3回（9月、12月、2月）実施

○使用アプリ 「マナビジョン タイピング練習」

○実施方法

- (1) 1分間のタイピングに取り組む
- (2) 結果をスクリーンキャプチャで読み取り、各学級の個人指定のスライドにその保存していく。
- (3) 指定の期間中に実施し、良い記録が出たら、前の画像を消して新しい画像を更新していく。
- (4) 合格基準を設定しておき、達成した児童には全員賞状を贈呈する。また、学年ごとに上位3名は特別な賞状を贈呈する。

③成果と課題

【成果】

- ・導入時に「見通し」を立てることで、目的意識が芽生え、課題を追求しようとする意欲が喚起された。また、終末時に「振り返り」を行うことで、課題に対する立場の変容や考えの深まりを実感することができた。
- ・ロイロノート等を活用し、考えを共有する活動を通じて、友達の考えに触れ、それをもとに自分の考えを再構築する場面が見られた。こうした協働的な学びは、結果として個別最適な学びへとつながっていった。
- ・授業を参観し合うことは、自身の指導方法を振り返るきっかけとなり、授業改善と質の向上にもつながった。さらに、校種の異なる学校の授業を参観することで、小学校と中学校の教員間に交流が生まれ、教員同士のコミュニケーションの活性化や、教育の円滑な接続にも寄与したと考える。
- ・4校で共通のタブレット端末利用に係るきまりを策定したことで、小・中9年間を見据えた一貫したルールやマナーの指導を行うことが可能になった。
- ・鳥栖市内の他の中学校区の ICT 推進リーダーの方々からも関心が寄せられ、各中学校区における ICT 推進の拡大につながった。

【課題や改善策】

- ・「見通し」や「振り返り」が『とりあえず書く』だけの形式的なものになってしまい、学習における価値が薄れてしまうことがある。これらを効果的に機能させるためには、導入時やまとめの場面にとどまらず、児童生徒が自らの学びの意味を見出せるよう、計画的な指導と丁寧な支援が求められる。

- ・協働的な学びにおいては、タブレット端末の活用にこだわらず、ノートやポスターセッションと同様に、タブレット端末も1つの手段として位置づけることが大切である。今後は、児童生徒の実態を踏まえ、学習内容に応じて適切に手段を選択し、よりよい協働的な学びを目指していきたい。
- ・タブレット端末は、協働的な学びを支援する有効なツールであるが、その活用目的と方法を明確にし、児童生徒の主体性や対話を重視した学びの計画を立てることが重要である。
- ・小学校では中学校進学を見据え、タイピング入力スキルの向上に力を入れて取り組んできた。今後は、ICT ツールの操作スキルについて4校で検討し、中学校へのスムーズな移行を目指したい。

【田代中学校の実践】

指導案① 第3学年 数学科学習指導案 ※主体的な学びの視点

《本授業の主張》

本単元で学んだ知識を活用し、ピザの大きさと値段の関係についての問題に取り組むことで、単元全体を振り返りつつ、生徒の思考・判断・表現力を向上させる。

1 単元名

関数 $y=ax^2$

2 単元の目標と評価規準

(1) 単元の目標

- ・関数 $y=ax^2$ についての基礎的な概念や原理・法則などを理解するとともに、事象を数学化したり、数学的に解釈したり、数学的に表現・処理したりする技能を身に付ける。 [知識・技能]
- ・関数関係に着目し、その特徴を表、式、グラフを相互に関連付けて考察し表現することができる。 [思考・判断・表現]
- ・関数 $y=ax^2$ について、数学的活動の楽しさや数学のよさを実感して粘り強く考え、数学を生活や学習に生かそうとする態度、問題解決の過程を振り返って評価・改善しようとする態度を身に付ける。

[主体的に学習に取り組む態度]

(2) 単元の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
・関数 $y=ax^2$ について理解している。 ・事象の中には、関数 $y=ax^2$ として捉えられるものがあることを知っている。 ・いろいろな事象の中に、関数関係があることを理解している。	・関数 $y=ax^2$ として捉えられる二つの数量について、変化や対応の特徴を見だし、表、式、グラフを相互に関連付けて考察し表現することができる。 ・関数 $y=ax^2$ を用いて具体的な事象を捉え考察し表現することができる。	・関数 $y=ax^2$ のよさを実感して粘り強く考え、関数 $y=ax^2$ について学んだことを生活や学習に生かそうとしたり、関数 $y=ax^2$ を活用した問題解決の過程を振り返って評価・改善しようとしたりしている。

3 指導と評価の計画（全4時間）◎記録に残す ○指導に生かす

時間	学習活動	知	思	主	評価規準（評価方法）
1	■具体的な事象における二つの数量の関係を表、式、グラフを用いて表現することができるようにする。 ・速さと制動距離の関係やふりこの長さと周期の関係について考察する。	○	○		・速さと制動距離の関係やふりこの長さと周期の関係について式で表すことができる。また、その式をもとに問題解決ができています。（行動観察）
2	■具体的な事象から二つの数量を取り出し、その関係を表、式、グラフを用いて表現することができるようにする。 ・ある線上に並んでいる2つの三角形のうち、一方の三角形が線上を動いたとき、重なってできる部分の面積について考察する。	○	○		・重なってできる部分の面積を式やグラフに表すことができる。また、考察したことをもとに問題解決ができています。（行動観察）

3	■ 1つの式に表すことができない関数や、変化のようすが一定ではない関数について理解できるようにする。 ・ レンタサイクルの料金が借りる時間の関数であることをもとに、xの変域やyの値、グラフを考察する。	○	○	◎	・ レンタサイクルの料金について表、グラフに表し、その関係を理解できている。また、考察したことをもとに問題解決ができている。(行動観察、振り返りシート)
4 本時	■ 関数 $y=ax^2$ を利用して問題を解決することができるようにする。 ・ 日常生活への活用に関する問題を考察する。	○	◎	◎	・ 関数 $y=ax^2$ を用いて具体的な事象を捉え考察し表現することができる。(行動観察、ワークシート、振り返りシート)

4 本時について（本時 4 / 4 ）

（1）目標【評価の観点】

日常生活への活用に関する問題を、関数 $y=ax^2$ を利用して解決することができる。【思考・判断・表現】

（2）展開

過程	学習活動	教師の指導・支援等（○）と評価（◆）
導入	1. 問題を把握する。 数学ピザのMサイズ（半径12cm）の値段は1280円です。この値段は、関数 $y=ax^2$ を利用した、『数学ピザの公式』に基づいて設定されています。数学ピザのSサイズ（半径10cm）とLサイズ（半径17cm）の値段はいくらでしょうか。ただし、円周率を3.14とします。	○日常生活と結び付けた問題を設定することで、本時の学習内容に興味や関心をもたせるようにする。 ○<u>パワーポイントで示しながら、与えられている条件を視覚的に把握することで、問題場면을捉えることができるようにする。</u>
	2. 結果を予想し、問題解決の見通しをもつ。	○問題から導かれるであろう結果を予想することで、問題の条件や考え方について見当を付けることができるようにする。
展開	3. 数学ピザの公式を見だし、値段を求める。 ・ 何を x、y とするかを考える。 ・ 問題の中の数量やその関係について考える。 ・ 数学ピザの公式 ピザの半径 x cm、値段を y 円とすると（およそ）$y=8.88x^2$ と表される ・ 公式の x に値を代入して値段を求める。	○タブレットを活用し、ワークシートを一人一人に配付することで、個人で解き方を考えることができるようにする。 ○公式を正しく導けない生徒には、値段がピザの半径の関数であることに着目させて関数 $y=ax^2$ に表すことで、解決のきっかけを見いだすことができるようにする。
	4. 他者と協力し、答えを見いだす。 ・ グループで活動する。 ・ グループで作ったデータを回収する。 5. 全体で共有する。	○ワークシートに考えを記述し、話し合うことで生徒同士が可視化された考えを共有できるようにする。 ○自分の考えが記述されたワークシートを使って、自分の考え方や他者の考え方を検討することで、論理的、統合的・発展的に考察できるようにする。

		◆他者の考え方に目を向け、自分にとって必要な考え方を取り入れようとしているか。【主体的に学習に取り組む態度】 ◆問題の解決に有効であった方法などを記述しているか。
終末	6. 追加問題に取り組み、問題を解決する。 数学ピザの目玉商品である『10000円ピザ』の半径は何cmでしょうか。 7. 本時の学びを振り返る。 ・数学ピザの半径と値段の関係を、関数 $y=ax^2$ として表すことができる。 ・大きさや値段を、相互に予想したり設定したりできる。	◆評価規準 関数 $y=ax^2$ を用いて具体的な事象を捉え考察し表現することができたか。 【思考・判断・表現】（ワークシート） B：数量の関係を捉え、関数 $y=ax^2$ で表すことで問題を解決することができた生徒には、自分で別の条件を設定し、問題を考察してみるよう助言する。 C：数量の関係を捉えられない生徒には、ピザの大きさが決まるとどのように値段が決まるのかを考えさせ、面積 1 cm^2 あたりの値段に着目させながら関数 $y=ax^2$ の関係を見いだせるよう助言する。

5 授業研究会より

成果

☆生徒の解答をタブレットで自由に見られるところがよい。自分のたしかめにも、周りの意見を参考にするのにも使える。

- ・タブレットや学習プリントを、自分で選択して学習課題に取り組めるところがよかった。
- ・10000円ピザを実際につけて（紙だけ）、見ることで大きさを実感できたのがよかった。
- ・題材が身近に感じられるものだったので、とても面白かった。

課題

☆生徒の解答を比べるため、横並びで板書を書かせるときにより工夫できる場所があったのでは。

- ・小数を表すとき、既習内容の「有効数字」を助言することもできたのでは。
- ・ピザの形を円にしているが、実際には四角形のものもある。
- ・ピザを単純な平面として考えたが、厚さを取り入れて体積を検討したり、トッピングを追加してより複雑にした問題につなげたりできる。

指導案② 第1学年 体育科学習指導案 ※協働的な学びの視点

《本授業の主張》

生徒が自身や仲間の技の課題を発見しやすいように、各自の動きを動画撮影し模範動画と見比べ、課題解決に取り組めるようにする。本時ではグループ活動することで互いの動きを見て、教え合いをし、技能を身につけることができるようにする。

1 単元名 B 器械運動 ア「マット運動」

2 単元の目標及び評価規準

(1) 単元の目標

- ・技ができる楽しさや喜びを味わい、器械運動の特性や成り立ち、技の名称や行い方、その運動に関連して高まる体力などを理解することができる。【知識】
- ・回転系や巧技系の基本的な技を滑らかに行うこと、条件を変えた技や発展技を行うこと及びそれらを組み合わせることができる。【技能】
- ・技などの自己の課題を発見し、合理的な解決に向けて運動の取り組み方を工夫するとともに、自己の考えたことを他者に伝えることができる。【思考・判断・表現】
- ・器械運動に積極的に取り組むとともに、よい演技を認めようとする、仲間の学習を援助しようとする、一人一人の違いに応じた課題や挑戦を認めようとするなどや、健康・安全に気を配ることができる。【学びに向かう力・人間性】

(2) 単元の評価規準

知識	技能	思考・判断・表現	学びに向かう力、人間性
・マット運動の多くの技に挑戦し、技ができる楽しさや喜びを味わうことができることについて、言葉にしたり、記述したりしている。 ・発表会の行い方や評価方法、運営の仕方について学習した具体例を挙げている。	・回転系や巧技系の技を一連の動きを滑らかに安定させることができる。 ・開始姿勢や終末姿勢、組合せの動きや支持の仕方などの条件を変えて回ったり、静止したりすることができる。 ・学習した基本的な技や発展させた技の中から、「はじめ—なか—おわり」に構成し、演技することができる。	・選択した技の行い方や技の組合せ方について、自己や仲間の動きを比較して、成果や改善すべきポイントを仲間に伝えている。 ・健康や安全を確保するため、体調や環境に応じた適切な練習方法等について考えることができる。	・マット運動の学習に自主的に取り組もうとしている。 ・仲間のよい演技を見つけたり、援助したりしようとしている。 ・健康・安全を確保している。

3 単元の授業過程（全8時間）

学習活動	時間	教師の指導・支援	評価とその方法
1 特性や成り立ち、技術の名称や行い方を学ぶ	0.5	・技術の名称や行い方の動画を電子黒板に掲示し、ポイントを確認させる。	特性や成り立ち、技術の名称や行い方を理解することができる (観察・ワークシート)
2 マット運動の技の系統性などの知識を理解する	0.5	・技の動画を見させることで技の統性を意識できるようにする。	マット運動の技の系統性などの知識を理解することができる (観察・ワークシート)

3 基本的な技や発展を習得する	2	・タブレットで動画を撮影し、模範動画を比べ、自分や仲間の課題を発見できるようにする。	基本的な技や発展技の行い方を理解し、技を習得することができる。 (観察・ロイロノート)
4 技の完成度を高め、新しい技に挑戦する	3 (本時)	・技の動画をロイロノートに配信することで、技のポイントを意識して、新たな技に挑戦できるようにする。	これまで習得した知識や技能を生かして、技の完成度を高め、新しい技に挑戦することができる。 (観察・ロイロノート)
5 習得した技を組み合わせる	2	・技のつなぎ方の工夫させる。	習得した技を組み合わせで演技することができる。 (観察・ロイロノート・発表会)

4 本時の授業

(1) 本時の指導目標

自己や仲間の技の課題を発見し、課題解決に向けて工夫することで、技の完成度を高め、自分にあった新しい技に挑戦することができるようにする。

(2) 本時の評価規準

技の完成度を高め、新しい技に挑戦することができる。

【思考・判断・表現】

(3) 本時の授業過程 (4 / 8 時間)

過程	学習活動	形態	教師の指導・支援	評価とその方法
導入	1 準備運動をする。 ・ランニング（体育館 3 周） ・準備体操 ・補強運動	一斉 G	・技の練習時にけがをしないように入念に準備運動を行うよう促す。 ・グループごとに準備体操、補強運動を行わせ、グループごとに整列させる。	
	2 整列・挨拶をする。		・前時までの振り返りを行う。	
	3 本時の流れとめあてを確認する。	G	・電子黒板に本時の流れやめあて、場の使い方を掲示する。 ・本時で取り組む技を決めさせ、学習カードに記入させる。 ・活動するグループで取り組む技や課題を共有させる。	
	めあて：技の完成度を高め、自分にあった新しい技に挑戦することができる。			
展開	4 グループに分かれて練習を行う。	G	・はじめに、今できる技の完成度を高める時間にし、その後新しい技に挑戦する時間にする。	
	・今できる技の完成度を高める練習を行う。 ・動きの動画撮影を行う。 ・自己や仲間の動きについて話し合いを行う。		・グループ中で技を行う人と動画を撮影する人を交互に行わせる。（見学者がいるグループは見学者に動画撮影をしてもらう） ・お手本の動画と自分の動画を比べてどこ	

	・話し合いで出た課題を意識して繰り返し練習を行う。 ・新しい技に挑戦する。 ・動きの動画撮影を行う。 ・自己や仲間の動きについて話し合いを行う。 ・話し合いで出た課題を意識して繰り返し練習を行う。		・に課題があるかをグループで話し合わせる。 ・グループで出た課題を意識して、技の完成度を高めたり、新しい技に挑戦したりするように促す。 ・つまづいてるグループには、技のポイントなどを個別に伝える。	・技の完成度を高め、新しい技に挑戦することができる。(観察)
終末	5 道具の片付けをする。 6 振り返りを行う。 7 次時の確認を行う。 8 整列・挨拶をする。		・全員で協力して安全に片付けさせる。 ・タブレットを活用し、グループでの反省をさせ、個人の振り返りを行わせる。 ・できたことを賞賛する。 ・次時の活動について、ねらい等を説明する。 ・体調不良者、負傷者がいないか確認し元気よく挨拶させる。	

5 授業研究会より

成果

☆ロイロノートで、いつでも手本動画を参考にできる環境がとても良かった。

- ・一人ではなく、補助を入れてグループで正しいやり方を目指し、お互いに協力できていた。
- ・チャレンジした生徒に拍手を送るなど、温かいムードがあった。
- ・グループ内で技ができた時に、「すごい」「うまい」等の自然な声かけがあり、生徒のやる気向上につながっていた。

課題

☆動画をただ観ている生徒もいた。一時停止やスロー再生などの操作に慣れていないのかも。

- ・話し合いと活動の区切りがあいまいだったので、指示を聞けていない生徒がいた。
- ・上手な生徒の演技を事前に録画しておく、もっと生徒を惹きつけられると思う。

指導案③ 第1学年 理科学習指導案 ※協働的な学びの視点

《本授業の主張》

グループでばねの伸びを測定した結果を、タブレットで記録することで、よりきれいなグラフの作成や作業の時間短縮につなげ、ばねに加わる力の大きさとばねの伸びについての関係性を理解できるようにする。

1 単元名 力のはたらき

2 単元の目標

- (1) 力の働きに関する事物・現象を日常生活や社会と関連付けながら、力の働きについての基本的な概念や原理・法則などを理解しているとともに、科学的に探究するために必要な観察、実験などに関する基本操作や記録などの基本的な技能を身に付けること。【知識・技能】
- (2) 力の働きについて、問題を見だし見通しをもって観察、実験などを行い、力の働きの規則性や関連性を見いだして表現すること。【思考・判断・表現】
- (3) 力の働きに関する事物・現象に進んで関わり、見通しをもったり振り返ったりするなど、科学的に探究しようとする態度を養うこと。【主体的に学習に取り組む態度】

評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
力の働きに関する事物・現象を日常生活や社会と関連付けながら、力の働きについての基本的な概念や原理・法則などを理解しているとともに、科学的に探究するために必要な観察、実験などに関する基本操作や記録などの基本的な技能を身に付けている。	力の働きについて、問題を見だし見通しをもって観察、実験などを行い、力の働きの規則性や関係性を見いだして表現しているなど、科学的に探究している。	力の働きに関する事物・現象に進んで関わり、見通しをもったり振り返ったりするなど、科学的に探究しようとしている。

3 単元計画（力のはたらき 7時間）

時間	学習活動	知	思	主	評価規準（評価方法）
1	■ 物体が力を受けているときに見られる現象について説明できる。 ・ 力を探して分類する。			○	・ 具体的に力が働く場面をあげて適切に説明することができる。
2	■ 力を矢印で表すことができる。 ・ 力の表し方を練習する。	○			・ 力を矢印を使って表すことができる。
3	■ 物体に力を働かせる実験を行うことを通して、ばねに加わる力の大きさとばねの伸びの関係について見い出することができる。 ・ ばねに加える力の大きさとばねの伸びとに関係があることを理解する。		◎		・ ばねの伸びの変化を調べる実験を行い、ばねに加わる力の大きさとばねの伸びは、どのような関係があるのか気づき、ばねの伸びちがいについて自分の言葉で表現することができる。（ワークシート） ・ ばねの伸びとばねに加える力について、グラフに表すことができる。（ワークシート）

4	■ ばねの伸びと力の大きさの関係をグラフ化し、比例関係を読み取ることができる。 ・前時の実験結果からばねの伸びとばねに加える力の関係について整理する。		○		・グラフからばねの伸びと力の大きさのグラフから比例関係を読み取ることができる。
5	■ 2力がつり合う時の条件を理解できる。 ・つり合っている2力からつり合いの条件を見い出す。	◎			・2力がつり合う時の条件を説明することができる。
6	■ 2つの力がつりあう時の条件を理解できる。 ・2力のつり合いを使って表すことができる。	○			・2力のつり合いを矢印を使って表すことができる。

4. 本時について

(1) 目標

力の大きさとばねの伸びの関係を調べる実験を行い、力の大きさとばねの伸びが比例することを見いだして表現している。【思考・判断・表現】

(2) 指導過程

過程	学習内容・活動	形態	教師の支援・指導と評価
導入	1 力の種類のふりかえりをする。 ・弾性力・摩擦力 ・磁力・電気の力・重力	一斉	・力のはたらきには、「形を変える」「持ち上げたり支えたりする」「動きを変える」の3種類があることを思いださせるために、ばねに力を加えるようすを演示する。
	2 めあてを知る。	一斉	
	ばねに加わる力の大きさとばねの伸びは、どのような関係があるのだろうか。		
展開	3 実験をする。 ①実験装置を組み立てる。 ②ばねの伸びを測定する。 ③おもりの数を増やしていき、ばねの伸びを測定する。	班	・実験の手順の確認。 ・電子黒板に実験の手順を提示する。 ・実験中は安全面に注意するため机間指導を行う。
	4 結果をまとめる。 ・結果をグラフに表す。	班	・全ての生徒が活動に参加できるよう、机間指導をしながら助言を行う。
	5 実験の結果から考察する。 ・ばねに加わる力の大きさとばねの伸びは、どのような関係があるのか考える。	班	・ばねに加わる力が大きくなると、ばねの伸びはどのようになるかという視点を与える。 ・強さのちがうばねのグラフには、どのような共通点や相違点があるかという視点を与える。

	評価 ばねの伸びの変化を調べる実験を行い、ばねに加わる力の大きさとばねの伸びは、どのような関係があるのか気づき、ばねの伸びちがいについて自分の言葉で表現することができる。【思考・判断・表現】 A：ばねに加わる力の大きさとばねの伸びが比例していることに気づきその理由をグラフの結果を使って表現することができる。 B：ばねに加わる力の大きさとばねの伸びが比例していることに気づくことができる。 C：班員と相談し、関係が分からない場合は、グラフの形に目を向けるよう助言する。		
まとめ	6 実験結果や考察を整理し、授業のふりかえりを記入する。	一斉	

5 授業研究会より

成果

☆タブレットを活用し、10班分のデータがすべて見られるのがよかった。

- ・実験道具や重さがランダムなことなど、工夫があってよかった。

課題

☆実験しながらタブレットを扱った方が効率的ではあったが、使い方など慣れておらず、時間を区切って行うことになってしまった。継続的にタブレットを生徒に使わせていくことが大切である。

- ・考察を書く力が低いので、思考力をUPさせたい。また、生徒の発言が少なかったなので工夫をしていきたい。

指導案④ 第2学年 英語科学習指導案 ※主体的な学びの視点

《本授業の主張》

生徒が単元のゴール（CMのプレゼン）を見据え、魅力を伝えるコツや興味を引くフレーズを使いながら、紹介文を書けるようにする。また、同じジャンルのグループに分かれ、互いに助言しあったり、改善点を共有させたりすることで、よりよい紹介文につなげられるようにする。

1 単元名 Our Project 4 海外でヒットするラーメンのCMを作ろう

2 単元の目標

- (1) 聞き手が理解しやすい説明になるよう、適切な語句や表現を身につけている。【知識・技能】
 (2) 考えた新メニューの魅力が伝わるよう、聞き手を引きつける工夫をしている。

【思考・判断・表現】

- (3) 意見交換を積極的に行い、自分やグループの成果を高めようとしている。

【主体的に学習に取り組む態度】

単元の評価規準

ア 知識・技能	イ 思考・判断・表現	ウ 主体的に学習に取り組む態度
・聞き手が理解できるよう、分かりやすく伝える表現を身につけている。	・商品の魅力を効果的に伝えるために、構成や表現を工夫して書いたり話したりしている。	・積極的に意見を出し合い、他者の意見を参考に、協力して主体的に課題を達成しようとしている。

3 単元計画

時間	学習活動	教師の指導・支援	具体的な評価とその方法
1	・ALTによるスリーヒントクイズを楽しむ。 ・班でスリーヒントクイズを作成・発表する。	・ものの特徴はマッピングを使って整理させる。 ・クイズ形式でもものの説明をするなど、英語に親しみを持たせる。	様々なものを別の語句や表現を使って言い換えている。 (ア・ウ：観察・ワークシート)
2 3 (本時)	・おすすめメニューの魅力を整理する。 ・魅力を伝えるためのコツを知る。 ・おすすめメニューを紹介するための簡単な文章を書く。	・パワーポイントを使用し、活動の流れや例を視覚的にも表示する。 ・CM作成時に参考になるよう、文章構成のポイントを押さえる。	おすすめメニューの魅力を5文以上で伝えている。 (イ：ワークシート)
4	・海外のCMを聞き、内容を理解する。 ・CMの台本を読み、商品の魅力を伝えるためのポイントを知る。	・CM作成時に参考になるポイントを確認させる。	CMが伝えている商品についての要点をまとめている。 (ア：ワークシート)
5 6	・グループで、給食の新メニューを考える。 ・新メニューの特徴や、CMの構想を考える。 ・グループで役割を決め、CM台本を作成する。	・見通しを持たせるために、評価規準を提示しておく。 ・グループで役割を分担し、個人が責任を持って参加できるようにする。	グループで意見交換を行い、CMの完成度を高めようとしている。 (ウ：観察・振り返りシート)

7	・完成した CM の発表と評価を行う。	・評価規準に沿って、自己評価と他者評価を行い、良い点や改善点を今後につなげさせる。	商品の魅力が伝わるように工夫して発表をしている。 (イ：観察・ワークシート)
---	---------------------	---	---

4 本時の指導

(1) 目標 おすすめメニューの魅力が伝わるように、構成や表現を工夫して、5 文以上の文章を書く。

(2) 展開

過程	学習活動	形態	教師の指導・支援	評価とその方法
導入	1 greeting	斉	・日常的な表現のスペルを確認させる。	
	2 warming-up Teacher's recommendation	斉	・教師のおすすめメニュー紹介を聞いて、本時のゴールのイメージを持たせる。 ・ペアで紹介内容の確認をし、話の手順や内容の理解を深めさせる。 めあて：魅力を伝えるコツを使って、おすすめメニューを紹介しよう！	
展開	3 making a mapping	個	・前時に挙げたおすすめメニューの魅力から、要点を絞り、マッピングを使って順序を分かりやすくする。	
	4 knowing how to express	斉	・電子黒板で例を提示する。 Ex) ingredients/looks/taste/cost/calorie... ・例文を挙げながら具体的な使い方を提示する。 Ex) 問いかけ、ナンバリング ・既習の表現は、生徒との会話から引き出せるよう促す。	
	5 writing ・構成や表現を工夫して、おすすめメニューの魅力を 5 文以上で書く。	個	・マッピングで整理させた事柄について記述させる。 ・教科書で使われている問いかけ、ナンバリング、決め台詞を参考にさせる。	・魅力を伝えるコツを使って、おすすめメニューの紹介を 5 文で書いている。 (ワークシート)
	・グループで読み合い、アドバイスしあう。	班	・同じジャンルのグループに分かれ、分かりづらかった点や改善点を共有させる。 Ex) 6 文以上、多面的な魅力、既習の語句や表現 ・グループで出たアドバイスをいくつか取り上げる。	

【田代小学校の実践】
指導案① 第6学年 社会科学学習指導案

《本授業の主張》

歴史学習の導入として、歴史の年表の見方や、全体を見通した学習内容を提示することで、これからの歴史学習に対する意欲や展望をもてるようにしていく。特に、綱吉の資料を1時目、2時目それぞれで提示して資料を根拠に自分の考えが変容・更新したことを実感できるようにさせたい。

1 単元名「綱吉は暗君？それとも名君？」

2 単元の目標 及び 評価基準

(1) 単元の目標

- ・歴史の年表の見方や、全体を見通した学習内容を提示することで、歴史の学び方を知ることがきる。【知識・理解】
- ・資料をもとに、自らの立場について根拠をもって表現し、綱吉の業績について自ら選択・判断をすることができる。【思考・判断・表現】
- ・学習をふり返り、それぞれの意見を価値付けることで、資料を根拠に自分の考えが変容・更新したことを実感することができる。【主体的に学習に取り組む態度】

(2) 単元の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
年表の見方を知り、全体を見通した学習内容を提示することで、歴史の学び方を知ることができる。	資料をもとに、自らの立場について根拠をもって表現し、自ら選択・判断をすることができる。	資料を根拠に自分の考えが変容・更新したことを実感することができる。

3 単元計画（全2時間）

学習内容	時間	指導および支援	評価とその方法
○歴史の学び方を知る。 ○綱吉について知り、最初の立場を明確にする。	1	○歴史の年表の見方や、全体を見通した学習内容を提示することで、これからの歴史学習に対する意欲や展望をもてるようにしていく。 ○綱吉の人柄を提示し、生類憐れみの令の資料を提示することで、次時の学習で自分の考えが変容・更新したことを実感できるようにする。	・綱吉に対する評価を明確にし、資料を根拠にその理由を表現することができる。（ノート・ワークシート）
○綱吉に関わる新たな資料をもとに、最終的な自分の立場を決める。	1	○前時とは違う側面の資料を提示し意見を交流することで、資料を根拠に自分の立場を明確にできるようにする。 ○本時の学習をふり返り、それぞれの意見を価値付けることで、資料を根拠に自分の考えが変容・更新したことを実感できるようにする。	・綱吉に対する評価を明確にし、資料を根拠にその理由を表現することができる。（ノート・ワークシート）

4 本時の授業（1／2時）

（1）本時の目標

資料をもとに、自らの立場について根拠をもって表現し、自ら選択・判断できる。

（2）本時の評価基準

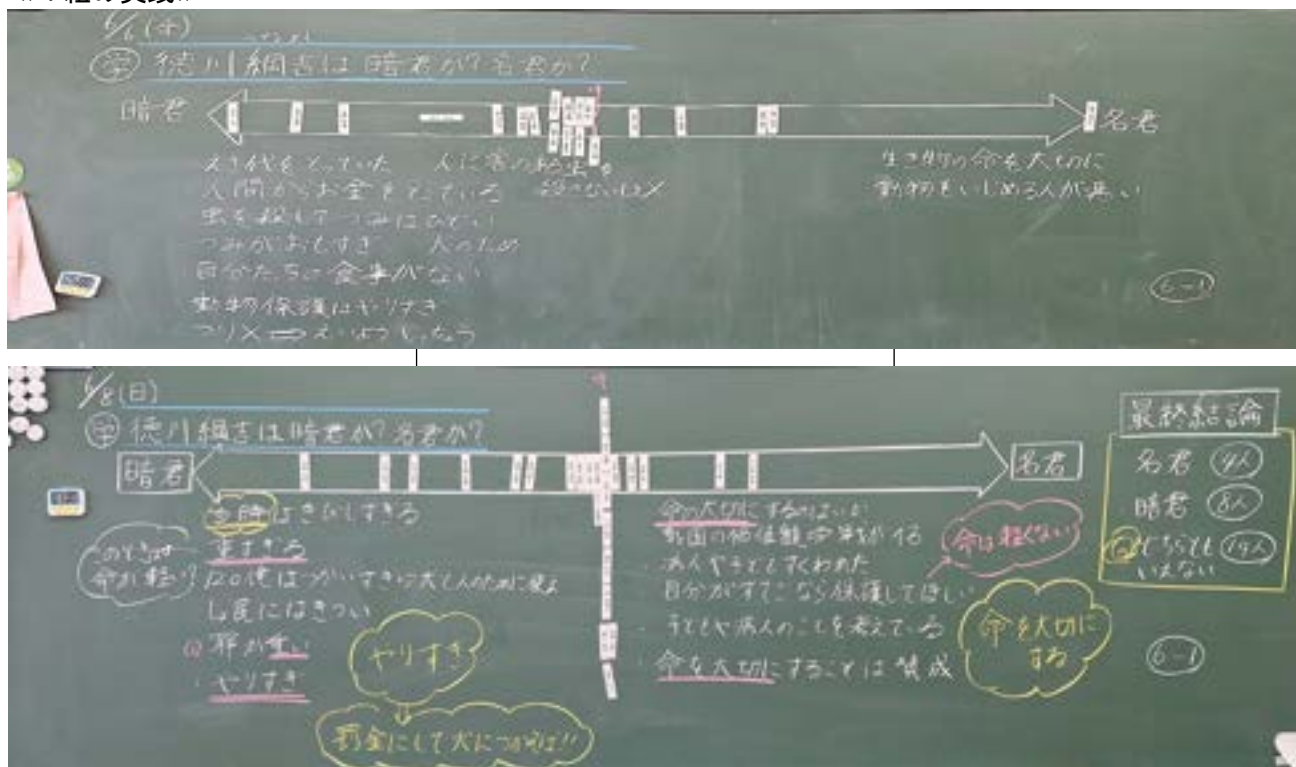
資料をもとに、自らの立場について根拠をもって表現し、綱吉の業績について自ら選択・判断させる。【思考・判断・表現】

過程	学 習 活 動	形態	教 師 の 働 き か け と 評 価	評価とその方法
導入 (1時目)	1. 歴史を学習する上での視点を知る。 2. 本時の学習問題をつくる。	斉 斉	○歴史の学び方や年表の見方などを伝えることで、児童にこれからの歴史学習についての期待感や学習への展望をもつことができるようにする。 ○徳川綱吉と生類憐れみの令の概要を伝え、本時の学習問題につなげる。 徳川綱吉は暗君か、それとも名君か？	
展開 (1時目)	3. 綱吉に関する資料（資料1～5）を使い、自分の立場を明確にして綱吉を評価する。		○1時間目は暗君寄りの立場が増えるように意図して、綱吉や生類憐れみの令の悪い側面についての資料を中心に提示する。2時間目は、良い側面や当時の時代背景を提示する。そうすることで、それぞれの資料を根拠に、綱吉に対する評価を判断できるようにしていく。	
	4. 資料を根拠にして、自分の意見を交流する。 【予想される記述】 ・生類憐れみの令でたくさんの人が処罰されているから、暗君だと思う。 ・犬ばかり大切に、庶民が苦しんでいるから、暗君だと思う。 ・武力より学問に力を入れているから名君だと思う。		○暗君か名君かの立場を明確にし、ペアで意見を交流することで、どの資料を根拠に自分の考えをもったのかを実感できるようにする。 ○タブレットを使い、自分の立場を書いたものを提出できるようにしておくことで、全員が自分の立場を明確にした意見をもつことができるようにする。	資料をもとに、自らの立場について根拠をもって表現し、綱吉の業績についての自ら選択・判断をすることができている。 【思考・判断・表現】（ノート・ワークシート）
	5. グループで最初の評価について伝え合う。		○児童の名札を使って、暗君寄りか名君寄りを黒板に掲示できるようにすることで、自分の評価を明確にすると共に、自分事として議論に参加できるようにする。 ○グループで自分の評価とその理由を伝え合うことで、全体で交流するときに自分と他者の意見を比較しながら考えることができるようにする。	
終末	6. 全体で意見を交流する。		○他者の意見を聞いて自分の意見を変えても良いことを伝えておくことで、他者の考えに触れることの良さに気付くことができるようにする。	

5 主体的・対話的な学びに向かうための授業実践

本単元は2時間構成で進めた。資料を根拠に討論し、自分の結論を導くことを目標にして進めた。1時間目は、徳川綱吉について、悪い評価の資料を提示した。2時間目は、1時間目の資料に加え、綱吉に対する良い評価の資料を提示した。そうすることで、資料を根拠に自分の考えを吟味したり、他者の考えを取り入れた考えをもったりすることができ、自分事として議論することができるのではないかと考えた。本報告では、1組の実践内容について報告し、分析を行う。

《1組の実践》



【図1 1組の2時間目の板書】

1組の実践では、1時間目は、悪い評価に関わる資料を配布し、その資料を根拠に自分の考えを書いていた。これまでの社会科の授業では資料を根拠に話す児童は少なかったが、ほとんどの児童が資料を根拠に自分の考えを書くことができていた。しかし、資料を読み込むという経験が少なかったためか、数枚の資料のみで自分の考えを出す児童が多かった。2時間目は、1時間目の資料に加え、良い評価の資料を提示した。1時間目で資料を読むことができたようになったためか、具体的な理由を書く児童が増えた。その上で、

討論の中で、他者の意見を基に自分の考えを変える児童も出てきた。その結果、写真2のように、暗君、名君どちらの意見も同じくらい出て、討論を深めることができた。

単元のふり返りでは、全ての児童が資料を根拠に自分の考えを書くことができたと評価していた。

④ 徳川綱吉は暗君か？それとも名君か？		・暗君→民衆を苦しめる、まちがった政治を進める君主 ・名君→民衆のための素晴らしい政治を進める君主	
暗君 ← ① ③ ② → 名君			
自分の評価 名君	最終評価 名君		
評価の理由 戦国時代の価値観が残って中 命を大切にするのは大切だと思う。 その後の時代でも命を大切にするのは残って い3からいい これもあて戦も減ったと思う。 でもたまた罪が重いのは良くない。	学習のふり返り 達成度 (J) 2人かいたことで 今戦争がないと思う		
参考にした資料の番号 資料⑥①②⑧⑨	ふり返りの達成度 A…二つ以上の資料を使って理由を書くことができた B…評価の理由を書くことができた C…暗君か名君かを決めることができた		

【図2 児童のワークシート】

6 研究の成果と課題

(1) 成果について

本実践では、資料を根拠に討論を行うことで、主体的に問題に関わることができるのではないかと考えて実践を行った。

今回の実践での成果として、討論における資料提示は有効であることが分かった。さらに、議論を進める中で、「当時の価値観」と「現在の価値観」の違いや「将軍（支配層）」と「町民（被支配者層）」の立場による違いに着目する児童も出てきた。社会科の多面的・多角的な見方を生み出すことができたことは、本実践の成果と言えるのではないだろうか。

(2) 課題について

社会科の多面的・多角的な見方を生み出すには前提条件となることが分かった。その前提条件とは、資料を読み込むための時間の確保と、資料内容の理解が学級内で共有されているということである。今後は、資料をどのように共有していくかを研究していきたいと考える。

指導案② 第6学年 国語科学習指導案

《本授業の主張》

この学習は対話活動を通して、改めて一緒に学ぶ仲間のことを知り、考えを広げたり深めたりできる単元である。児童は自分の考えを表すことには慣れてきているが、互いの発表に対して意見を述べたり、質問したりすることには苦手意識をもっている。「いちばん大事なもの」という児童にとっても身近な話題で、互いの考えに質問し合う環境を作ること、自分だけではたどり着けなかった考えにふれる機会を作り、対話の良さに気付けるようにしたい。

1 単元名 いちばん大事なものは

2 単元の目標 及び 評価規準

(1) 単元の目標

- ・原因と結果など情報と情報との関係について理解することができる。【知識・技能】
- ・互いの立場や意図を明確にしながら計画的に話し合い、考えを広げたりまとめたりすることができる。【思考・判断・表現】

(2) 単元の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
・原因と結果など情報と情報との関係について理解している。	・「話すこと・聞くこと」において、互いの立場や意図を明確にしながら計画的に話し合い、考えを広げたりまとめたりしている。	・積極的に考えを広げ、学習課題に沿って考えを尋ね合おうとしている。

3 単元の授業過程（全2時間）

学習活動	時間	教師の指導・支援	評価とその方法
1 学習のテーマに合った自分の考えをもち、ピラミッドチャートやクラゲチャートの思考ツールに表す。（資料1，2）	1	・「好きなこと、興味のあること」などの問いかけから児童の考えを引き出す。 ・動画を見せることで、思いを醸成できるようにする ・思考ツールを用いることで、児童の考えや思いを引き出し、整理できるようにする。	・思考ツールを効果的に活用し、自分の考えを整理、表現することができる。（ロイロノート）
2 他者と意見の交流をし、自分の考えを広げたり、深めたりする。	1 （本時）	・対話カードで複数の視点で質問を選ぶことができるようにすることで、より深く児童が質問できるようにしていく。 ・考えの深まった児童を価値づけることで、対話が自分の考えを広げたり、深めたりすることを実感できるようにする。	・対話を通して広がったり、深まったりした考えをまとめている。（ワークシート、ロイロノート）

4 本時の授業（全2時間）

(1) 目標

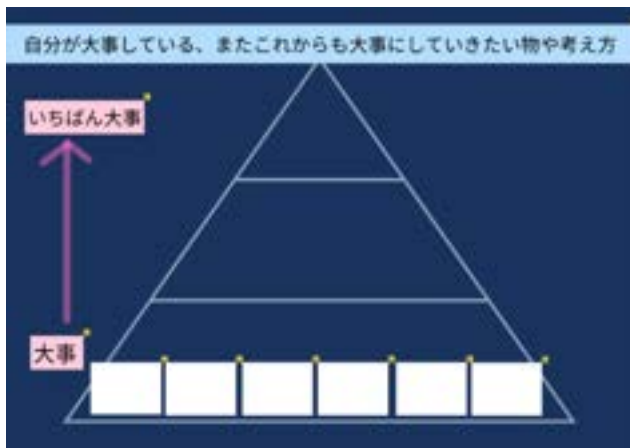
互いの意見の交流を楽しみながら、相手のことを知りたいという思いを高めることで、自分の考えを広げたり、深めたりできるようにする。

(2) 評価規準

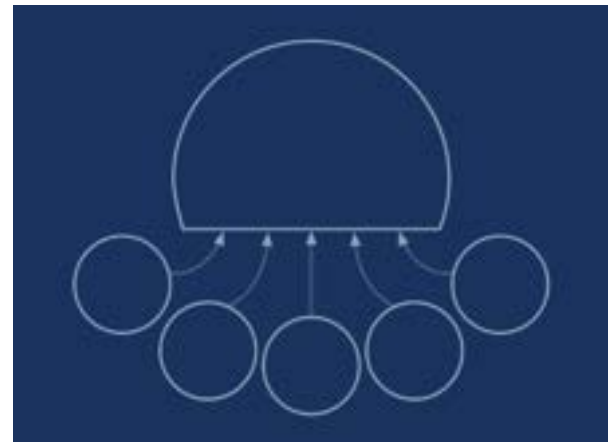
思いを伝え合うことで、自分の考えがどのように広がったり、深まったりしたかを実感することができる。【思考・判断・表現】

(3) 学習過程（2／2時間）

過程	学習活動	教師の指導・支援	評価とその方法
導入	1 前時のふりかえりを する。	・クラゲチャート（資料2）を確認 することで、前時までに構築した考 えを確かめることができるように する。	
	2 本時のめあてを知る。		
	㊦ いちばん大事なものを伝え合い、自分の考えを深めよう。		
	3 本時の学習活動の見通 しをもつ。	・本時の流れや評価規準（資料3） を示し、学習の見通しをもたせる。	
展開	4 クラゲチャート（資料 2）を見ながら、発表の 練習をする。	・型（資料4）を提示することで、 発表しやすい雰囲気をつくる。	
	5 グループで意見交流を する。 (1)3 人のグループで交流す る。 (2)同じテーマの人と交流す る。	・話し合いのグループや交流の仕方 を確認する。 ・前時に高まっている交流したいと いう意欲を生かし、他者と積極的に 関わらせるようにする。 ・対話カード（資料5）で複数の視 点で質問を選ばせることで、より深 く質問できるようにしていく。 ・協働的な学びを推進する質問をし ている児童の発言を価値付け、全体 に波及させていく。 ・追加する理由はカードの色を変え させることで、考えの広がり进行分 かりやすくする。	・自分の考えを理由ま で合わせて伝えること ができる。（観察） ・相手の発表に合った 質問やコメントをする ことができる。（観察） ・自分の考えの変化や 深まりを随時記録する ことができる。 （観察・クラゲチャー ト）
終末	6 振り返りをする。	・評価規準を振り返ることで、児童 が考えの変化に気付きやすいよう にする。 ・振り返りの視点を与え、書き出し の参考にさせる。	・自分の考えの変化に 気付き、表すことがで きる。 （ロイロノート）
	7 振り返りを全体で共有 する。	・考えの深まった児童を価値付ける ことで、対話によって自分の考えが 広がったり、深まったりすることを 実感できるようにする。	・積極的に自分の考え を発表することができる。 （観察）



【資料1 ピラミッドチャート】



【資料2 クラゲチャート】

B	A	AA
友達の話を聞いて、理由を一つ付け加えることができた。 友達に【共感】することができた。	友達の話を聞いて、理由を二つ付け加えることができた。 友達に【感想】を言うことができた。	友達の話を聞いて、理由を三つ以上付け加えることができた。 友達に【質問】することができた。

①「いちばん大事なものを伝え合い、自分の考えを深めよう。」

【資料3 評価規準】

私のいちばん大事なものの（こと）は、○○です。○○だからです。

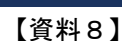
発表する時

【資料4 発表の話型】

いつから？ いつ？	あったら、 どんな気持ち？	なかったら、 どんな気持ち？
どんな思い出が ある？	どんな時に 助けられてる？	どんな きっかけ？
どのように ○○？	どんな○○？	

【資料5 対話カード】

本単元は2時間構成で行い、対話の中で「いちばん大事なものの」に対する考えを広げり、深めたりすることを目標に行った。1時目には、ピラミッドチャートを使うことで、自分自身がどのようなものを大事にしているのか、情報を整理しながら考えをもてるようにした。(資料6)2時目には、自分では気付かなかった視点を広げさせるために、交流の場を設けた。1度目の交流では、違う意見を持つ児童同士が交流し、2度目は同じような考えを持つ児童同士が交流できるようにした。交流の中では、新たな考えに気付けた場合は色を変えた付箋にて記録をさせ、視覚的にもわかりやすいように工夫した。対話カード(資料7)を用意し、様々な視点から質問をしあうことで、対話が広がり、授業後には全児童が自分の意見を増やすことができていた。(資料8)振り返りでも、相手から質問を受けたことで、新たな考えに気付けたと記述している児童が増えた。



本実践では、他者との対話の中で、自分の考えが広げたり、深めたりすることを目的としていた。対話をするのを苦手としている児童が多かったが、交流したことで考えを深めたことを実感できた児童が多く、対話のよさを経験できたことは大きな成果であった。評価規準を示したことで目指すべきゴールが明確となり、主体的に学ぼうとする意欲を高めることができた。この経験を今後の対話活動にも生かしていきたい。また、ICT 機器の活用では、思考ツールを使うことで、視覚的にわかりやすく複数ある考えを整理することができた。その場で相互参照が行えるため、苦手な児童も意欲的に取り組むことができるようになった。

ふり返り

AA

A

B

さんがずっと応援してくれるという意見で、理由が3つ増えました。話したみんなに、無かったら？と聞かれて、無かったときのことを考えられました。無かったら悲しいです。

さんの、友達からももらった手紙が大切という意見。理由が手紙を見たら、思い出が蘇るという意見に共感しました。

ふり返り

AA

A

B

さんに卓球をしてなかったら今どうなっていましたか？と質問されて、自分は卓球をしてなかったら熱中することがないということに気づきました。

さんのいろいろな人に支えられているという意見に、自分も共感しました。

家族や卓球の友達がいって、だから練習も通わせてもらってるし、友達には練習相手になってもらったりしているから、強くなれると改めて気づきました。

だからこれからもそうゆうことを頭に入れてやっていこうと思います！

本授業で、対話の目的が曖昧となり、本来の目的とは違う話にそれてしまう場面があった。対話の目的を教師側から提示していくことが大切であると感じた。評価規準については、提示した項目の内容が複雑であり、自己評価が難しい状況もあった。評価規準をさらに検討していく必要がある。

【若葉小学校の実践】

指導案① 第6学年 社会科学学習指導案

《本授業の主張》

「天皇」「農民」「僧侶」の立場から聖武天皇が行った大仏づくりの是非を問うことで、多面的に考えたり、話し合う意欲を喚起したりします。これまで学習してきたことを統合しながら判断し、自分事として議論する児童の姿を目指します。

1 単元名 天皇中心の国づくり

～聖徳太子、中大兄皇子、聖武天皇が目指した国づくりとは？～

2 単元の目標と評価規準

大陸文化の摂取、大化の改新、大仏造営の様子を手掛かりに、天皇を中心とした政治が確立されたことを理解できるようにするとともに、主体的に学習問題を追究解決しようとする態度を養うことができるようにする。

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
①大陸文化の摂取、大化の改新、大仏造営の様子を理解している。 ②調べたことを基に、大仏づくりに対する自分の考えをまとめ、天皇を中心とした政治が確立されたことを理解している。	①世の中の様子、人物の働きや代表的な文化遺産などに着目して、問題を見だし、大陸文化の摂取、大化の改新、大仏造営の様子について考え、適切に表現している。 ②学んだことを関連付けたり、総合したりして、当時の様子を考え、大仏づくりへの是非について適切に表現している。	①大陸文化の摂取、大化の改新、大仏造営の様子について、予想や学習計画を立てたり、学習を振り返ったりして、学習問題を追究し、解決しようとしている。

3 単元計画（全7時間）

過程	学習活動	教師の指導・支援
つかむ ／ 調べる ／ まとめる ／ ひろげる	1 聖徳太子が遣隋使を派遣した目的や聖徳太子が行った政治について調べ、学習問題をつくる。（1時間）	○聖徳太子が行った政治の意図について考えさせることで、聖徳太子が目指した国づくりについて気付かせる。 ○聖徳太子の死後、太子が目指した政治はどうなっていくのか問いかけ、学習問題につなげる。
	2 大化の改新について調べ、聖徳太子の死後、国づくりはどのように進められたのかを考える。（1時間）	○中国の政治の仕組みを取り入れたことで、天皇を中心に全国を支配する仕組みが整えられていったことをつかませる。
	3 平城京と地方の人々の様子を調べ、当時の人々の暮らしぶりを考える。（1時間）	○平城京やや地方の暮らしぶりを表した絵資料を用いて、多角的に当時の人々の様子を捉えさせる。
	4 聖武天皇の行った政治について、自ら課題を立て調べる。（3時間） ①どうして国分寺を建立したのか ②大仏づくりはどのように進められたのか ③仏教は天皇中心の国づくりに役立ったのか	○様々な歴史的資料やこれまでの既習事項を基に、比較したり関連付けたりしながら自らの課題を設定させる。 ○違う課題同士の友達と積極的に交流させることで、多角的に聖武天皇が行った政治について理解させる。
	5 聖武天皇が行った大仏づくりの是非について議論する。（1時間）	○「天皇」「農民」「僧侶」の3つの視点で大仏づくりを捉えさせることで、多面的な視点で大仏づくりの意義や問題点を考えることができるようにする。

4 本時の指導（7／7）

(1) 目標

聖武天皇が行った大仏づくり等の是非を話し合う活動を通して、様々な人々の視点を考慮しながら大仏づくりの意義や問題点を見いだし、適切に判断することができるようにする。

【思考・判断・表現】

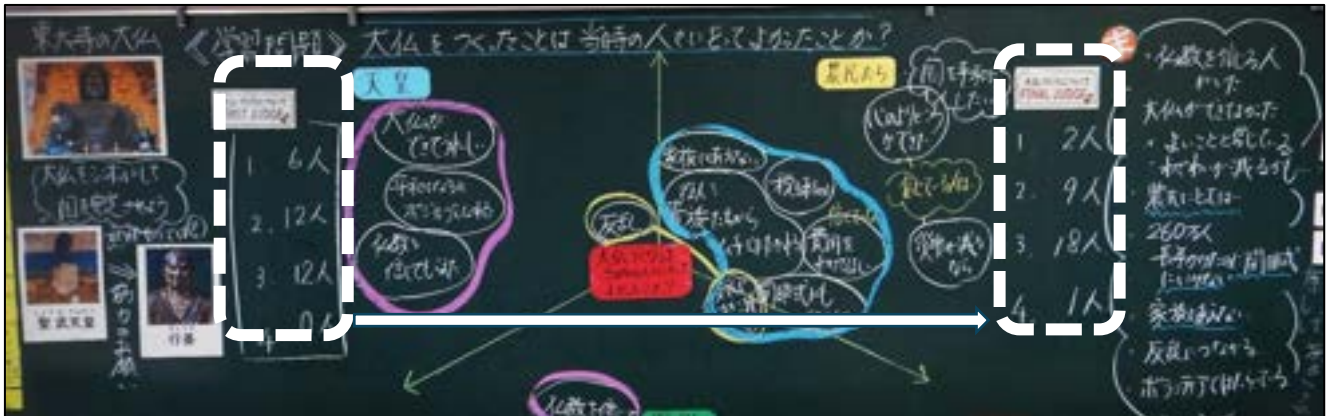
(2) 展開

学習活動と児童の反応（□□□）	教師の指導・支援等（○）と評価（◆）
1 前時までの活動を振り返り、本時の学習課題を捉える。	○大仏づくりの意義や天皇中心の政治が確立されていたことを振り返る中で、「その当時の人々にとって大仏づくりはよかったことか」と揺さぶることで、大仏づくりに対する問題意識をもつことができるようにする。
「大仏をつくったことは、当時の人々にとってよかったことか」考えよう！	
2 学習問題に対する自分の考えをもち、友達と交流する。 学習形態 (ア) 自分1人で (イ) 視点が同じ人と (ウ) 視点が違う人と (エ) 考えが違う人と	○学習問題に対する自分の考えを4段階の尺度で表現させることで、終末部での考えの変容を捉えやすくなるようにする。 ○「天皇」「農民」「僧侶」の3つの視点で大仏づくりを捉えさせることで、多面的な視点で大仏づくりの意義や問題点を考えることができるようにする（内容イ）。
3 クラス全体で考えを交流する。 ・天皇の力国内外に示すことができたので、大仏づくりは成功だったと思います。 ・正式な仏教を布教できる機会となったので、僧侶たちにとってはよかったと思う。 ・結果的に農民の反発を招くことになったりしたので、良いことばかりではないと思います。	○クラス内での交流形態は弾力的に行い、自分の考えを広げたり深めたりすることを意識した交流になるように促す。（友達タイム） ○3つの視点に立った大仏づくりに対する考えをチャートにまとめる（黒板上）ことでメリットやデメリットを可視化し、適切に判断できるようにする。
4 自分の考えを練り直す。 ・大仏づくりが成功したと強く思いました。初めは、天皇側から考えていたけど、僧侶側からも農民に仏教の教えを広めるきっかけにもなったということが分かったからです。 ・私は1つ下げました。農民たちには重荷になっていたし、結果的に逃げ出したりして、世の中が混乱していったので、聖武天皇が望んだ世の中にはなっていないからです。	○学習問題に対して再度判断する機会を設けることで、考えの根拠を増やしたり、違う視点から見ることができるようになったりしたことを実感させる。 ◆様々な人々の視点で大仏づくりの意義や問題点を見いだすことができるか。 【思判表】（発言、ワーク） → 大仏づくりの是非について判断できない児童に対しては、それぞれの視点による大仏づくりに対するメリット、デメリットを整理するように促す。
5 本時の振り返りをする。	○本時の学習を振りかえると共に、この後も天皇中心の政治が引き継がれていくのか問いかけることで、今後の学習に期待感をもたせる。

5 授業研究会について

(1) 「協働的な学び」を視点とした授業の様相について

- ・本時は、大仏づくりの是非について話し合う中で、様々な立場の人々から見た意義や問題点に気付かせることをねらう授業を行った。Jamboard 上で「天皇」「農民」「僧侶」の立場から多面的に歴史的事象を捉えさせるチャートを考案、使用した。3つ立場から見た大仏づくりの「よかったところ」「よくなかったところ」をチャート内にまとめていく中で、視覚的に意義や問題点を捉えることができていた児童が多く、それが大仏づくりの是非を判断する上で大きく影響していたようである。「農民」の立場からみたデメリットが量的、質的にも目立つような板書になったために、大仏づくりについて消極的な判断をした児童が授業終末では増えた（図1「」）。



【図1 本時の板書】

- ・友達タイム（対話活動）では、大仏づくりに対して自分とは違う判断をしている友達と積極的に交流することを促した結果、1人1台端末の画面を見せ合いながら、一生懸命説明、説得を試みる児童の姿が見られた（図2）。その結果、違う立場の見方にも気付くことができた児童もいた。
- ・クラス全体で考えを交流する場面では、農民の立場から「無理矢理参加させているわけじゃないのに260万人も参加していたのだから大仏づくりは農民たちにも意味があった」「大仏をつくることで世の中が安心できるのであれば良いこと」「でも奈良まで行き来する途中で死んでしまっは意味がない」「都に行く途中で狙われた人もいるのではないか」という意見もあった。



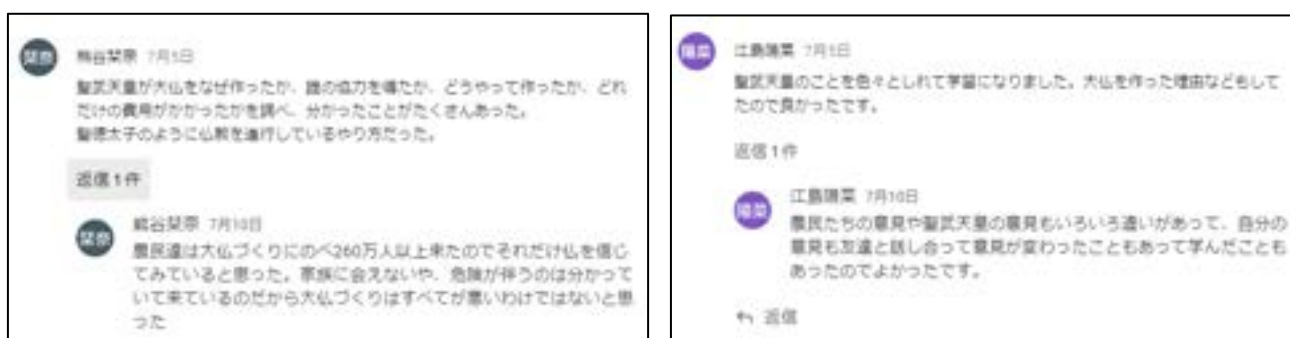
【図2 自分の考えを交流する児童】

- ・「天皇にとって良くないことは反乱が起きること1つだけですね」と揺さぶりをかけたところ、「反乱1つだけがデメリットだけど、その1つが大きい」という反応が返ってきた。それぞれの歴史的事実に対して質的な判断ができていた児童もいた。
- ・議論が過熱する中で、「農民や人々の安全」を取るのか、「世の中の安定や信仰」を取るのかという意見が対立していた。しかし、最終的な判断をする際、議論の中心的にいたA児は、「大仏づくりは作業するのにも、行き来するのにも危険が伴うので反対だったが、警備をしてくれる人がいるので安心（歴史的事実として確認はできていない）という意見や260万人が集まったという事実からある程度、農民たちにとっても意味のあることだと思った」とワークシートに書いている。個別や全体での対話を通して、意義や問題点について考えが深まった児童の姿である。

(2)「主体的な学び（見通し、振り返り）」を視点とした授業の様相について

- ・本授業では、導入部において課題に対する自分の意思（立場）を表明するところから始めている。見通しや自分なりの考えをもちながら、根拠の所在を探ることで目的意識をもたせたり、追究したいという意欲を喚起したりできた。授業終末部でもう一度同じことを問うことで、課題に対する立場の変容や考えの深まりが実感できたのではないかと考える。
- ・振り返りは、GoogleClassroom の質問機能に書きためていく手法を取った。児童の思考をつなげたり、見通しをもたせたりし、自分の学びを俯瞰的に捉えさせることをねらったものである。振り返りの文言の中では、「自分の意見も友達と話し合って意見が変わったこともあって学んだこともあったのでよかったです」という変容が見られた児童、「立場によって捉え方がまったく違う」という客観的に判断できるようになった児童の考えも見取ることができた。

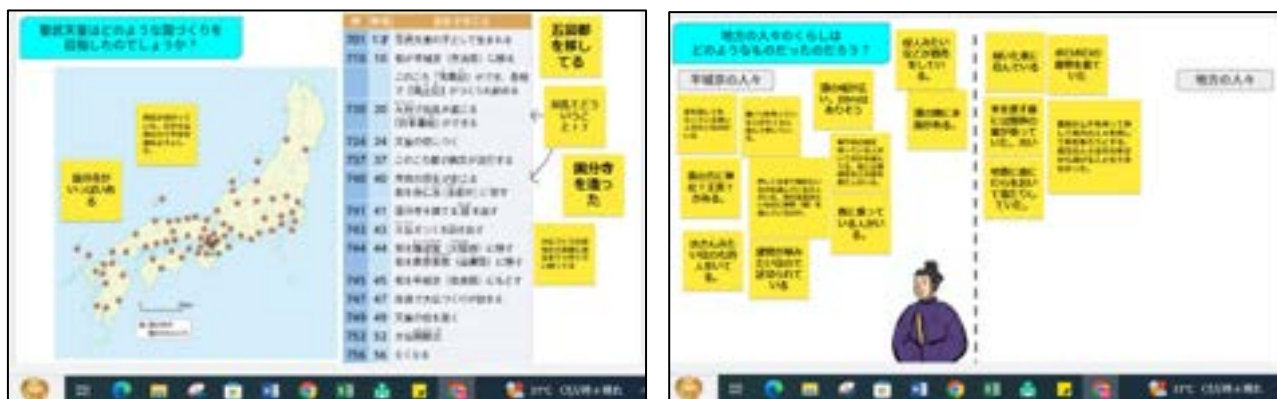
(3) 本単元で用いたワークシート等



【図3 児童の振り返り】



【図4 7時目で使用したチャート】



【図5 Jamboard の付箋機能を利用したワークシート】

6 成果と課題について

(1) 成果について

- ・本単元では、協働的な学びを活性化させることに重きを置いた実践を行った。児童の多様な考えを交流させることで、考えが広がったり、深まったりしながら考えを再構築する姿を見ることができた。今回、事前授業を検証することで、児童が使用するチャートの扱い方をグループから個別にしたこと、交流を促す問いを新たに仕組んだことが活発な意見交流につながったと考える。
- ・単元構想においては、児童の思考のつながりを大切にした単元を展開した。単元を貫く問いや見通しを持たせるための単元導入時の活動の工夫等を行うことで、国づくりと政治という一貫したテーマを児童がもてていた。
- ・本実践で3つの立場で多面的に判断させるチャートを使用した。児童の思考を整理する「シンキング・ツール」が有効に働いていたので、今後は様々な場面での思考操作に適合するシンキング・ツールをもっと活用していきたい。

(2) 課題について

- ・学習問題の設定の仕方は、研究テーマ（目指す子供像）に直結していくものだと改めて気付くことができた。今後の授業構想においては、自分たちで課題を見つけ、調べたり考えたりする中で考えを構築、修正できるような学習ができるような展開を考えていく必要がある。見通しや振り返りを大切にしながら、各教科等の学習スタイルを身に付けさせることで自立した学習者の素地を養っていききたい。

指導案② 第4学年 理科学習指導案

《本授業の主張》

1人1台端末を活用し、グラフを使って実験結果をまとめることで、変化に気付けるようにします。また、実験結果を基に、それぞれが生活の中からみつけた疑問について追究していきます。

1 単元名 雨水のゆくえ

2 単元の目標と評価規準

◎単元目標

水の流れ方やしみ込み方・行方に着目して、それらと地面の傾きや土の粒の大きさ、水の状態変化とを関係付けて雨水の行方と地面の様子、自然界の水の様子を調べる活動を通して、それらについての理解を図り、観察、実験などに関する技能を身につけるとともに、主に既習の内容や生活経験を基に根拠のある予想や仮説を発想し表現する力や主体的に問題を解決しようとする態度を養うことができるようにする。

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
①水は、高い場所から低い場所へと流れて集まること。また、水のしみ込み方は、土の粒の大きさによって違いがあることを理解している。 ②水は水面や地面などから蒸発し、水蒸気になって空気中に含まれていくこと。また、空気中の水蒸気は、結露して再び水になって現れることがあることを理解している。	①雨水の行方と地面の様子、自然界の中の水の様子について、既習の内容や生活経験を基に、根拠のある予想や仮説を発想し、表現するなどして問題解決している。 ②雨水の行方と地面の様子、自然界の中の水の様子について、観察、実験などを行い、得られた結果を基に考察し、表現するなどして問題解決している。	①雨水の行方と地面の様子、自然界の水の様子についての事物・現象に進んで関わり、他者と関わりながら問題解決しようとしている。 ②雨水の行方と地面の様子、自然界の水の様子について学んだことを学習や生活に生かそうとしている。

3 単元計画（全10時間）

過程	学習活動	教師の指導・支援
第1次 ／ 第2次 ／ 第3次 ／ 第4次	1 雨水がどこへ行ったのか話し合い、地面の傾きと水の流れる方向を関係付けて調べる。 (3時間)	○雨の日の地面の様子や、植物に水やりした直後の写真などを提示し、生活経験と結びつけて考えることができるようにする。
	2 土の粒の大きさと水のしみ込み方を関係付けて調べる。(1時間)	○水の通り道について図をかいたり言葉で説明したりして、すき間に着目させる。
	3 水が空気中に出ていくか、水を入れた入れ物を使って比べながら調べる。(2時間) (2/2時間日本時)	○洗濯物を干すと乾く、花瓶の水位が下がる、など身の周りの事象を基に、根拠のある予想を立てることができるようにする。
	4 地面にしみ込んだ水の行方について調べる。(1時間)	○実験結果を1枚のスライドに並べることで変化に気付くことができるようにする。
	5 水蒸気が空気中に含まれているか、保冷剤を使って比べながら調べる。(2時間)	○冷たい飲み物のコップに水滴がつくことなど、身の回りの事象を基に、根拠のある予想を立てることができるようにする。
	6 学習のまとめ(1時間)	

4 本時の指導（6／10）

(1) 目標

実験の結果をまとめたり、身の回りの事象について話し合ったりする活動を通して、水は水面や地面などから蒸発し、水蒸気になって空気中に含まれていくことを理解することができるようにする。【知技】

(2) 展開

学習活動と児童の反応（□□□）	教師の指導・支援等（○）と評価（◆）
1 前時までの学習を振り返る。 ・水たまりの水はどこに行ったのだろう。 ・洗濯物を干すと乾くのはなぜだろう。 ・風呂場の天井に水滴がつくのはなぜだろう。	○身の回りで水が消えた経験から感じた、生活の中の疑問について、実験を通してそれぞれが追究していけるようにする。（内容ア）
学習問題 水はどこに消えたのだろうか	
2 実験の結果から考察する。 (1) 自分の班の結果から (2) 全体の結果から ・ラップをしていない容器の水は、減っていたから水は空気中に出て行ったと思う。 ・ラップについている水滴は空気中に出て行った見えない物が集まり見えるようになったと思う。 3 水の行方についてまとめる。	○1枚のスライドに実験の結果をまとめることで、水量の変化に気付くことができるようにする。（内容ウ） ○各班の結果を提示し、自分の班と他の班の結果を比較したり、ラップについた水滴を関連付けたりして、水の行方について考えることができるようにする。 ○話し合いを通して、自信をもったり、的確な言葉で説明したりすることができるようにする。（友達タイム） ◆水は空気中に出ていくことについて理解することができている。 【知技】（発言、ワーク） → 水の行方について理解することができない児童に対しては、実験の記録を振り返ったり、図を用いたりして理解することができるようにする。 ○水が目に見えない姿に変わったものを「水蒸気」、水が水面や地面などから水蒸気に姿を変えて空気中に出ていくことを「蒸発」ということについて知らせる。
結論 水是水じょう気になすがたを変えて、空気中にじょう発する。	
4 自分の疑問についての答えを考える。 ・水たまりの水は地面にしみ込むだけでなく、空気中にも蒸発していると思う。 ・洗濯物の水が蒸発して乾くことに気付いた。 ・風呂場の天井はラップと同じで、風呂の湯から蒸発した水蒸気が目に見えるすがたになったのが、天井の水滴だと分かった。	○実験結果やまとめから、それぞれの疑問に対する答えについて考える時間をとる。（内容ア） ○自由に話し合う時間をとることで、より多くの言葉や考えに触れたり、ひらめいたりすることができるようにする。（内容イ）
5 学習を振り返る	○本時の学習を振り返るとともに、地面の水も蒸発しているのか、また、日なたと日陰で違いがあるか問いかけることで、次時の学習に繋げる。

5 授業研究会について

(1) 「協働的な学び」を視点とした授業の様相について

- ・本授業は、水の蒸発について観察実験の結果から「消えた水のゆくえ」に対する考察を行い、結論を導くことを主眼とするものであった。ラップありのカップとラップなしのカップの水の減り具合や水滴の様子を比較し、気づき等を交流することで視点を広げたり、深く考察を行ったりすることをねらった。ロイロノートで気づきを交流することのメリットとしては、クラス全員の気づきを閲覧できる環境があることで、短時間のうちにたくさんの考えに触れることができることが上げられる。ある児童は、ラップについての水滴に関する気づき（クラス全員分）を分析することで、水の減り具合とラップ（についての水滴）を関連付けて考えることができた（図1）。
- ・また、気づきの共有をした後の交流活動では、「カップの水の減りが大きいのは、空気中に水が逃げているのではないか」「ラップをした方は、逃げ場がなくラップに水がついたのでは」「温度によって減り方がちがうようだ」等々、結論に結びつく考察ができていた（図2）。
- ・「水の行方をつきとめよう」という共通の学習問題の下、実験結果を考察することで同じ視点で話し合うことができ、目には見えない状態変化まで思考を巡らすことができていた。



図1 気づきを共有する児童



図2 共に考察を行う児童



図3 本時の板書

(2) 「主体的な学び（見通し、振り返り）」を視点とした授業の様相について

- ・児童が主体的に科学的事象に向かうことができるように生活経験から蒸発に関わる疑問を想起させることで、身近な事象を解決するために実験をしていくという動機付けを行うことができた。児童が導入時に出合った身近な事象とは、「水槽や花瓶の蒸発」「洗濯の乾燥」「浴室の結露」である。この事象に関わって湧き上がってきた疑問を「自分の疑問（個別の課題）」として設定することで、意欲的に学習に向かうことができたのではないかと考える（図3〔 〕）。
- ・本時の振り返りでは、「温かさは水の減り方に関係するのか」「日なたと日陰では結果はどのようなのか」「蒸発した水はもとにもどるのか」「雲から雨が落ちるわけを知りたい」等々、蒸発という現象に関係する新たな問いを立てている児童もいた。児童自身がもっている経験知から問いを見いだすことで、科学的事象を追求していこうとする態度が醸成されていた。

6 本単元で用いたワークシート等

水のゆくえ 4年(2)組(11)番 名前: []

めあて: 実験の結果から、月えた水のゆくえを調べよう。

クラスの質問: 水はどこに消えたのか? 自分: なせ、土でなくところから消えたのか?

実験のよそ: ラップがあり、水がなくなるとおもいます。

自分のグループの実験結果: ラップあり: ラップがなくなるとおもいます。ラップなし: ラップがなくなるとおもいます。

全体の実験結果から考えたこと: 水は土にしみこみ、空気中に出てくる。

まとめ: 水は土にしみこみ、空気中に出てくる。

自分の質問に対する答えを考えよう! 土でなくところ、水がなくなるとおもいます。

よりかえり: 1. 自分の質問が、わかったこと(○・△) 2. 友達のことを聞くことができた(○・△)

水のゆくえ 5年(2)組(14)番 名前: []

めあて: 実験の結果から、月えた水のゆくえを調べよう。

クラスの質問: 水はどこに消えたのか? 自分: なせ、土でなくところから消えたのか?

実験のよそ: ラップがあり、水がなくなるとおもいます。

自分のグループの実験結果: ラップあり: ラップがなくなるとおもいます。ラップなし: ラップがなくなるとおもいます。

全体の実験結果から考えたこと: 水は土にしみこみ、空気中に出てくる。

まとめ: 水は土にしみこみ、空気中に出てくる。

自分の質問に対する答えを考えよう! 土でなくところ、水がなくなるとおもいます。

よりかえり: 1. 自分の質問が、わかったこと(○・△) 2. 友達のことを聞くことができた(○・△)

図4 児童のワークシート(5、6時目)

7 研究の成果と課題

(1) 成果について

- ・本実践では、児童が身近な自然事象に出合うことで湧き出てくる疑問(問い)から、大きな問い(みんなの問い)を設定した。観察実験、考察、実証を行い、明らかになったことから身近な自然事象に対する考察を改めて行うという学習過程を経験することで、身近な自然事象に目を向けたり、自ら関わろうとしたりする児童の姿が見られるようになった。

(2) 課題について

- ・本実践では、ロイロノートを用いたグラフ作成をするという方法を用いた。今後は、学習内容や児童の特性、目的意識に応じて、動画や写真で記録する、表計算ソフトを用いる、シンキングツールを活用する等、様々な学習方法を選択していくことができるような授業デザインを模索していきたい。

【弥生が丘小学校の実践】

指導案① 第6学年 算数科学習指導案

この単元では、代表値、表、グラフを読み取ることが前提であるため、その都度、代表値のような個々の値をよんだり、全体の傾向をよんだりする活動を入れる。さらに、根拠・理由を示した考察が記述できるように書き方の型を示し随時取り入れ、本時の対話へつなげられるようにしたい。

1 単元名 データの整理と活用

2 単元の目標及び評価規準

(1) 単元の目標

データの散らばりについて、ドットプロット・度数分布表・ヒストグラムを用いた分類・整理の仕方や代表値の意味を理解し、それをもとに事象の特徴を考察したり説明したりすることを通して、統計的に問題解決する力を育むとともに、その方法を生活や学習に活用しようとする態度を養う。

(2) 単元の評価規準

知識・技能	思考力・判断力・表現力	主体的に学習に取り組む態度
身のまわりの事象についてデータの散らばりを表すにはドットプロット、度数分布表やヒストグラムを用いるとよいことを理解し、それらをよんだりつくったりすることや代表値を求めたりすることができる。また、統計的な問題解決の方法を理解している。	目的にあわせて、データ収集・整理の仕方を考えたり、代表値や表・グラフを適切に用いてデータの特徴を判断したりしている。また、得られた結果を多面的に捉えて結論について考察している。	データの散らばりについて進んで関わり、度数分布表やヒストグラムを使ってデータを整理することや結果を多面的に捉えることのよさに気づき、統計的な問題解決を生活や学習に生かそうとしている。

3 指導と評価の計画（全9時間）

時間	◎ねらい ○主な学習活動	評価規準（評価方法） ・指導に生かす評価○記録に生かす評価
1	◎どのような比べ方があるか考えよう。 ○比べるために着目できそうなものを考え、調べる ○用語をおさえる。（平均値、最大値、最小値、範囲）	・知（発言・観察） ・態（発言・観察）
2	◎データの特徴を表す値について調べよう。 ○数直線を見せ、用語をおさえる。・ドットプロット ○データの散らばりをドットプロットに整理する。	・知（ノート） ・思（発言・観察）
3	◎ちらばりのようすをドットプロットに表そう。 ○ドットプロットの数直線から、値を調べ、用語をおさえる。 （中央値・最頻値・代表値）	・知（発言・観察） ・態（発言・観察）
4	◎データのちらばりの様子を表に整理して調べよう。 ○データの散らばりを表に整理し、ドットプロットとの違いや散らばりの特徴を調べる。 ○用語をおさえる。（度数分布表・階級・度数）	・知（ノート） ・思（発言・観察）
5	◎データのちらばりの様子を表すグラフをつくろう。 ○用語をおさえる。（ヒストグラム・柱状グラフ） ○度数分布表をもとに、データのちらばりをヒストグラムに整理し、特徴を考える。	・知（ノート） ○思（発言・観察）
6 本 時	◎これまでに調べたデータをもとに、推しチームを決めよう。 ○整理したデータを分析し、整理した資料をもとにして考えた結論と理由を説明する。	・思（発言・ノート）
7	◎過去と今の弥生が丘小の子どもの運動能力を比べよう。 ・体力アップテストのデータを分析し、各運動能力の数値を比べる。	・思（発言・観察） ○態（発言・観察）
8	◎いろいろなグラフからわかることを考えよう。 ○それぞれのグラフを見て、どのようなことがわかるかを考えたり説明したりする。	・思（発言・ノート）
9	◎学習したことをたしかめよう。 ○学習内容の理解を確認する。	○知（ペーパーテスト）

4 本時の指導(本時6/9)

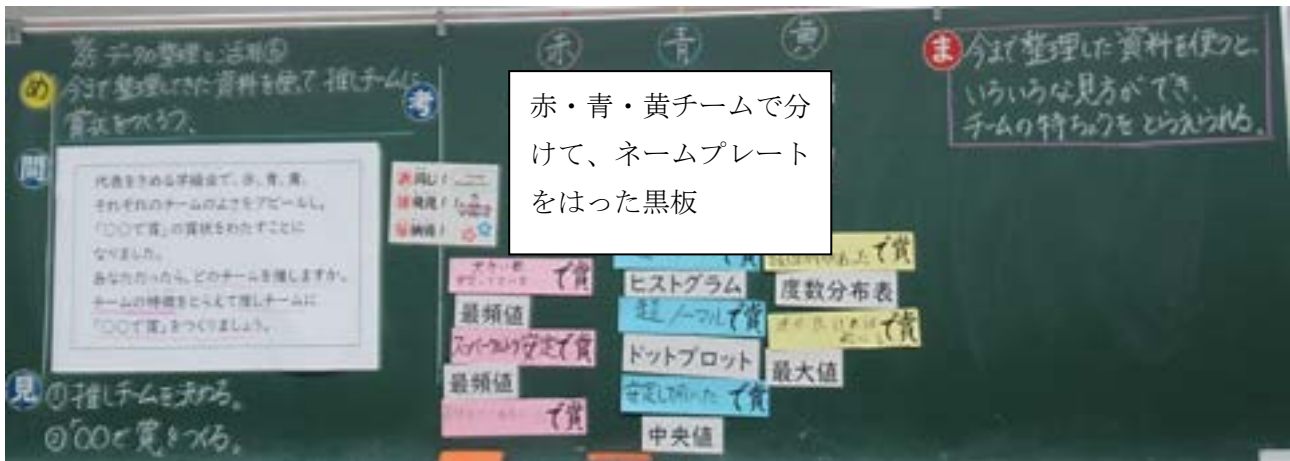
(1) 目標

○賞状を作る活動を通して資料を多面的に捉え、推しチームの特徴を読み取り理由を説明することができる。
(思考力・判断力・表現力)

(2) 展開

過程	学習活動(児童の反応【二】)	教師の指導・支援等(○)と評価(◆)
つかむ	1. 前時の振り返りをする。 ・平均値 ・ドットプロット ・度数分布表 ・最大値, 最小値 ・中央値, 最頻値 ・ヒストグラム	○前時までに学習した内容を資料としてスライドで確認する。 ○代表値や表、グラフの言葉を確認させる。
見通す	2. 問題を把握し、めあてをつかむ。 代表を決める学級会で、赤、青、黄それぞれのチームよさをアピールし、「〇〇で賞」の賞状をわたすことになりました。あなただったら、どのチームを推しますか。チームの特徴をとらえて推しチームに「〇〇で賞」を作りましょう。	○問題を見て、問われていることを確認させる。 ○前時までにデータ整理した代表値、表、グラフから分かるそれぞれのチームよさに目を向けさせる。 ○理由や根拠を示して推しチームを選ぶように伝える。
	これまで整理した資料を使って、推しチームに賞状をつくろう。	
考える	3. (1人学び) ・個人で推しチームを決め、ノートに選んだ理由を記入する。 ・今まで整理してきた代表値、表、グラフを使い、理由や根拠を示して考えを書く。	○自分が着目した代表値や表やグラフとチームを選んだ根拠や理由を書かせるようにする。考察の書き方を確認する。 ○「代表値、表、グラフが特徴(傾向や比較)である。このことから」ということが言える」のように根拠や理由を書かせるようにする。(消去法の考えも認める。)このとき、多面的に捉えられるように2つ以上を使い根拠や理由を書かせるようにする。
深める	4. (自由交流) 友達の考えを聞いた後、最終決定をする 赤チーム(よさ) ・平均値61で青と等しい。黄色より高い。だから、平均してよい記録が出せると思った。 など 青チーム(よさ) ・平均値61で赤と等しく、黄色より高い。だから、平均してよい記録が出せるだろう。 など 黄チーム(よさ) ・平均値は60で、一番低いのが最大値が71でどのチームよりも高い。だから、一番いい記録が出せる可能性がある。 など	○結論だけでなく、根拠を明確にして理由を説明することを伝える。壁面に資料を提示しておく。 ○友達の考えを聞くときは、理由に着目したり、自分の考えと比べたりしながら聞くようにする。納得した考えや理由はノートにメモをさせて、考えを変えてもよいことを伝える。そのとき、変えた理由がきちんと示せるようにすることを伝えておく。 ○いろいろな意見に触れ、考えが「同じ・発見・納得」を友達のノートにサインとして書かせ、振り返られるようにする。
まとめる	5. 選んだチームごとに分かれ、「〇〇で賞」を考え、発表する。 ・安定感ばつぐんで賞 ・安定していい記録出せるで賞 ・可能性無限大で賞 ・運も実力で賞 ・一番いい記録出せるで賞 ・波ありまくりで賞 ・バラエティーに富んでるで賞	◆評価規準 これまでに整理した資料を多面的に捉え、特徴を読み取り、理由を説明している。(ノート・発言) →推しチームを選べなかったり、根拠や理由が説明できなかったりする児童には、自由交流で友達の考えを聞き、納得したものから選択させる。
	6. 本時をまとめ、振り返りをする。	○同じ推しチームを選んだ児童同士で3～4人の班になり、考えさせる。 ○班で推しチームの特徴を話し合い、「〇〇で賞」を考えさせることで、データから分かること(それぞれのチームの安定性や可能性)を押さえさせる。 ○「〇〇で賞」にした理由や使った値や表、グラフを問わせ、他の推しチームのデータから分かることをみんなで共有させる。 ○ここでは1つの結論に集約せず、根拠を明確にすることに重点を置く。
	これまでに整理した資料を使うといろいろな見方ができ、チームの特徴を捉えられる。	
		○分かったことや気付いたこと、次に生かせそうなことを書かせる。

5 主体的・対話的な学びに向かうための授業改善の視点



(1) 主体的な学びを引き出す授業の工夫

- ・本単元での学習内容を、児童が、より自分事として意識して主体的に学習に取り組めるよう、児童の生活に関わるデータを取り入れた単元計画にしたいと考えた。そこで、6時目(本時)までは、教科書で示されているデータを使って、算数用語や分析の仕方、結果の考察の仕方を学ばせ、7時目には、新体力テストの記録データを使用することにした。
- ・授業の導入では、図やグラフを示したり、ICTを利用して、新聞やニュースで取り上げられている内容(〇〇が減少、□□の割合が増加、などの統計的なもの)を提示したりして、問題意識をもたせてから学習に入るようにした。

(2) 対話的な学びを引き出す授業展開

- ・この単元では、データのいろいろな整理の仕方を学習する。その時間に整理したデータを見て「どのチームが代表になりそうか」根拠を示しながら考える時間を作った。前時に決めた「代表チーム」と違うことに気付かせ、本時で資料の特徴を捉えた対話ができるよう布石を打った。
- ・本時の、これまで整理してきたデータを使って、最終的に「代表」を選ぶ活動では、二つ以上の資料を使い理由や根拠を示させ「自由交流」をさせた。同じチームでも使った資料が違っていたり、理由が違っていたりすることにも注目させ、交流の際は「同じ(選んだチームも資料も)・発見(違うチームや選んだ資料の違い)・納得(自分の考えが揺れ動く)」を書かせることで、自分の考えを広げたり深めたりできるような活動にした。
- ・「〇〇で賞」を考える活動では、同じチームを選んだ児童同士で対話させることで、資料の特徴を自然と組み込んだ対話ができることを期待し取り入れた。



(3) その他

《その他の展開案》

- ・賞状を渡すという行為は、児童にとって大切なものであるので、賞状を作る側、もらう側の双方が納得できる物である必要がある。その必要性を児童と押さえ、賞状作りで大切なことは何かを問う。そして、賞には根拠が要ることを確認し、問題解決の活動に入る。こうすると、問題提示→めあてをたてる、という流れで授業を展開できると考える。

《ICTの利活用》

- ・事前授業では、壁面の掲示のみだと児童の目線が様々な方に向かい注目しづらいことがあったためパワーポイントを利用し学習した言葉の意味や特徴を押さえた。
- ・7時目では、実際のデータを整理するため『スグラパ』を使用。『スグラパ』の活用によりデータの整理が大幅に削減され、児童がデータの特徴をつかみやすく、結果を比べ考える時間を確保することができた。
- ・考えを交流する時に、『canva』を活用することでデータのどの部分に着目したか説明しながら自身の結論を伝えることができた。

6 研究の成果と課題

(1) 成果について

- ・「推し」という言葉や「〇〇で賞」を作る活動は子どもたちの意欲をアップさせるのに有効だった。
- ・資料が一枚のワークシートに載っていたため、いろいろなデータを見比べやすかった。
- ・賞状をつくるというめあてにすることで、代表値のよさに目を向けることができていた。
- ・賞をつけるために、理由や根拠を示す必要性があった点が良かった。値や表、グラフをよく見ようという流れにつながっていた。
- ・資料の特徴を出し合ったり、着目した点について議論したりして資料を活用しながら推しチームごとに賞状をつくることができていた。
- ・賞状を出した後にどの資料からそう言えるのか確認したことで、児童に根拠が伝わり良かった。
- ・考察の書き方を示しておくことで、分からない児童もまとめやすくなっていた。

(2) 課題について

〈めあてについて〉

- ・めあてを「賞状をつくるために、これまでに整理した資料を活用しよう」や「これまで整理した資料を使って特徴をとらえよう」とすると、より資料を多面的に捉えることができたのではないか。

〈自分の考えをもつ場面について〉

- ・考察の書き方の型を示すことで対話はしやすかったが、深まりはなかった。新たな視点が生まれにくかった。

〈自由交流・全体交流について〉

- ・同じ・発見・納得 以外の反応は無いのか気になった。
- ・全体で話し合うとき、資料が壁面にあったため視線が戻りにくかった。正面は黒板のため、前に資料があるほうが良かったのではないか。
→板書に資料が入りきれないという課題を改善するために今回は、壁面に資料を掲示した。
- ・黄色チームを推すポイントとして、最大値が高い点が挙げられると思うが、その記録が直近の記録だということも大きな要素であるため触れてもよかったと思う。

〈班活動について〉

- ・「〇〇で賞」という短い言葉にしたため、まとめるのが難しかったと思う。
→他クラスで、賞状の文章が書けるように紙を大きくすると、児童が資料から読み取ったことを、詳しい文章表現で書けていた。しかし、本時では板書に掲示物が収まるように用紙を小さくしたものを準備した。すると、資料の特徴を短く表現しようと子どもの意識が向いてしまい、表現の幅が狭まった。ねらいに合う用紙サイズ選択も必要であることがわかる。
→改善案としては、タブレットを活用して Canva で賞状を作るとすると、電子黒板に映して発表ができ、書く作業よりスムーズに活動ができるかもしれない。
- ・賞の名前を付けるときに、「面白さ」に注目している児童が見られた。その賞にした理由や根拠についての話合いをもっと活発にできたらと思った。ネーミングのための資料を選択した理由やその資料の良さを子どもたちから聞けるとよかった。もしくは書かせてもよかった。
- ・賞の名前にも多く挙がっていた「安定している」とはどういうことなのか、全員に考えをもたせる場面をつくったほうがよかった。
- ・本時の目標が「資料を多面的に捉え、特徴を読み取り、理由を説明することができる。」となっているため賞状づくりではなく、推しチームのプレゼンでもよかったのではないか。次の時間にプレゼンの時間をとっても良かったかもしれない。

指導案② 第6学年 算数科学習指導案

《本授業の主張》

この単元では、代表値、表、グラフを読み取ることが前提であるため、その都度、代表値のような個々の値をよんだり、全体の傾向をよんだりする活動を入れる。さらに、根拠・理由を示した考察が記述できるように書き方の型を示し随時取り入れ、本時の対話へつなげられるようにしたい。

1 単元名 円の面積

2 単元の目標及び評価規準

(1) 単元の目標 (この単元で身に付けさせたい資質・能力)

円の面積について、その求め方や公式を考えたり説明したりすることを通して、円や円弧を含む複合図形の面積を求めることができる。

(2) 単元の評価規準

知識・技能	思考力・判断力・表現力	主体的に学習に取り組む態度
円の面積の求め方とその公式を理解し、公式を使って円の面積を求めたり、円弧を含む複合図形の面積を求めたりすることができる。	円の面積の求め方やその公式、また、円弧を含む複合図形の求め方を考えることができる。	見積もりや様々な操作活動を通して、円の面積を既習の図形の面積と関連づけて考えようとする。

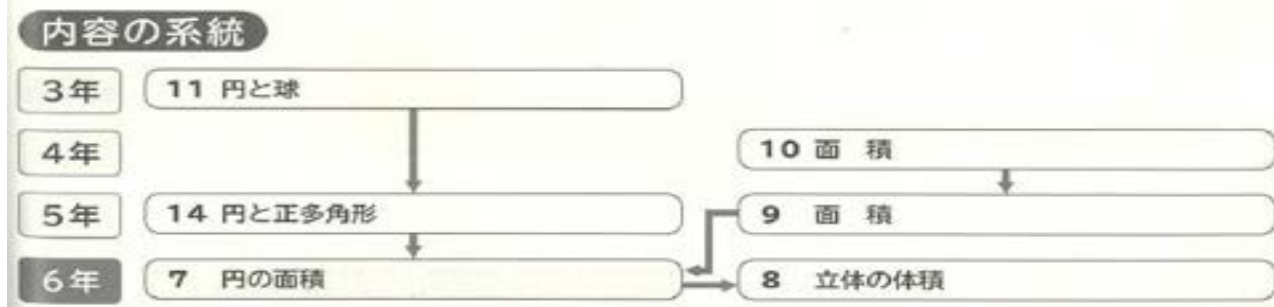
3 単元と指導について

(1) 教材観

本単元は、学習指導要領、第6学年の2内容B図形「領域」(3)に示された指導事項のために設定された単元である。児童は第5年までに、三角形や四角形などの直線で囲まれた図形の面積の求め方や円周の長さの求め方を理解している。本単元では、単位正方形がいくつあるか調べたり、既習の面積の求め方と関連づけて考えたりすることを通して、円の面積の求め方を理解する。また、公式を用いて円の面積を求めることができるようにすることをねらいとしている。

本時は、複合図形の面積を求める時間となる。その際、複合図形が既習の図形の組み合わせであることに気付かせ、図形を分けたり、引いたりして面積を求めたさせたい。そして、数学的な見方や考え方を働かせながら、いくつかの面積の求め方を比較し、児童が共通点や相違点を見つける活動を大切にする。

《学習の関連と発展》

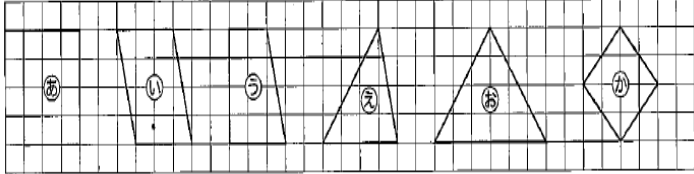


(2) 児童観

児童の実態を把握するために、前提条件テスト・事前テストを実施した。

① 前提条件テスト(令和7年8月25日実施 6年1組 29人)

問題	正答率	主な誤答例 ()内は人数
1 図を見て□に当てはまる言葉や数を書きましょう。 		

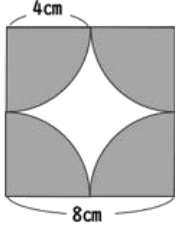
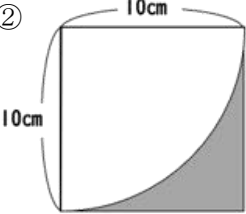
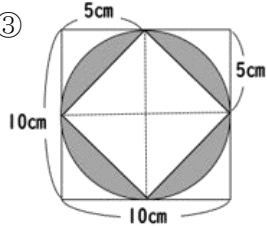
(1) ㉔の点を円の□、㉕を円の□、㉖を円の□といいます。 (2) ㉕の長さは、㉖の長さの□倍です。 (3) 円周は□×□で求めることができます。 2 ㉗の面積と同じ面積の図を、㉙～㉛の中からすべて選びましょう。  3 次の長さは何cmですか。 ① 直径 10 cmの円の円周 ② 半径 10 c mの円の円周 ③ 円周が 125.6 cmの円の半径	㉔66% ㉕90% ㉖97% 93% 76% 41% 86% 79% 41%	頂点 (5) 対象の中心 (2) 円周率×直径 (4) 無回答 (2) い (7) 無回答 (5) 無回答 (2) その他 無回答 (2) その他 125.6÷3.14 (7) 無回答 (3) その他
--	---	--

《前提条件テストの考察》

- ・ 1 (1) (2) の結果から、円については観察、分類、構成、作図などの作業を通して中心・直径・半径という用語や意味について概ね理解できているが、対称な図形の学習と用語を混同している児童が見受けられたため、1時目に円に関する用語を再確認した。
- ・ 円周率の意味を理解し、円周の長さを求めることは概ねできていると言える。しかし、円周だけが与えられた問題では、円周率を使って半径を求めることを難しいと感じている児童が約4割いるため、これも1時目に円周と直径の関係を再度指導した。

② 事前テスト(令和7年8月25日実施 6年1組 29人)

問題	正答率	主な誤答例 ()内は人数
1 ① 円周を求める公式 ② 円の面積を求める公式 2 下の図のように、円を 64 等分して並べ、長方形のような形を作りました。  ① もとの円の円周の長さは、何cmと考えればよいですか。 cm ② もとの円の面積は、何cm²と考えればよいですか。 cm²	59% 24% ①14% ②24%	無回答 (7) その他 無答 (15) その他 31.4 (6) 無回答 (12) その他 無答 (15) その他

3 円の面積を求めましょう。 ① 半径が10.cmの円 ② 直径が10.cmの円 ③ 円周が 62.8 cmの円	20% 28% 14%	無答 (16) その他 無答 (16) その他 無答 (18) その他
4 次の図形のかげをつけた部分の面積を求めましょう。 ①  ②  ③ 	17% 10% 10%	無回答 (15) その他 無答 (22) 無答 (22)

《事前テストの考察》

- ・ 1 から既習事項の円周の長さを求める公式が定着していない児童が半数近くいる。円の面積の公式を習い事などで前もって知っている児童は少ない。
- ・ 2 から、円を 64 等分して、長方形にするイメージができずに円周が長方形のどこにあたるかを見当づけことが難しい児童が多く見られる。すでに公式を知っている児童は 2 割ほどいる。
- ・ 3 から、すでに公式を知っている約 2 割の児童は正答できているが、円周のみを与えられた問題においては正答率が落ちている。
- ・ 4 から、正答率が下がっていることが分かる。
- ・ 以上のことから、ICT を活用したり、具体物を用意したりしてイメージを湧かせ、既習の図形に数多く触れることが大切であると考え。また、複合図形の中から既習の図形を見つけられない児童が多く居ることを想定して、グループで思考する場を設ける。

(3) 指導観

指導に当たっては、既習の長方形や平行四辺形の面積の求め方に結び付けて考えることを大切にする。授業に入る前に、コンパスや定規を使って自由に作図させておく。1 時目にて児童が描いた図形を提示しながら、円の面積の求め方を学習すると、自分たちで描いた円弧を含む複合図形でも面積が求められるようになることを伝え、ゴールを設定する。単元の導入では正方形を使い、円の面積の見当を付けさせる。円の面積は、内接する正方形より大きく、外接する正方形より小さいことから、円の面積が半径×半径×2 より大きく、半径×半径×4 より小さいことを理解させる。その後実際に円の方眼を数える活動を通して、およその面積を求めさせるようにする。そして、円の面積の公式について考える際には、円を半径で等分割した扇形を並び替え、既習の長方形に変形し、長方形を求める公式から導くことができるようにする。ここでは、円の分割の仕方を細かくするにつれて曲線が直線

に近づき、全体が長方形に近づくという考えは感覚的に認めることができるようにする。円の面積の活用では、イメージを捉えて考えさせるためにその中に含まれる半円や扇形、三角形や四角形などを用いた式を書かせる。その後、事前に描いていた円弧を含む図形の中からグループで取り組む問題を選択させる。

本時では、事前に、作図しておいた模様の中から取り組む問題をグループで話し合って選択させておく。そして、既習事項を活用しながら求積方法を考え、グループ内で教え合いながら模造紙に解説書を書かせる。その後、各自が他のグループが選択した問題を解く時間を設けた後、ポスターセッションを行う。そこで、聞き手は、自分が選択して解いた問題の解説を聞きに行き、その妥当性や別の解法ができないかを検討させる。また、そのことにより、既習の面積の公式を活用するよさに気付かせるとともに、定着を図りたい。

4 指導と評価の計画（全6時間）

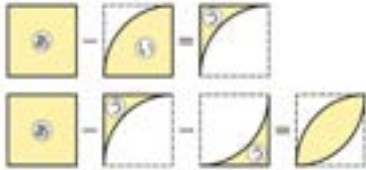
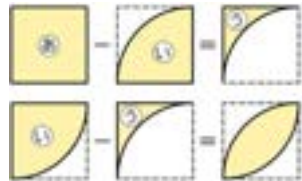
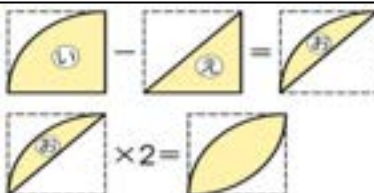
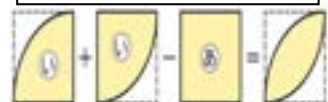
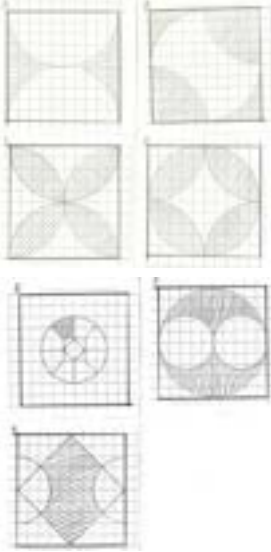
時間	ねらい 主な学習活動 ○	評価規準 ・指導に生かす評価、 ○記録に生かす評価評価方法 ()		
		知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
1	・円の面積の求め方を調べていくという単元の課題をつかむ。 ・正方形の面積を利用して、円のおよその面積を見当づける。 ○円の面積は1辺の長さが半径に等しい正方形の2倍と4倍の間にあることを知る。			・円のおよその面積を、正方形を用いて見当づけようとしている。(観察・発言)
2	方眼を利用して、円のおよその面積を見積もる。 ○方眼を用いて円のおよその面積を求める。 ○円の面積は、半径を1辺とする正方形の何倍であるかについて考える。	○円の面積は、半径を1辺とする正方形の面積の何倍くらいかを理解することができる。(ノート・発言)	・円周の通っている方眼をどのように処理すればよいかを考えて見積もっている。(観察・ノート)	
3	円の面積の求め方を考え、求積公式を導く。 ○円を16等分したおうぎ形を並べ、その形から面積を推測する。 ○既習の図形と関連付けて、円の面積の公式を考える。		○円を変形してできた形を長方形ととらえて、円の求積公式を考えている。(ノート・発言)	
4	円弧を含む複合図形の面積の求め方を考える。 ○葉っぱの形から、既習図形を見つけ、足したり引いたりしながら、面積の求め方を考え、説明する。 ○事前に作図した円弧を含む複合図形の中から、グループで取り組む問題を決める。		○円弧を含む複合図形の面積の求め方を考えたり説明したりしている。(発言・ノート)	
5 本時	グループで複合図形の面積を求める解説書を作りをし、ポスターセッションでお互いに解き方を説明し合う。		○複合図形の面積の求め方を考えたり説明したりしている。(発言・ノート)	
6	学習内容の理解を確認する。 ○学習内容を確実にする。	○円の面積を求める公式を理解し、適用することができる。(ペーパーテスト)		

5 本時の指導(本時 5 / 6)

(1) 目標

○円弧を含む複合図形の面積の求め方を考えたり説明したりすることができる(思考・判断・表現)

(2) 展開

過程	学習活動(児童の反応)	教師の指導・支援等(○)と評価(◆)
つかむ 見通す ／考える	1 前時の振り返りをする。 A いらない部分を  C 削りたい部分の面積を求める 	○前時に学習した内容を活用するよう意識付けするために、円弧を含む複合図形でも求積可能な図形を見つけ、それを足したり引いたりすることで面積を求めることができることを振り返る。 B 必要な部分を求め、組み合わせる  D 重なりを求める 
	2 本時の活動内容を確認し、めあてをもつ。 自分たちで作った図形の面積の求め方を説明し合おう。	○課題解決に向けて協働的に学習に取り組めるようにするために、本時の後半でポスターセッションを行うことを伝え、めあてをもたせる 3 前時に選択した図形は、どうすれば面積を求められるかを話し合い、解説書を作る。  ○視覚的に分かりやすい解説書にするために、図を用いた式を書かせる。 ○多様な解法が出た場合も、答えの妥当性が分かるように吹き出し等を用いて、数字が入った計算式や答えも記入させる。 ○論理的に説明できるように、「まず、つぎに、だから」というつなぎ言葉を意識して説明するように声をかける。 ○早く完成したグループは他のグループの問題に取り組ませる。 ◆評価規準 円弧を含む複合図形の面積の求め方を考えたり説明したりしている。(ノート、発言) →: 解決や説明が難しい場合は、図形のカードを用いて段階を追って助言する

／ 深める ／ まとめる	4 他のグループが考えた問題を1つ選び、解く。 5 ポスターセッションを行う。 (ア)グループ内で①～③の番号を決める。(1～2人ずつ) (イ)①から順に発表者をする。 (ウ)自分が発表者ではないときは、自分が解いた問題のグループの発表を聞きに行く。2巡目は自分が興味を持った問題の解説を聞きに行く。 (エ)3ローテーション行う。 (オ)1ローテーション3分程度	○この後のポスターセッションにて主体的に参加できるようにするために、どこまで分かったか、どんなことを解説してほしいかをあらかじめ考えさせておく。 ○早く終わった児童には2問目に取り組むか、別の解法がないかを考えさせる 〈発表者への指導〉 ○どこにどんな図形が見えるかを指を指すなどしながら、丁寧に話すようにさせる。 ○「まず」「次に」「だから」などの言葉を使って説明させる。 〈聞き手への指導〉 ○その解法の妥当性を考えながら聞くように指導する。 ○主体性をもたせるために解説を聞きながら、どの解法が自分にとって一番「は(はやい)か(かんたん)せ(せいかく)」かを考えながら聞き、適宜メモを取りながら聞くように指導する。 ○よりよい考え方ができたと思った児童はその場で紹介させる。
	6 振り返る。	○振り返りのレベル5段階を基に振り返りをさせる。

【ふりかえりのLv5段階】

- Lv1 気持ち(〇〇が楽しかった。～が難しかった。)
- Lv2 めあて(〇〇について分かった。～できた。)
- Lv3 力(〇〇を考えているとき、～できた。できるようになった)
- Lv4 成長(はじめは〇〇だったけど、△△することで～できるようになった。)
- Lv5 分析(〇〇ができるようになったから～の時生かしたい。△△の学習は～とつながっているのではない。□□の学習をして、それなら～はどうなっているのだろうか?という新たな問いが生まれた。)

6 成果と課題(授業研究会より)

○成果

(単元を通して)

- ・単元の始めにコンパス、定規を用いて模様を描かせ、その模様の面積を求めることができるようになることを単元のゴールに設定したことで、明確に目標をもって学習に取り組むことができていた。
- ・「振り返りのレベル5段階」を用いて振り返りをさせたことで、習得した知識技能を活用しようという意識付けをすることができた。
- ・タブレット端末に皆で作図した求積可能な図形の一覧を送り、それぞれの端末上で線を引くなどして進んで求積方法を考えようとする姿が見られた。

(個別最適な学びについて)

- ・自分たちで作図した図形の面積を求めるという学習は、熱心に解法を考える児童も多く見られ、学習意欲の向上につながった。

(協働的学びについて)

- ・グループで話し合いながら図の式を書いていくことは、理解が不十分な児童にとっては理解を深めることにつながった。
- ・タブレットではなく模造紙を使ったことで、皆で協力して取り組む姿が見られた。
- ・ポスターセッションは児童同士の距離が近く、話し手と聞き手との間で活発なやりとりが見られ、協働的な学びの充実につながった。

△課題

(個別最適な学びについて)

- ・解きたい問題をグループで選択したため難易度が適当でなく、見通しをもてないまま解説書作成に当たっている児童がみられた。個別最適な学びを充実させるためには、グループだけでなく、個人で取り組むという選択肢があってもよかった。しかし、その場合どのように協働的な学びを充実させるかの手立てを考える必要がある。

(協働的な学びについて)

- ・解説書制作の時間が足りなかったため、2時間に分けて十分に時間を確保した方が低位の児童にとってもよかった。
- ・上位の児童が中心に進め、低位の児童が見学するだけになっていた。そのため低位に児童の理解が深まるように説明しながら書く時間を十分に確保すべきだった。
- ・今回は和気藹々とした雰囲気が進められたが、内向的な児童や緘黙等の児童がいた場合のフォローが難しいため対応を考える必要がある。

(2) 人間関係づくり部会

① 人間関係づくり部会の目指すところ

横のつながり（小小連携）と縦のつながり（小中連携）の充実を図り、指導事項の共通化と実践化により中1ギャップの克服を図る。

- ・ 9年間の発達段階に応じた生活習慣（挨拶・時間・清掃）の定着を図る。
- ・ 構成的グループエンカウンターを通して、自己肯定感の向上と豊かな人間関係づくりの素地を養う。
- ・ 各校の情報共有を行い、生徒指導・教育相談上の課題の未然防止・早期対応を図る。

② 実践内容

ア 田代中学校区「田代スタイル」再徹底の取り組み

田代中学校区では、令和2・3年度の小中一貫教育に関する調査研究で、「挨拶・清掃・学習」を柱とする「田代スタイル（学習習慣・学習活動・生活のきまり）」を作成し、9年間の義務教育を通して、生徒指導の内容や方法に系統性を持たせ、学力の向上と社会性の育成を目指してきた。

しかし、その後の各校独自の取り組みの中で「田代スタイル」は形骸化する傾向が見られたため、人間関係づくり部は、新たな取り組みを始めるのではなく、この「田代スタイル」を4校で改めて周知・徹底し、足並みをそろえることを目標とした。

具体的には、掲示物の作成【図1】に加え、職員会議や集会で教職員・児童生徒への周知を行い、日々の学習・生活指導で活用することで、校区内での定着を図る取り組みを継続している。



【図1 田代スタイルの掲示物】

イ 9年間を見通した構成的グループエンカウンター指導計画・系統表の作成と実践

義務教育9年間を通して児童生徒の健やかな成長を途切れさせず、特に環境変化による「中1ギャップ」を解消することを目的として、小学校3校と中学校1校の連携体制で、構成的グループエンカウンター（SGE）を用いた9年間の指導計画・系統表【資料1】を作成し、実践している。

SGEは、自己理解・他者理解を深め、集団に温かい雰囲気をつくる効果がある。この計画により、4校が共通の目標と指導内容を持つことで、人間関係形成能力の発達を系統的に支援する共通言語となり、小学校から中学校への接続期には、SGEで培った対話スキルが適応不安を軽減し、スムーズな「心の接続」を実現する。また、9年間で段階的に自己肯定感と社会性を育むことで、人間関係のつまづきを防ぎ、生徒指導上の課題を未然に防ぐとともに、教師間でも指導観が統一され、継続的で予防的な生徒指導の基盤を築いていく。

中学校グループエンカウンター（学年別エンカウンター）

学年	テーマ	目標	エンカウンター例	活動の具体的な内容
1年	・自己理解 ・他者理解 ・自己受容	誰も知らない自分を見つけることで、自己開発へと繋げていく。	ジョハリの窓 （私の四面鏡）	エクササイズを通して「自分が知っていて周囲の人も知っている自分」「自分が知っていて周囲の人が知らない自分」「自分が気づいていなくて周囲の人が知っている自分」「自分も周囲の人も知らない自分」があることを知る。
2年	・他者理解 ・自己理解 ・自己受容	みんなそれぞれ違った持ち味があり、自分自身も良い持ち味があることを知る。	クラスの中の自分	日頃のクラスメイトの様子を思い浮かべながら、表内にクラスメイトすべてを割り当てる。書き終えたら表を切り分け、本人に渡し、用紙に貼る。
3年	・自己理解 ・他者理解	自分がどのような基準で高校の選択を考えているか表現し、友達の考えを聞くことにより友達の考えや生き方に気づく。	学校選びの条件	様々な高校選びの条件について重視するかを4段階で選択し、中でも特に重視するものをランキング付けと理由を書き、各班で発表する。その後、グループでランキング付けした5つをクラスで発表する。

中学校共通エンカウンター（ショートエンカウンター含む）

時期	テーマ	目標	エンカウンター例	活動の具体的な内容
年度初め	・他者理解 ・コミュニケーション能力の育成	自分のことを簡単にわかりやすく紹介し、相手の話に興味を持って聞く態度を育成する。	リレー自己紹介	短いコメントで自己紹介し、グループの自己紹介をすべてつなげていく。例えば「〇〇小学校出身の□□さんの隣の…」と続けていく。
	・他者理解 ・コミュニケーション能力の育成	人の話をていねいに聞くことを意識してクイズにいかし、グループで協力しながら、クラスの仲間とのつながりを深める。	「私は誰でしょう？」クイズ大会	アンケートをもとに、クラスメイトの誰のことか当てる。クイズ大会前に情報収集の時間をとり、グループ対抗戦で競う。
	・自己表現 ・他者理解 ・コミュニケーション能力の育成	言葉がなくてもチームで助け合う姿勢を大事にし、協力して正しい順番に並ぶことを目指す。	バースデーライン	無言でコミュニケーションをとり、誕生日順に一列に並ぶ。
学期はじめ 席替え時	・コミュニケーション能力の育成 ・信頼関係の構築	ていねいに話を伝えたり、相手の話を広げたりすることを意識し、話す人も聞く人も、お互いが安心できる雰囲気をつくることを目指す。	サイコロトークン （すごろくトーク）	トークテーマが書かれたすごろくをすすめ、話をし、聞く人は話を広げていく。
	・信頼関係の構築 ・コミュニケーション能力の育成	友達と楽しみながら協力して活動することを目指す。また、遊びを通して、仲間とのつながりを感じることを目指す。	餃子じゃんけん	グーを「具」チョキを「ニラ」パーを「皮」に見立て3～4人でじゃんけんし、3種類そろってあいこになったら「いただきます!」2種類ならば「〇〇足りない!」1種類ならば「〇〇ばかり!」と言って指定回数「いただきます」ができるまで繰り返す。
随時	・他者理解	どんな小さなことでも、よいところを見つけて言葉にし、仲間のよさに気づき、感謝や応援の気持ちをもって学校生活を送る。	良いところ探し	各行事や日常生活において委員会活動や学級活動を通して良いところ探しを行い張り出す。
	・コミュニケーション能力の育成	自分の考えだけでなく、仲間の意見にも耳をかたむけ、相手の意見を受け入れたり、伝えたりする力を意識して活動する。	清少納言の知恵の板	グループで協力して指定の形を作る。
年度終わり	・信頼関係の構築	卒業式に向け仲間との思い出をふり返りながら、心をこめてメッセージを書き、1年間のつながりを大切にして、前向きな言葉を届ける。	ぐるぐるメッセージ	1年間お世話になったクラスメイトに短いメッセージを送る。

小学校グループエンカウンター（学年別エンカウンター）

	学年	テーマ	目標（活動を通して身につけること）	エンカウンター例（活動内容）	活動の具体的な内容
小学校 低学年	1年生	仲間と出会う、自分と相手を知る、学校生活に慣れる	自分の気持ちを簡単な言葉で表現できる。友達の気持ちに気づこうとする。集団のルールを知り、守ろうとする。協力することの楽しさを知る。	「こんにちは！自己紹介ゲーム」（名前、好きなものなど簡単な自己紹介）	児童一人ひとりが、自分の名前、好きな食べ物、好きな動物など、簡単な情報を発表します。発表後、他の児童は発表者の顔と名前を覚えるように意識します。
				「気持ちお天気図」（今日の気持ちを絵や言葉で表現）	自分の今の気持ちを、天気（晴れ、曇り、雨など）や色、絵などで表現し、簡単な言葉で説明します。自分の気持ちに気づき、表現する練習をします。
				「なかま集まれ！」（共通点探しゲーム）	児童が共通の質問（例：「きょうだいがいる人」「犬を飼っている人」「夏休みが楽しみな人」など）を投げかけ、該当する児童がグループを作るゲームです。仲間意識を育みます。
				「みんなで協力！お片付けゲーム」	教室の遊具や道具などを、協力して早く片付けるゲームです。役割分担をしたり、声をかけ合ったりして、協力することの楽しさを体験します。
	2年生	仲間と出会う、自分と相手を知る、学校生活に慣れる	自分の気持ちを簡単な言葉で表現できる。友達の気持ちに気づこうとする。集団のルールを知り、守ろうとする。協力することの楽しさを知る。	「わたしの宝物紹介」（大切なものを紹介し、他者の話を聞く）	児童が自宅から大切にしている物（おもちゃ、写真、記念品など）を持参し、その物に対する思いやエピソードを発表します。他の児童は、発表者の話に耳を傾けます。
				「この気持ち、なんだろう？」（表情や声の調子から気持ちを推測）	教師が様々な感情（嬉しい、悲しい、怒っているなど）を表す顔の表情や声のトーンを提示し、それがどんな気持ちなのかを児童が当てたり、その気持ちになった時のことを考えたりします。
				「協力！積み木タワー」（目標達成のために協力する）	グループごとに与えられた積み木を使って、決められた時間内でより高いタワーを作る活動です。崩れないように、どうすればいいか話し合い、協力して取り組みます。
				「ありがとうの木」（感謝の気持ちを伝える）	大きな木の絵を模造紙に描き、児童が日頃の感謝の気持ちをメッセージカードに書き込み、木の葉っぱのように貼り付けていきます。感謝の気持ちを伝える機会を作ります。
小学校 中学年	3年生	仲間と深める、多様性を知る、問題解決の芽生え	自分の考えや意見を理由とともに伝えようとする。他者の意見を理解し、尊重しようとする。集団の中で自分の役割を意識する。簡単な問題解決のために話し合うことができる。	「私の得意技、君の得意技」（互いの得意なことや苦手なことを知り、認め合う）	児童が自分の得意なことや好きなこと、また少し苦手なことなどを発表し合います。互いの個性や違いを認め、尊重する気持ちを育みます。
				「もしもタイムマシンがあったら…」（想像力を働かせ、多様な意見に触れる）	「もしもタイムマシンがあったら、いつの時代に行って何をしたいか」というテーマで自由に想像し、グループや全体で発表し合います。多様な発想や意見に触れる機会とします。
				「クラスのきまり、どうする？」（簡単なルール作りを通して合意形成を学ぶ）	クラスで改善したい点や、新しく決めたいルールについて、児童が意見を出し合います。話し合いを通して、よりよいクラスにするための合意形成の過程を学びます。
				「困ったとき、どうする？」（場面設定）」	「友達が困っていたら」「忘れ物をしてしまったら」など、具体的な困る場面を設定し、その状況でどう行動するか、何ができるかをグループで話し合い、発表します。
	4年生	仲間と深める、多様性を知る、問題解決の芽生え	自分の考えや意見を理由とともに伝えようとする。他者の意見を理解し、尊重しようとする。集団の中で自分の役割を意識する。簡単な問題解決のために話し合うことができる。	「クラスのヒーロー・ヒロインは誰？」（互いの良い点を見つけ、認め合う）	児童が自分の良い点や頑張っている点を見つけ、カードに書いて互いに贈り合います。他者の良い面に目を向け、認め合うことを促します。
				「伝えたい、私の思い」（意見発表と傾聴の練習）	児童が特定のテーマ（例：「給食の献立について」「休み時間の過ごし方」など）について自分の意見をまとめ、クラスの前で発表します。発表後、質疑応答を行い、傾聴の姿勢も養います。
				「協力！秘密のミッション」（グループで課題を解決する）	グループごとに「○○を達成せよ」といったミッションが与えられ、その達成のためにメンバーで協力して知恵を出し合い、役割分担をして取り組みます。
				「意見が分かれたらどうする？」（多数決や話し合いによる解決の導入）	あるお題（例：「運動会で一番盛り上がる競技は？」）に対して意見が分かれた場合、どのようにして結論を出すか（多数決、話し合い、他の方法など）を体験的に学びます。
小学校 高学年	5年生	仲間と探求する、自己と社会のつながり、協働と貢献	自分の考えを論理的に表現し、建設的に議論できる。多様な意見の中から共通点や相違点を見出し、統合できる。集団の一員として責任を果たし、貢献しようとする。課題解決のために主体的に行動できる。	「私はこんな人、君はこんな人」（詳細な自己分析と他者理解）	自分の性格、得意なこと、苦手なこと、将来の夢などについて、より深く自己分析し、それを発表します。他者との共通点や相違点を見つけ、自己理解と他者理解を深めます。
				「ディベートに挑戦！」（テーマを設定し、賛成・反対に分かれて議論）	身近な社会問題や学校生活の課題をテーマに設定し、賛成派と反対派に分かれて議論を行います。論理的な思考力や表現力、相手の意見を聞く力を養います。
				「企画会議！みんなでイベントを考えよう」（役割分担と協働）	児童が中心となって、学校行事やクラスのイベントを企画します。企画立案、役割分担、予算検討など、具体的な計画を立てる過程で協働することの重要性を学びます。
				「クラスの課題、どう解決する？」（具体的な課題設定と解決策の検討）	クラスで実際に抱えている課題（例：忘れ物が多い、話し合いがまとまらないなど）を取り上げ、その原因分析から具体的な解決策の検討、実行計画までをグループで考えます。
	6年生	仲間と探求する、自己と社会のつながり、協働と貢献	自分の考えを論理的に表現し、建設的に議論できる。多様な意見の中から共通点や相違点を見出し、統合できる。集団の一員として責任を果たし、貢献しようとする。課題解決のために主体的に行動できる。	「未来の私、今の私」（自己の成長と将来の展望）	将来の夢や目標を具体的に思い描き、それに向けて今からできることは何かを考えます。過去から現在、未来へと続く自己の成長を認識します。
				「多様な価値観と向き合う」（社会問題などを題材に多角的な視点を持つ）	環境問題、貧困、平和など、様々な社会問題を題材に、異なる立場や価値観があることを学びます。多角的な視点から物事を捉える力を養います。
				「プロジェクト学習での協働」（長期的な目標に向けたグループ活動）	例えば「学校の環境改善プロジェクト」など、長期的な目標を持ったプロジェクトを設定し、グループで計画から実行、評価までを協働して行います。
				「よりよい社会のために、私にできること」（社会貢献への意識付け）	地域や社会が抱える課題について調べ、自分たちに何ができるかを考えます。ボランティア活動の企画や、情報発信など、具体的な社会貢献への意識付けを行います。

【資料 1 SGE 指導計画表】

【田代中学校の実践】

（ 第 1 ）学年の取組

- ・テーマ 自己理解・他者理解・自己受容
- ・活動主題「 私の四面鏡 」
- ・SGE「 誰も知らない自分を見つけることで、自己開発へとつなげていく。 」

〈活動の流れ〉

- ① 3～5人のグループを作り、ワークシートと一緒に作業する人の名前を書かせる。
- ② ワークシートの表に1～20の長所を表す言葉から自分に合う言葉を3～5つ選ばせる。
- ③ 裏に一緒に作業する人の名前を書き、その人に合う言葉を3～5つ選び、○をつける。
- ④ ○をつけ終わったら、グループで発表順を決め、自分以外の作業メンバーにその人に合う言葉を発表し合う。
- ⑤ 自分のことを伝えてもらった時は、「○○さんから見た私」の欄に○をつけて記録する。
- ⑥ 最後に自分が選んだ言葉と他のメンバーが選んだ言葉を見比べて、気づいたことや感想を書かせる。

○活動中の生徒の様子○

【ワークシート(表)】

私の四面鏡

第 1 年 第 1 年 高 生

① 一緒に作業する人の名前を、ここに書きましょう。

② 下の表の1～20の長所を表す言葉から自分に合う言葉を3～5つ選び、○をつけてください。

③ 裏に一緒に作業する人の名前を書き、その人に合う言葉を3～5つ選び、○をつけてください。

④ 自分が選んだ言葉と他のメンバーが選んだ言葉を見比べて、気づいたことや感想を書きましょう。

	私	さくら	さくら	さくら	さくら	さくら
1. 元気な子						
2. よく笑う子						
3. 活発な子						
4. 優しい子						
5. しっかりした子						
6. 真面目な子						
7. 思いやりがある子						
8. 努力家な子						
9. 自信がある子						
10. 思いやりがある子						
11. 思いやりがある子						
12. 思いやりがある子						
13. 思いやりがある子						
14. 思いやりがある子						
15. 思いやりがある子						
16. 思いやりがある子						
17. 思いやりがある子						
18. 思いやりがある子						
19. 思いやりがある子						
20. 思いやりがある子						

【ワークシート(裏)】

	さくら	さくら	さくら	さくら	さくら	さくら
1. 元気な子						
2. よく笑う子						
3. 活発な子						
4. 優しい子						
5. しっかりした子						
6. 真面目な子						
7. 思いやりがある子						
8. 努力家な子						
9. 自信がある子						
10. 思いやりがある子						
11. 思いやりがある子						
12. 思いやりがある子						
13. 思いやりがある子						
14. 思いやりがある子						
15. 思いやりがある子						
16. 思いやりがある子						
17. 思いやりがある子						
18. 思いやりがある子						
19. 思いやりがある子						
20. 思いやりがある子						

自分が選んだ言葉と他のメンバーが選んだ言葉を見比べて、気づいたことや感想を書きましょう。

自分から見た相手は～

相手から見た自分は～



・活動の成果 (◎) と課題 (●)

- ◎自分が考えていた事と全く違う点を他の人から指摘されて、自分の事について新しい発見をすることができた。
- ◎他の人から指摘された点を振り返り、自分の事を見つめ直しさらに良くしようという向上心が生まれた。
- ◎少人数グループで相互にフィードバックすることで、お互いの信頼感が増した。また、活動を通じて相手の長所を指摘する習慣が身につく、コミュニケーション力が向上した。
- 自己開示が苦手な生徒や相手のことを指摘することに時間がかかる生徒がいるグループは持ち時間が足りず、シェアリングが不十分になりがちだったので、指導者からより積極的な声かけが必要だった。

【田代小学校の実践】

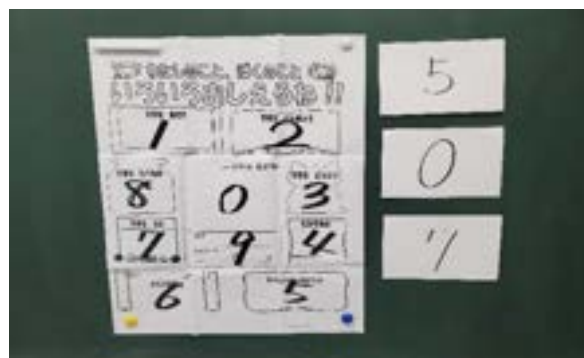
(1)(第3)学年の取組

- ・テーマ 友達のことを知る
- ・活動主題「みんな えがお だいさくせん！」
- ・SGE「友達の好きなことや、頑張っていることを知って、それについてほめる。」

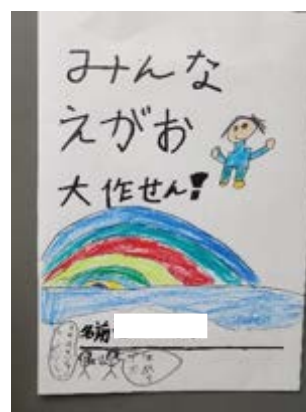
〈活動の流れ〉

- ① 自分の好きなことや頑張っていることをワークシートに書く。
- ② 自分の興味関心のあることを友達に話したり、聞いたりする。
- ③じゃんけんをして、友達から聞いたことをもとに、ほめる。
- ④ 振り返りをする。

・児童(生徒)の様子 ※活動の写真や振り返りシートの画像も掲載しながら



【板書】



【ワークシート】

・活動の成果 (◎) と課題 (●)

- ◎友達の興味関心のあることを知ることで、お互いの事をよく知り仲良くなるきっかけができた。
- ◎自分の興味関心のあることを受容的な態度で聞いてもらい、ほめられることで自己肯定感が高まった児童が多かった。
- ◎振り返りの中で「みんなの事を知れてよかった」や「クラスとしての一体感が高まった」といった記述をした児童が多くいた。学級集団としての支持的風土が高まった。
- 落ち着いて過ごしている時は、友達の事を考えて発言や行動をすることができるが、感情が高ぶった時は難しい。今後も取り組みを継続していく必要がある。

【若葉小学校の実践】

(第1) 学年の取組

- ・テーマ 自分を知る
- ・活動主題 「気持ちお天気図」
- ・SGE 「自分の気持ちを天気で表現し、簡単な言葉で説明する。」

〈活動の流れ〉

- ① 4つの天気から想像する気持ちを考える。
- ② 自分の気持ちを天気で表現する。
- ③ 描いた絵を友達と見せ合う。
- ④ 振り返りをする。

・児童(生徒)の様子 ※活動の写真や振り返りシートの画像も掲載しながら



【板書】



【隣の人の絵を見ている様子】



【児童のワークシート】

・活動の成果 (◎) と課題 (●)

◎何を描いてよいかわからずに悩んでいる児童に対して、「困っている気持ちは、どの天気だと思う？」という発問をしたことで、「雷かな」と児童が答え、手を止めることなく雷の絵を描くことができていた。

◎振り返りの中で「同じだった」、「違った」や「いろんな気持ちがあった」といった記述をした児童がいたため、自分の描いた天気と比べながら、友達の絵を見ることができたと感じた。

●雨や雷の時に「悲しい」以外に、「嬉しい、楽しい」と答える児童がいた。理由を尋ね、多様な考え方を全体で共有するとよかった。

●一般に晴れにはプラス、雨や雷にはマイナスイメージがあるが、その概念と個々の思い（雷にはプラスイメージを持つ）のズレへの対応に苦戦した。本活動のねらいを練り直し、多様な思いを受け止めたい。

【弥生が丘小学校の実践】

（第6）学年の取組

- ・テーマ
- ・活動主題「よりよい社会のために、私にできること」
- ・SGE「地域や社会が抱える課題について調べ、自分たちに何ができるかを考える。ボランティア活動の企画や、情報発信など、具体的な社会貢献への意識付けを行う」

〈活動の流れ〉

- ① 毎朝校門付近の落ち葉掃きや、校舎の窓拭きを行う。
- ② ポスターを作るなどして活動内容を紹介したり、参加を呼びかけたりする。
- ③ 振り返りをする。

・児童の様子



（掃除前）



（5・6年生の活動）



（掃除後）

（児童の振り返り）

- ・信頼できる仲間と一緒に落ち葉掃除をしているのはとても楽しく、掃除が終わった後はすっきりします。
- ・道がきれいになるところと話しながらできるから楽しい。
- ・きれいになったら達成感がするので楽しいです。
- ・モーニングボランティアをして毎日楽しかった。
- ・朝の掃除で仲間と協力するところや、掃除をする楽しさを学びました。
- ・違うクラスの友達や5年生とも話しながらできるから楽しい。楽しく掃除ができるからうれしい。
- ・モーニングボランティアをし、6年生との交流や学校がよりよくなるための行動ができ掃除をすることの大切さを学ぶことができていいと思う。
- ・モーニングボランティアをして、6年生とかと仲良くなれた気がした。来年6年生になるための準備ができた。

・活動の成果（◎）と課題（△）

◎登校後から始業までの時間のボランティア活動とすることで、主体的に人のために動こうとする姿勢がよく見られた。

◎6年生が昨年度から毎日継続して取り組んできたことで、下級生（5年生）も進んで参加するようになってきた。

◎参加人数が増えたことで、人手が余りつつあったが、「他にできることがないか」を考え、会議室の掃除を行うなど自分にできることを見つけ、取り組もうとする姿が見られた。

△勤務時間前なので、教員の確保ができなかった場合、今後継続して取り組んで行くことが難しい。

ウ 挨拶運動

前々回の小中一貫の発表時より行われてきた交流の一つに挨拶運動がある。中学校の生徒会が校区内の小学校に出向いて校門付近で挨拶運動を行う取組である。感染症対策で近年実施されてこなかったが、「田代スタイル」の徹底のため、今年度改めてスタートさせることとした。中学校の新生徒会が軌道に乗る3学期に実施予定である。

エ 新入学説明会

中一ギャップの克服のために毎年秋に新入学説明会を行っている。中学校に児童と保護者を招き、中学校の生活や学習、生活の決まり、部活動についての説明を行う。

特に生活の決まりについては小学校からのギャップが大きいため、文書で全て示して丁寧に説明を行っている。

オ 生徒指導上の課題の未然防止・早期対応につながるような情報共有

新入生情報交換会で、生徒指導上の課題の未然防止・早期対応につながるような情報共有を図る。

4校の小学校6年生に関わる職員で、生徒指導上の課題の共通理解を行った。新年度に入学してくる生徒の情報を共有することで、継続性のある指導を実施することができた。

③ 成果と課題

【成果】

- ・「田代スタイル」の再徹底を行うことで、4校で共通理解ができて、指導の一体化を図ることができた。児童生徒や保護者に対して同じ方向性で説明することができた。
- ・児童生徒の自己理解・他者理解が深まり、学年ごとの発達段階に応じた人間関係形成が促進された。継続的な取り組みにより、学校全体の心理的安全性の向上が期待できる。
- ・生徒指導に係わる情報交換については、未然防止・早期発見に向けて重要な取組であった。

【課題や改善策】

- ・令和4年度以降に各校で用いられてきた学習・生活のきまりから、「田代スタイル」に再移行することや校名が「田代」ではない若葉小学校と弥生が丘小学校に浸透させることへの負担感、違和感の声が聞かれた。
- ・各校の児童生徒の実態や実施環境の違いにより、SGEの活動の質にばらつきが生じた。4校で共有するという性質上、年間計画の柔軟性が乏しく、個別のニーズへの対応が難しい場面も見られた。
- ・日常的な生徒指導に係わる情報交換方法について検討する必要がある。

(3) 特別支援教育部会

①特別支援教育部会の目指すところ

特別支援教育では、一人一人のニーズに合わせた個別最適な学びを重視しているが、協働的な学びは、一人一人の個の学習の質を高め、更に集団の学習の質や社会性を高める学習形式であるため、特別支援教育においても重要である。そこで、特別支援教育部会では、「個の学習の質の向上」「集団の学習の質の向上」「社会参画意識の育成」「探究的な学習の促進」「自己肯定感の向上」などの協働的な学びのメリットを各教科や自立活動の学習の中で生かし、児童生徒の学びを深めたり、社会性を育んだりしてきたい。また、そのために必要な教室環境づくりや ICT の活用など学習環境の整備についても研究を深めていく。

以上のような共通理解のもと、特別支援教育部会では「自分の考えをもち、自分の言葉で説明する姿」や「協働的な学びを通して、課題に取り組む姿」をめざした取組を、各校で実践していく。また、研究主題である「豊かな人間性と自立心を培い、生き抜く力をもった児童生徒の育成」に迫るために、外部講師招聘による、特別支援教育部会の研修会を計画し、研究を深めていく。

《部会の実践》

	期 日	研修内容等
第 1 回	5 月 2 6 日 (月)	・各校の取組の現状 (情報交換) ・今年度の取り組みについての協議・共通理解 (研究の方向性、まとめ方、期日の確認等)
第 2 回	7 月 2 5 日 (金)	・各校の実践や進捗状況の確認 ・1 学期中の取り組みの紹介 (情報交換)
第 3 回	8 月 2 6 日 (火)	・講師招聘による研修会 (講演) 「9 年間の義務教育の中で身につけてほしい力について」 講師：学校法人星生学園 佐賀星生学園 教頭 安部 和也 先生



写真1 【8月26日の研修会】

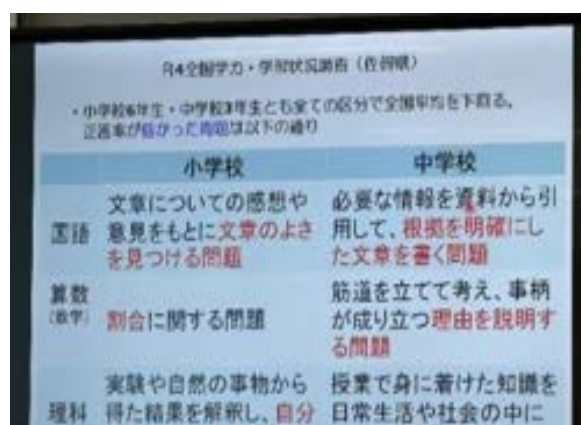


写真2 【安部先生の資料】

②実践内容

《田代中学校の実践》

1. 自立活動を進めるにあたって

コミュニケーション活動を主体とした自立活動を行うにあたり、目指すべき2つの姿、「協働的な学びを通して課題に取り組む姿」「自分の考えをもち自分の言葉で説明する姿」について、より具体的な変容例を示すことで共通理解を図り、研究を進めた。

①「協働的な学びを通して、課題に取り組む姿」

具体的には、生徒が友達や教師と関わりながら、同じ目的に向かって一緒に考えたり、活動したりする姿と捉え、その姿を3段階（表1）に分け、自立活動を通して最終段階に到達することを年間の目標として実践を行った。また、その際に配慮すべき事項（表2）についても共通理解を図り、実践していった。

表1 活動を通して目指す姿の具体例

	初期の段階	中期の段階	最終の段階
協働的な学びを通して課題に取り組む姿	・グループに参加できる。 ・教師の指示と一緒に聞いている。	・ルールを守ってグループ活動に参加できる。	・グループ内で意見を交換し、協働して課題を解決できる。
自分に考えをもち、自分の言葉で説明する姿	・単語やジェスチャー ・指さし呼称 など	・質問に対し、理由を添えた応答ができる。	・論理的な応答ができる。 ・自分の考えを述べる ことができる。

表2 配慮すべき事項

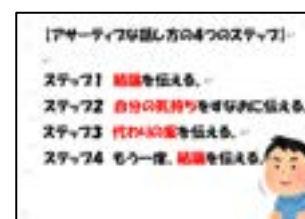
視 点	配慮すべきこと
心身の発達段階での配慮	言語のみに限定するのではなく、心身の発達段階に応じて、絵・写真・ジェスチャーなど多様な自己表現方法と捉える。
安心できる環境	発言が否定されない、失敗しても大丈夫という安心感を醸成する。
成功体験の積み重ね	スモールステップで行うことで、うまくできた、相手に伝わったという実感をもたせ、「やってみよう」という意欲につなげる。

2. 自立活動の実際

（1）自立活動の研究授業（本時4／4 2年自閉・情緒学級、6名在籍）

・題目『自他共に不快な気持ちにならないようなコミュニケーションの方法を身につけよう』
ア はじめに

比較的小となしい生徒もいれば、相手のことを意識できず相手の話を遮る生徒もいる。会話を「むり」「やばい」などで済ませる場面も見られる。生徒は、前時に「アサーティブな応答～理論編～」において、自己の表現タイプを確認している。



イ 研究授業の実際

手立てとして、事前にアサーティブな話し方の4つのステップ(右図)を示した。また、場面設定は学校生活での一場面の中でアサーティブな応答を考え、それを対面で実践するという流れで行った。



ウ 成果と課題・改善策

【活動の成果】

授業が進むにつれて「自分の考えを自分の言葉で説明する姿」が見られた。特に、普段は大人しい生徒が自ら進んで声に出して朗読するなど、より能動的な活動となった。また、ペアでのコミュニケーション活動では、お互いの応答からよりアサーティブな表現を導こうとする姿も見られた。

【課題と改善策】

グループ活動を行うにしても2名と少なく、2人の人間関係に大きな影響は見られなかった。実践的なコミュニケーションスキルにつなげるには、より多くのパーソナリティと一緒に活動する場面を設けるなどの工夫が必要である。

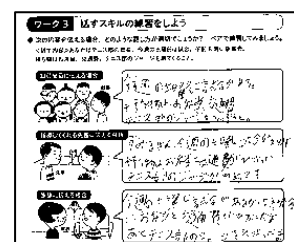
(2) その他の自立活動について

① 『ソーシャルスキル』～話すスキルをUP～：こすもす12組(1年自閉・情緒学級) ア はじめに

自閉・情緒の8人クラス。相手のことを意識できず自分の考えや判断で行動することにより問題が発生している。また、相手の気持ちを考えずに言葉を発することもあり、それが原因で情緒が不安定になることもあった。そこで、聞く力を身につけるためのソーシャルスキルトレーニングを行った。

イ 活動の実際

まず、話すスキルの3要素(言葉・態度・心づかい)を説明し、イラストのモデリングを見てその善し悪しを協働的な学びを通して見つけ出した。なお、使用したモデリングは生徒が考えやすい場面を用いた。



ウ 成果と課題・改善策

【活動の成果】

生徒は、言葉や態度についてはある程度予測できた様子だが、心づかいについては新鮮な感覚のようで、生徒のようすに変化が見られた。

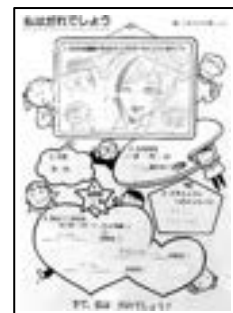
【課題と改善策】

まだ、話す活動を行っていないため、これをどこまで実践することができるかは未知数である。今後は、話すスキルを身につけるような活動も取り入れ、交流学級で多くの友達と会話することで実践力を身につけてほしいと考える。

② 『私はだれでしょう?』～コミュニケーション活動～:こすもす7組(3年自閉・情緒学級)

ア はじめに

3年生5名が在籍する自閉・情緒の学級である。情緒の変動が激しく、自己を素直に表現することに抵抗感を感じている生徒が多いため、新たな仲間とコミュニケーションを取ることができていなかった。そこで、新しい仲間を知ることをめあてとしたゲーム形式でのコミュニケーション活動を行った。



イ 活動の実際

自己紹介については言語のみとせず、趣味や特技、それに関するイメージを『ことば』と『イラスト』で表現させた。また、活動の後半では、自己紹介カードとサイコロを用いた「これは誰かな?ゲーム」を行った。その際、自己紹介カード以外の質問も受けつけることで、回答者は、質問の内容に沿って、自分の言葉で分かりやすく説明する活動も行った。

ウ 成果と課題・改善策

【活動の成果】

はじめ、自分の趣味や特技などを書くことに抵抗感を示していたが、活動が進むにつれて集中して取り組み、後半の『これは誰かな?ゲーム』では、笑顔で活動することができた。また、自分の言葉で質問内容に答える場面が多く見られた。

【課題と改善策】

課題が趣味・特技などのパーソナルな内容のため、これが、公共の場での実践的なコミュニケーションスキルにつながるかは疑問である。今後は、入学試験の面接にも通じるような場面設定を設けるなどの工夫が必要である。

③ 『パーソナルスペースについて考えよう』:こすもす9組(2年自閉・情緒学級)

ア はじめに

2年生が6名在籍する自閉・情緒の学級である。明朗快活で礼儀正しい生徒が多いが、相手を傷つけるような発言や、相手との距離感が上手く取れないものもいる。そこで、年間を通して、コミュニケーションスキルを身につける活動を計画・実践した。

イ 活動の実際

本時の活動では、プリントを用いて身近な人々と自分との距離感を考え、協働的な学びとして意見交流を行った。次に、実際にメジャーを用いてパーソナルスペースの距離を測定するなどの工夫によって実践的な理解につなげた。また、パーソナルスペースの図を学級内でシェアして、より深い学びにつなげた。

ウ 成果と課題・改善策

【活動の成果】

協働的な学びを通して、生徒は個人によってパーソナルスペースに対する意識に差異があることに気付くことができた。また、距離を測定したときは、「これくらいの距離なんだ。」といった意見も聞かれるなど、パーソナルスペースの実践的な理解につながったと考える。

【課題と改善策】

生徒によってワークシートの記入が難しく、記入に時間がかかってしまった。あらかじめロイロノートを用いて直感的に記入できるようなシートを作っておけば、全体の活動が円滑になったのでは考える。

④ 『自分の気持ちを伝えよう』：こすもす10組（2年病弱クラス）

ア はじめに

この学級は複式学級であり、1年生1名、2年生1名の計2名が在籍している。どちらも友人には積極的にコミュニケーションを取ることができるが、大人にはあまり話しかけることができず、自分の気持ちを伝えることを苦手としている。そこで、自立活動においては、自分の気持ちを言語で表したり、他者の気持ちについて考えたりする活動を取り入れている。

イ 活動の実際

生活の様々な場面において、気持ちを表す表現をブレインストームで上げさせた。次に、特定の場面設定において、自分がどのような気持ちをもつかを考えさせ、特に「嬉しかったこと」「悲しかった」について実体験を考えさせ、それを互いに共有するなど協働的な学びを通して気持ちの自己理解につなげた。

ウ 成果と課題・改善策

【活動の成果】

生徒同士の意見の共有や、教師自身も自分の気持ちを考えることで、考え方の違いを感じることができた。特に、「テストの点数が悪かったときの気持ち」の問いでは、「悲しい」や「悔しい」などの気持ちが多かったが、友だちと共有することで自己理解や共感につながり、「次は頑張ろう」という前向きな変化が見られる生徒もいた。

【課題と改善策】

書く活動が中心であり、豊かな感情表現を示すような場面が少なく、気持ちを言葉で伝えるまでには至らなかった。今後は、自分の気持ちを具体的な言葉として考えるなどの活動を行ったのちに、それをもとにペアコミュニケーション活動を行うなど、より実践的なコミュニケーションスキルが身につく活動につなげていきたい。

《田代小学校の実践》

1. 「自分の考えをもち、自分の言葉で説明する姿」をめざした取り組み

5年 自立活動「自分をみつめて」

自閉症・情緒障害学級の児童は、将来的に支援学級退級を目指している。そこで、自分の得意なことや苦手なことを知り、メタ認知を高めるために自分のことを深く考える活動に取り組んだ。

【児童の姿や変容など】

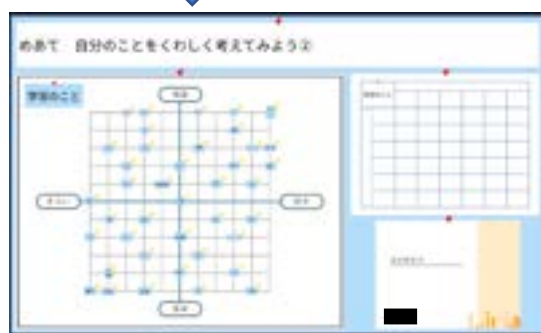
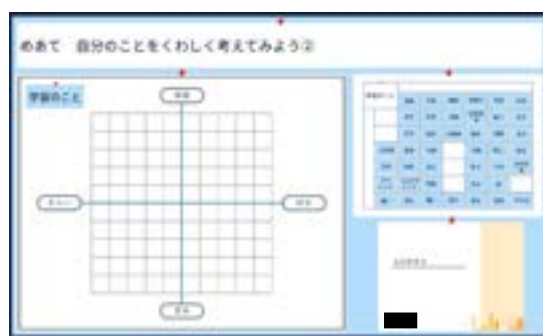
タブレット上で、あてはまる箇所にカードを動かすという活動ができるように準備をした。修正やサイズ変更も容易なため、児童は意欲をもって活動に取り組むことができた。自分の得意や苦手が視覚的に分かり、嫌いだけど得意なものがあることや、好きだけど苦手なものがあることに気付くことができていた。

【成果や課題・改善策】

学習や宿題などを、苦手・嫌いだから取り組まないという行動をしていた児童ができるようまで挑戦し、教師に相談するということができるようになってきた。支援学級内での友達との関わりの中でも

「得意だから代わるよ」「苦手なのに頑張っていてすごい」などのポジティブな言葉が増えてきた。

「活動の様子の写真やワークシート」など



2. 「協働的な学びを通して、課題に取り組む姿」をめざした取り組み

5年 国語科「夏の夜」

夏らしいものや様子を俳句で書き表す活動に取り組んだ。たくさんの言葉が集まるよう「みんなで協力して言葉を集める」ということをめあてとした。

【児童の姿や変容など】

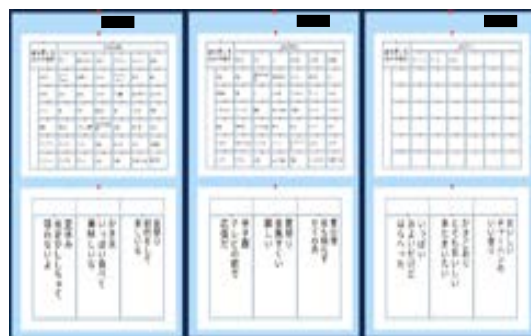
書くことが苦手な児童や関連したものを考えることが苦手な児童も活動に取り組みやすくするために、ロイロノートを活用することで友達の考えをリアルタイムで共有できるよう工夫した。

初めは夏に関連する言葉が思いつかず戸惑っていた児童もいたが、友達と協力しながら言葉を集めていくことで、徐々に自分の考えを言うことができるようになってきた。たくさん言葉を集めたり難しい言葉を思いついたりした児童に対し、賞賛の言葉をかけることもできていた。

【成果や課題・改善策】

- ・書くことが苦手な児童は、音声入力やタイピング入力などそれぞれが好きな方法で、最後まで学習に取り組むことができていた。
- ・友達の考えをリアルタイムで共有することで、「花火大会」という言葉から、「かき氷」や「やきそば」などの関連する言葉を見つけるための助けになっていた。

「活動の様子の写真やワークシート」など



《若葉小学校の実践》

1. 「自分の考えをもち、自分の言葉で説明する姿」をめざした取り組み

5年 算数科 「合同な図形」

『多角形の内角の和は三角形の個数× 180° である』という考えを導き出す学習をした。前時までに学習した内容『三角形の内角の和は 180° である』という掲示物をヒントにし、四角形を対角線で分割して三角形を2つ作ったり五角形から3つの三角形を作ったりして、多角形の内角の和の求め方を自分の言葉で説明した。

【児童の姿や変容など】

児童AはFSIQ66であり、自閉症・情緒障害特別支援学級に在籍している。特にワーキングメモリが低いこともあり、学習においては前日の学習内容の定着がなかなか難しい。

児童への「わかった」を促すために、既習学習のポイントを教室内掲示した。学習の始まるの時間には、掲示物を貼っている場所に移動し、復習することが習慣になっている。ポイントを確認しながら自分の言葉で説明しようとする前向きな姿勢が見られた。量感が捉えにくい学習ではあったが、習熟が見られた。その結果、テストにおいても85%の正答率であった。

【成果や課題】

算数科だけでなく、他の学習においても前時までの学習掲示物があることにより安心して本時の学習に臨むことができていた。どの学習掲示物も、年間を通した掲示をすることで児童の継続的な「分かった」に寄与していく必要がある。

また、日頃から考えたことや疑問に思ったことは自由に発言できる雰囲気づくりをすることが大切である。

「活動の様子の写真やワークシート」



2. 「協働的な学びを通して、課題に取り組む姿」をめざした取り組み

2年 国語科 「あったらいいなこんなもの」

自閉症・情緒障害特別支援学級の2年生は、主に支援学級で国語の学習をしている。インクルーシブ教育の一環として「話す・聞く」の学習を交流学級の友達と行った。児童が安心して交流学級で学習に参加できるようにワークシートに学習内容や流れを提示し、ティームティーチングで授業を展開した。事前にワークシート集を配布し、発表原稿のモデル文や司会進行の流れを示し、活動に見通しがもてるようにした。

【児童の姿や変容など】

児童は、ゴールを明確化することで、安心して「話す・聞く」活動に参加することができた。また、「司会者」「発表者」の名札をつけることで、話す時間と聞く時間を意識することができた。

初めは、交流学級で学習することに不安を感じる児童もいたが、自分の考えた「あったらいいな」の発表原稿が完成するにつれて、「早くみんなに紹介したい。」と口にする児童も出てきた。いつもはグループ活動に消極的な児童が、手を挙げて質問する場面も見られ、楽しく活動することができた。今後も交流の時間を作り、本人の自信に繋げたい。

【成果や課題】

自閉症・情緒障害特別支援学級の児童は、将来的に支援学級退級を目指している。交流学級での学習の成功体験を積みながら、今後も障がいのある子もない子も多様性を認め合い、一緒に学習できる環境づくりを続けていきたい。

「活動の様子の写真やワークシート」



《弥生が丘小学校の実践》

1. 「自分の考えをもち、自分の言葉で説明する姿」をめざした取り組み

工夫や手立て等	児童の姿や変容・成果 (○) や課題・改善策 (◇)
◆「トークタイム」(朝の活動・自立活動) ・「休日の出来事」「好きな○○」「今日の朝ご飯」「行事の感想」など話しやすいテーマにする。 ・「話す準備ができた人から」で安心して話させる。 ・「時系列で」慣れてきたら「印象深いことを3つの文で」などいろいろな話し方を経験させる。 ・話型や教師モデルを示す。 ・発言できない児童には、実態に合わせて取り組みやすいステップを設ける。(絵で表してみる/ホワイトボードに書く/絵日記をもとにする/教師と一緒に話す/答えられる質問1つだけ答える/など)	○話型や例を示すことで、模倣しながら安心して話している。話すことへの抵抗が小さくなっている。 ○聞く態度、質問の仕方を示したり、聞く態度や質問の仕方などを褒めたりしてきた。聞き手が育ったことで、話し手の「考えを言葉で表現する楽しさ」につながっている。 ○教師モデルでは話し方を学ぶとともに、内容に興味をもって聞き、楽しみにしている姿が見られる。伝え合う楽しさやコミュニケーション、人間関係にも効果が感じられる。 ◇支援学級内では発表できるが、交流学級では固まったり、小さな声になったりしてしまう。継続して自信をもたせていきたい。
◆「先生すごろく」(自立活動) ・すごろくの中で、先生からの質問に答えるマスを作り、質問に答える形で自分のことを伝える場を設定する。	○ゲームをしている感覚で、構えることなく自然に、自分のことを伝えることができていた。 ○考えを伝え合う楽しさや良さを感じていることが児童のふり返りにも表現されていた。
◆「中学校入学から将来に向けて」(自立活動・高学年) ・義務教育、高校進学、職業について内容や仕組み、道筋、費用などを調べ、考えを発表する。	○将来への見通しをもち、目的をもって進学をしたいことや周囲へ感謝する発言が見られた。今後の自分に対して主体的に考えることができた。
◆各教科の学習で使う話し方スキルの練習 「インタビューをしよう。」(国語)「マナー教室」(教科)日本語など ・尋ね方や答え方について話し合ったり、ホワイトボードに掲示したりして練習する。	○最初はどのように答えるべきか分からなかった児童も、自分のことを伝えることができたようになった。 ◇生活場面で活用できるスキルも多い。場面を設定して活用させていきたい。

2. 「協働的な学びを通して、課題に取り組む姿」をめざした取り組み

工夫や手立て等	児童の姿や変容・成果 (○) や課題・改善策 (◇)
◆「先生すごろく」など ・自立活動のゲーム等ではルールに加え、準備・片付けの手順や時間を分かりやすく提示する。	○児童同士で声をかけ合い、協力して取り組んでいる。準備や片付けまで自分たちで動くことができるようになった。主体性を褒めていきたい。
◆「季節の制作(○月の壁飾り)を作ろう」 ・児童同士で協力して制作できるよう、写真入りの手順書や動画を準備する。 ・これまでの制作の経験を生かして児童同士で教え合うよう促す。	○手順書やタブレット端末を活用しながら友達と話し合い、色々と試す姿が見られた。言葉を発しない児童も制作を通して活躍の場をもつことができた。 ○すぐに教師に頼らずに、友達と協力し、課題を解決する自信がついてきた。
◆「困ったときはどうしたらいい？」(自立活動) ・「困ったとき」を紙に書いて出し合う。(いらいらした時、勉強をしたくない時、○○で緊張する時など) ・それを解決するための方法を話し合う。	○友達と共有したことでどんなときに困るのか客観的に捉えることができた。児童同士で悩みや課題を真剣に考え、アイデアを出し合う過程を通して、課題や困難に向き合う態度が育ちつつある。
◆「誕生会をしよう」(自立活動) ・役割を分担し、児童だけで会を進行する。 ・誕生日の児童のよさやがんばっていることを書いた誕生日カードを作成し、プレゼントする。	○決まったプログラムで経験を重ねることにより、見通しが立ち安心して活動できている。交流学級では主体的に動くことができない児童も自信をもって会を進行している。 ○互いに認め合い、自己肯定感の向上につながっている。
◆「ラジオ体操」(自立活動 動作模倣) ・カードを作り、交代でスタンプを押して称賛し合う場面を設定する。	○児童にとってはスタンプだけでも喜びにつながる。見学していた児童も体操に参加するようになった。運動会につなげていきたい。

《小中合同での取組》

(1) なかよし交流会について

① 会の目的

田代中学校校区の特別支援学級児童・生徒の交流を図るとともに、集団行動を通して集団への意識を深める」目的で、平成24年度から「田代中校区なかよし交流会」として、校区内の小中学校4校と中原特別支援学校（田代分校）で実施するものである。

② 会の運営など

主担当校は校区内の3小学校で順に担当をする。会場は、田代中学校とし会場設営を行っている。実施する2～3週間前には中学校で各学校の担当者が集まり、打合せを行う。

【令和6年度 なかよし交流会の会順】

- 1 はじめの言葉
- 2 校長先生・来賓のおなはし
- 3 自己紹介（各学校より）
- 4 レクリエーション（昨年度はドッジビー）
- 5 担当校の校長のあいさつ
- 6 おわりの言葉

③ 当日の流れ（司会は児童・生徒）

会の流れは、右のとおりである。なお、司会・進行は児童・生徒が行い、レクリエーションのグループは小中合同にするなど、異年齢での集団行動を主体として小中での交流を深めるようにしている。

④ 会の実際・その他

- ・レクリエーションのチームは5校で混合チームである。
- ・保護者も参加可能とすることで保護者同士の交流も行っている。
- ・事後、反省をもとに、次年度の活動につなげている。



保護者への案内文



児童による司会の様子



自己紹介の様子



レクリエーションの様子

(2) 学校説明会について

① 会の目的

田代中学校校区の特別支援学級6年生児童とその保護者を対象に、中学校進学への不安感軽減を目的として、保護者への学校説明と児童への学校見学（学習環境と学習の様子）を実施している。

② 会の運営など

主担当校、会場は田代中学校とし、おもに会場設営を行う。学校見学では、支援学級棟の教室環境や授業の様子の見学を教師引率のもと実施している。同時刻に体育館で保護者向けの学校説明を行っている。

田代中学校の生活



生活、校時(時間)、教室、行事などを知ろう！

令和6年度 説明会の画面

③ 当日の流れ（下図を参照）

【令和6年度 説明会の会順】	
1	開 会
2	中学校の特別支援学級の方針（学校長）
3	特別支援学級の紹介（コーディネーター）
	・中学校の生活
	・特別支援学級での授業
	・テストの受験 等
4	質疑応答
5	閉会
6	特別支援学級の見学

④ その他

- ・会の参加は、希望とする。
- ・実施期日は、例年、9月上旬に実施している。
- ・実施時間は、およそ1時間程度で行っている。

（3）「田代小中校区特別支援教育部会小中合同夏期研修会」

① 会の目的

田代小中学校の特別支援教育において、豊かな人間性と自立心を培い、生き抜く力をもった児童・生徒の育成をするために、田代中学校校区内の小中学校合同で、9年間を見通した特別支援教育について研修を深めるため小中合同夏期研修会を行った。なお、今年度は初めての取り組みとして、小中学校合同で、外部講師を招いての講演会を実施した。

② 実施の日時および場所

- ・令和7年8月26日（火）15:00～16:30
- ・鳥栖市立田代小学校 音楽室にて

③ 講演内容および協議内容

- ・演題
『9年間の義務教育の中で身につけてほしい力について』
- ・講師 学校法人星生学園
佐賀星生学園 教頭 安部 和也 様
- ・協議『小中連携発表に向けた特別支援教育の研究に』について（現状の報告等）



④ 合同研修会を受けて

まず、各校の「協働的な学びを通して、課題に取り組む姿」「自分の考えをもち、自分の言葉で説明する姿」の取り組み状況の報告を聞いた。その後、それらの力を高めるヒントとして、解決志向の関係作りを実践されている星生学園の取り組みを教頭先生から得ることができた。

田代小中合同・学校間連携（表1）	
・小中学校間で、小中学校連携を推進するための具体的な取り組みを実施し、協議を深めること。	
小学校	中学校
言語 文章について感想や意見をもとに文章のよさを見つける問題	必要な情報を資料から引用し、根拠を明確にした文章を書く問題
算数 割合に関する問題	軌道を立てて考え、事柄が結び立つ場面を説明する問題
理科 自然や自然の事象から材料を得た結果を整理し、自分の考えを記述する問題	授業で身に付けた知識を日常生活や社会の中でおける問題を解決につけて考える問題

③成果と課題

【成果】

- ・教師が話し方のモデルを示したことで、より内容に興味をもって聞くことができ、伝え合う楽しさを感じながらコミュニケーションを図るなど、人間関係にも好影響を与えていた。
- ・友達と課題を共有することで、場面を客観的に捉えることができた。互いに課題や悩みについて真剣に考えたり、アイデアを出し合ったりする過程を通して課題や困難に向き合う態度の育成につなげることができた。
- ・ロイロノートを活用し、書くことや関連したものを考えることが苦手な児童への支援とした。リアルタイムで友達と考えを共有することができるため、自然と協力し合いながら活動することができていた。(ICT利活用による個別最適な支援)
- ・普段は大人しい生徒が、自ら進んで朗読するなど「自分の考えを言葉で説明する姿」に近づいていく様子が見られた。ペアでのコミュニケーション活動では、互いにアサーティブな表現で伝え合おうとする姿が見られるようになった。

【課題や改善策】

- ・支援学級では発表できるが、交流学級では固まったり、小さな声になったりする。発表する場面を増やしたり、ロールプレイを取り入れたりするなど継続して取り組むことで発表への自信をもたせていく。
- ・障がいの有無に関わらず、全ての児童生徒が互いの良さや多様性を認め合い、一緒に学習できる環境づくりを目指していく。
- ・実践的なコミュニケーションスキルにつなげるために、より多くのパーソナリティと共に活動する場面を設けるなどの工夫をしていく。

(4) 教科「日本語」部会

①部会の目指すところ

ア 縦と横のつながりを意識した教科「日本語」の取組

- ・単元のゴールとして小中連携を活用する
- ・相手意識、目的意識の明確化や高まりをねらう
- ・完成した作品を紹介し合うことで、ゴールの具体的なイメージをもつことをねらう

イ 教科「日本語」の授業改善

- ・主体的で対話的で深い学びの実現に向けた授業実践
- ・問いをもとにした授業実践
- ・ゲストティーチャーを効果的に活用した授業実践

②実践内容

※各学校の実践を次項に紹介

③成果と課題

【成果】

- ・単元のゴールとして、作品を他の小学校に紹介することを示したことで、目的意識が高まり、意欲的な取組につながった。
- ・子どもが自分の問いを立てることで主体性が育ち、意欲的に活動する姿が見られた。
- ・「問い」をもとにした活動が、自分の考えをもって説明する力の定着や、協働的な学びにつながった。
- ・各学校の工夫した実践により、楽しく取り組む児童の姿が多く見られ、感想にも「楽しかった」という声が多くあった。
- ・ゲストティーチャーの影響・効果は大きく、子どもたちの関心や興味を高め、専門的な知識や技術の習得に役立った。
- ・授業準備や環境設定が整い、児童が見通しをもって学習に取り組むことができた。
- ・体験活動やロールプレイを通して、歴史や文化、マナーに触れ、実際に挑戦する経験を積むことができた。

【課題や改善策】

- ・単元のゴールとして小中連携を活用する意義は高いが、現状では限られた取組にとどまっている。教科「日本語」部会の職員だけでなく、全職員がその意識をもつことが求められる。
- ・「問い」をもとにした授業改善は現在進行形である。今後も様々な実践を重ねながら質の高い授業を目指すため、同じ問いをもつ児童を集めて協働的に探究させるなどの工夫が必要である。
- ・活動の見通しのもたせ方、例えばワークシートや資料の提示・配布のタイミング、説明の具体性などを改善することで、見通しを高められると考える。それにより、児童生徒が主体的に学びに向かうことができると考える。
- ・授業での学びを生活や継続的な学習に結びつける仕掛け（掲示物による振り返り、文化やマナーの定着）が十分ではない。今後、実生活への接続を意識した指導の工夫が求められる。

【田代中学校 1年生の取組】

①指導案

佐賀県が誇る有田焼を通して、焼物の歴史や制作過程、関連する芸術などを学び、制作に携わる人々の思いを感じ取る。また、それを踏まえて、実際に手びねり体験を行い、ものづくりの楽しさや難しさを味わいながら、ものを大切にしようとする心を育てる。

1 単元名 三 佐賀の焼物は私たちの自慢

2 単元の目標 及び 評価規準

(1) 単元の目標

焼物の世界に触れ、焼物の歴史や焼物に対する人々の思いを知る。また、実際に手びねり体験をし、ものづくりの楽しさや難しさを味わう。

(2) 単元の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
○焼物について基本的な知識を習得している。 ○手びねり体験において、手順を理解し、制作することができる。	○焼物について学びながら、その当時の人々の思いを想像することができる。 ○手びねり体験において、自分なりの思いを込め、工夫して制作することができる。	○焼物の学習において、課題に着実に取り組む。 ○手びねり体験において、ものづくりの楽しさや難しさを味わいながら完成まで粘り強く制作に取り組むことができる。

3 単元の授業過程（全4時間＋α）

学習活動	時間	教師の指導・支援	評価とその方法
1 焼物について知ろう。 ・佐賀の焼物について知る。 ・次時の焼物体験に向けて、制作の構想を練る。	2時間	・佐賀の焼物について、電子黒板とワークシートで分かりやすく説明する。 ・次時の手びねり体験について流れを説明し、制作するものについて構想を練らせる。	・焼物についての基本的事項を理解し、ワークシートの記入を行っている。【知識・技能】 ・ワークシートの記述や発言より、当時の人々の思いを想像することができる。【思考・判断・表現】
2 焼物づくりを体験しよう。（手びねり体験） ・ゲストティーチャーの指導を受け、焼物制作を行う。 ・ものづくりの楽しさや難しさを味わう。	2時間 (本時)	・ゲストティーチャーの説明を聞きながら机間支援を行う。 ・事前に考えてきた作品の構想で実際に制作可能かを考えさせながら制作に取り組ませる。 ・制作過程において、友だちに助言を求めたり、ゲストティーチャーに聞いたりしながら活動を進めさせる。	・自分なりの思いを込め、工夫して制作することができる。【思考・判断・表現】 ・ものづくりの楽しさや難しさを味わいながら完成まで粘り強く制作に取り組んでいる。 【主体的に学習に取り組む態度】

3 鑑賞会をしよう。 ・文化発表会で展示し、互いを評価し合う。	文化 発 表 会	・互いの作品の良さに気づきながら鑑賞できるよう、「鑑賞時の注意」を生徒に作らせる。	・自分と他の人の作品の良さを言葉できちんと記述できている。(ワークシート)【思考・判断・表現】
------------------------------------	----------------	---	---

4 本時の授業

(1) 本時の指導目標

- ① ゲストティーチャーの指導を受けたり友だちに助言を求めたりしながら、思いを込めた作品を制作させる。
- ② ものづくりの楽しさや難しさを感じさせながら完成まで粘り強く取り組ませる。

(2) 本時の評価基準。

- ① ゲストティーチャーの指導を受けたり友だちに助言を求めたりしながら、思いを込めた作品を制作することができる。
- ② ものづくりの楽しさや難しさを感じながら完成まで粘り強く取り組むことができる。

(3) 本時の授業過程 (2/4時間)

過程	学習活動	形態	教師の指導・支援と評価（◆）
導入	1 係がゲストティーチャーの紹介を行う。 2 本時の学習活動を確認する。 3 ゲストティーチャーの説明を聞く。	斉 斉 斉	・ゲストティーチャー紹介の支援を行う。 ・スライドで提示し、学習の見通しをもたせる。 ・手びねり体験の手順が理解できるように、ゲストティーチャーの説明を支援する。
	めあて：自分の思いを込めた焼物を制作しよう。		
展開	4 作品の構想を練り、制作の準備をする。 5 作品の制作を行う。	個 個	・事前に考えた作品の構想が、実際に制作可能かを考えさせながら制作に取り組ませる。 ・生徒に粘土を配付する。 ・制作過程において、友だちに助言を求めたり、ゲストティーチャーに聞いたりしながら活動を進めるよう促す。
	手順 ①カップの底を作る ・厚さ（5mm）や大きさに注意する。 ②側面を作る ・指一本分程度のひもを作る ・ひもを重ね、指でつなぎ目をなくす。 ③竹串などで模様を入れる。 ④作品の色を決める。 ⑤完成したカップの裏に組・色の記号・名前を竹串で書く。		◆思いのこもった作品にするために、ものづくりの楽しさや難しさを味わいながら、友達やゲストティーチャーに助言を求め、完成まで粘り強く制作に取り組んでいる。（態度・振り返り）【主体的に学習に取り組む態度】

展	・友達やゲストティーチャーに助言を求め、心を込めて制作する。	個	・最後まで落ち着いて制作できる雰囲気をつくる。
開	6 写真を撮り、保管場所にもって行く。 7 後片付けを行う。	個	・片付けの際、制作途中の生徒の作品に当たらないよう、導線を示す。
終末	8 ワークシートに振り返りを記入する。 9 ゲストティーチャーにお礼の言葉を述べる。 10 次時の活動を聞く。	個 斉	・鑑賞会に生かすために、工夫したことなどを書かせる。 ・鑑賞会に向けての次回の活動内容を伝える。

②研究会での協議内容

成果

(生徒の感想より)

・まっすぐ積みなくて、どんどん広がってしまったけど、先生がきれいになおしてくれてすごいと思った。

・難しかったけど、思った通りのペン立てができて嬉しかったです。

・楽しかったです。このあとにもたくさんやることがあって、できあがると聞いて驚きました。どうなるのか楽しみです。

生徒は焼物の世界の一端に触れ、焼物の歴史や焼物に対する人々の思いを想像することができた。また、実際に手びねり体験を通して、制作の楽しさや難しさを味わっていたことが感想からも分かる。

課題

楽しく体験活動をすることができたものの、実生活の中で焼物に目を向けることができるようになったかは疑問が残る。文化発表会に向けての活動や、今後の教科「日本語」の学習などを通して、さらに興味や関心を高める機会を増やしていきたい。

【田代中学校 2年生の取組】

①指導案

電話は、相手に対して用件等を伝える手段として大変便利な道具である。しかし、電話はお互いの顔が見えないため、適切な言葉や話し方をしなければ、相手に対して不快な印象を与えてしまう可能性も大いにある。

そこで、本単元において電話の適切なかけ方、受け方を身につけさせることを目的とする。また、職場体験学習に向けて、ロールプレイを通じて電話のかけ方を実践的に学ぶことができるように工夫する。

1 単元名

「礼儀作法 電話の便利さと気くばり」

2 単元の目標及び評価規準

(1) 単元の目標

- ・電話におけるコミュニケーションの特徴と注意点を理解することができる。
- ・場面や状況に応じて、柔軟に電話によるコミュニケーションを行うことができる。

(2) 単元の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
・電話のマナーに関する知識を身につけている。	・場合に応じた電話の対応ができている。	・電話におけるコミュニケーションについて、主体的に取り組もうとしている。

3 単元の授業過程（全2時間）

学習活動	時間	教師の指導・支援	評価とその方法
1. 様々な電話対応場面のシミュレーションを通して、電話をかけるとき、受けるときのマナーを考える。	1 (本時)	日常生活の様々な場面における電話のシミュレーションを通して、電話のマナーについて生徒自身が体験的に気づくことができるように指導する。	シミュレーションに積極的に参加し、他の生徒に対して意見を述べている。(観察)
2. ロールプレイを通して、職場体験時の電話対応の仕方について学ぶ。	1	ロールプレイの仕方を実演し、職場体験学習において電話をかける場面で、様々な状況を想定して対応できるように練習させる。	ロールプレイに積極的に参加し、他の生徒に対して意見を述べている。(観察)

4 本時の授業

(1) 本時の指導目標

身近な場面を想定した電話対応のシミュレーションを行うことを通じて、電話対応の際に気を付けるべきマナーについて考えさせる。

(2) 本時の評価基準

電話対応時のシミュレーションを通して、電話のマナーについて考察し、自分の言葉で表現することができる。

(3) 本時の授業過程 (1 / 2 時間)

過程	学習活動	形態	教師の指導・支援		評価とその方法
導入	1 電話利用に関するアンケート結果を確認する。	全体	○T 1 アンケート結果を生徒に提示する。	○T 2	
	2 本時のめあてを確認する	個人			
めあて：電話のシミュレーションを通して、「電話上手の条件」を考えよう。					
展開	3 生活の中で起こり得る様々な場面での電話対応について、自分ならどう対応するかを考える。 場面① 部活動の欠席連絡。 場面② 飲食店への電話注文 場面③ 修学旅行のお土産を電車に忘れた。 場面④ 間違い電話をかけてしまった。	全体 個人	パワーポイントのスライドで複数の電話対応の場面を示す。 示した場面について、教師が電話の相手役を務め、生徒を数名指名して電話対応のシミュレーションを行う。 (一つの場面につき、二人程度の生徒に行わせる。)	T 1 と分担して電話の相手役を務める。	シミュレーションに積極的に参加し、他の生徒に対して意見を述べている。(観察)
	4 他の生徒の電話対応について、良かった部分や改善点について、意見を発表する。 5 シミュレーションを踏まえて、ワークシートにグループで「電話上手の条件」を考えて記入し、クラスで発表する。	全体 グループ	シミュレーション後、生徒の良かったところや改善点をクラス全体で考えさせ、意見を出させる。 グループ毎に出た意見を発表させる。	良かったところ・改善点として生徒から出た意見を、黒板に板書で残す。 出た意見を板書にまとめる。	
終末	6 パワーポイントのスライドを見ながら、授業の内容を振り返る。 本時の授業の振り返りを書く。	全体 個人	スライドを見せながら、電話をする時、受ける時の一般的なマナーについて説明する。	振り返りを書けていない生徒に対して支援を行う。	

(3) 本時の授業過程 (2/2 時間)

過程	学習活動	形態	教師の指導・支援		評価とその方法
導入	1 前時の学習内容を復習する。	全体	○T 1 前時に使ったパワーポイントのスライドを示しながら復習させる	○T 2	
	2 本時のめあてを確認する		めあて：場面や状況に応じた電話対応の名人になろう！		
展開	3 教師の電話対応のロールプレイを見る。	全体	生徒役と職場の担当者役に分かれ、ロールプレイの見本を見せる。事前にT 2と役割分担を話し合っておく。 良い例と悪い例を両方見せ、違いを考えさせ、発表させる。	T 1と分担してロールプレイを行う。	良い例と悪い例の違いについて、意見を述べている。(発表)
	4 電話対応例のプリントと、教師のロールプレイを参考にしながら、グループで生徒役と職場の担当者役、観察役に分かれ、交代でロールプレイを行う。	グループ	観察役の生徒に対しては、ロールプレイを見ての気づきやアドバイスをを行うように指示をしておく。 グループを巡回しながら、適宜指導を行う。	T 1と分担して机間指導を行う。生徒の対応で気になる点があれば適宜指導を行う。	ロールプレイに積極的に参加し、他の生徒に対して意見を述べている。(観察)
終末	5 ロールプレイをしてみてものふり返りを、ワークシートに記入する。	個人	ロールプレイをする中で、気付いたことや、気を付けた方が良かったこと、上手くできたことなど、自由に記述させる。	ふり返りが書けていない生徒に対して声をかけ、サポートする。	

②研究会での協議内容

成果

電話のマナーを事前に学習し、ロールプレイを行いことで、緊張しながらも各事業所に電話をかけることができた。また、携帯電話を各自持つ現代において、電話をかけるときの「時」や「言葉遣い」を学習するよい機会となった。

課題

事業所ごとに電話をかけたため、実践した生徒に限られていた。社会の中では必要なマナーであるが、授業の中で学んだことが実生活の中で生かされているかは疑問である。

【田代小学校 4年生の取組】

①指導案

- 1 単元名 佐賀県のあまいものを見つけよう（伝統文化）
- 2 単元の目標と評価規準

鳥栖市や佐賀県の食べ物を調べることを通して、長崎街道に興味をもち、郷土のよさに触れ、親しむことができる。

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
○長崎街道ができた背景について調べ、理解する。 ○長崎街道とお菓子誕生の地が重なっていることの理由や、長崎街道の別名を自分の言葉で伝えている。	○地元のお菓子や長崎街道について、調べたり考えたりしている。 ○当時の砂糖の価値を知り、長崎街道との関係や「シュガーロード」と呼ばれる理由を考えている。	○自分の考えと友達の意見をふまえ、長崎街道が地域発展のために大切な役割を果たしていたことや、地元のお菓子が今でも長く愛されていることについて考え、伝統文化に慣れ親しんでいる。

3 単元について

（１）単元観

長崎街道は、別名「シュガーロード」と言われている。江戸時代、長崎は異国文化を取り入れる情報の拠点地として発展してきた。そこに砂糖が伝わってきたことで、砂糖を使ったお菓子「カステラ」が作られ、庶民に愛される食べ物として今でも親しまれている。

本単元において、児童には学習したことのない歴史も含まれるが、長崎街道と砂糖を使ったお菓子との関連を調べ、学習で深めることは、我が国の伝統文化に親しみ、郷土を愛する態度を育てるのに有効であると考えた。

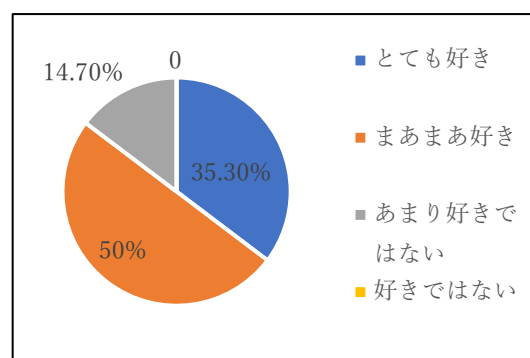
（２）児童観

本学級の児童は元気で明るく、進んで手を挙げて発表する児童が多い。また、日本語の授業においては今までに早口言葉や詩、ことわざと慣用句、俳句と川柳、論語に取り組んできた。これらの単元の学習活動として、俳句の学習では季語から季節を考えるクイズを作ったり、ことわざと慣用句の学習ではグループで調べたことわざや慣用句から例文や四コママンガを考えたり、論語の学習では暗唱をしたり、楽しみながら取り組んできた。このような活動をふまえ、日本語に対する児童の意欲・関心を知るためのアンケートを行った。

Q. 日本語のじゅぎょうは好きですか？

85%程度の児童が「とても好き」「まあまあ好き」と回答していた。また、「好きではない」と回答した児童はいなかった。

「とても好き」「まあまあ好き」と回答した理由の多くに「ことわざと慣用句を調べて書くのが楽しいから」「歴史が入っていて面白いから」



「一人で考えることもあれば友達と考えられることもあるし、昔のことが知れるから」などの回答があった。このことから、調べる活動や歴史・昔のことについて知る活動、グループで取り組む活動を楽しんで取り組んでいることが分かる。そのため、今回の学習ではこれらの活動を多く取り入れた学習を進めていく。

(3) 指導観

本単元においては、長崎街道や砂糖を使ったお菓子など児童がほとんど知らない内容の学習である。そこで、児童が今までに学習してきた内容を想起させながら学習に取り組ませる。

1時目では外国との交流方法について、社会科で学習している47都道府県の地形の特徴から考えさせる。2時目では地元の菓子店について、2年生の生活科や3年生の社会科で学習した町探検・町の様子を思い出させて考えさせるようにする。

本単元で取り上げられている長崎街道やシュガーロードは、江戸時代の鎖国政策やオランダと長崎・出島の交流、唐人屋敷を通じた中国との貿易が背景にある。これらの学習は6年生の歴史の学習や中学校での学習につながる。そのため、時代背景も交えながら郷土のよさに触れられるように指導をしていく。

4 単元計画 (全3時間)

時	学習活動	指導および手立て	評価の観点
1	○九州地方における江戸時代の海外との交流や貿易のあり方について考えさせ、長崎街道について知る。	○土地の特徴や時代背景から海外と交流方法について考えさせ、長崎街道ができた背景について理解させる。 ○県内各所に配置されていた宿場を結んでいくと長崎街道の道筋ができていくことに気付かせる。	○長崎街道ができた背景について調べ、理解することができる。 【知識・技能】
2	○前時の授業をふまえ、佐賀県やその周辺の長崎県・福岡県のお菓子について調べる。	○長崎街道の宿場が田代小学校の校庭にもあったことを知らせ、既習事項をもとに地域に昔からある店について想起させる。 ○地域の店の中でも地元で誕生した菓子店に焦点を合わせ、佐賀県内だけでなく周辺の長崎県・福岡県で誕生したお菓子についてもインターネット等を使って調べさせる。	○地元のお菓子や長崎街道について、調べたり考えたりすることができる。 【思考・判断・表現】

3 (本時)	○前時で調べたお菓子の生まれた土地を地図上でつなげていくと、長崎街道と重なることに気付く。 ○お菓子が誕生した道として長崎街道とは別にオリジナルで名前を付けるとしたら何にするか考え、発表する。 ○長崎街道はシュガーロードとも呼ばれていたことと当時の砂糖の価値について知り、その理由などについて考える。	○前時に調べたお菓子をシールにし、そのお菓子が生まれた土地に地図上で貼らせ、長崎街道と重なっていることに気付かせる。 ○それぞれのお菓子に共通する特徴や時代背景をもとに考えさせ、画用紙を使って自由に表現させる。 ○当時砂糖の伝来が日本の文明に大きな影響をもたらしたことや、今でも長く愛され続け日本遺産に認定されたことについて伝え、郷土のよさを考えさせる。	○地元のお菓子誕生の地と長崎街道との関係性について考え、長崎街道とは別に、自分なりに名前を付けることができる。 【思考・判断・表現】 ○長崎街道が地域発展のために大切な役割を果たしていたことや、今まで長い間愛されてきたことなどをふり返り、郷土のよさに気付く、伝統文化に慣れ親しむことができる。 【主体的に学習に取り組む態度】
-----------	---	--	--

5 本時について (3/3)

(1) 目標

長崎街道が日本の砂糖文化に大きな影響を与えたことや、シュガーロードが現在まで長く愛され続けていることについて考えることで郷土のよさに触れ、伝統文化を大切にする心をもつ。

(2) 本時の評価基準

地元のお菓子誕生の地と長崎街道との関係性について考え、長崎街道とは別に、自分なりに名前を付けることができる。【思考・判断・表現】

長崎街道が地域発展のために大切な役割を果たしていたことや、地元のお菓子が今でも長く愛されていることについて考え、伝統文化に慣れ親しんでいる。【主体的に学習に取り組む態度】

(3) 展開

過程	学習活動	指導上の留意点 (○) 評価 (◆)
つかむ	1. 前時の振り返りをする。	○佐賀県・長崎県・福岡県のお菓子について調べたことを、ペアで交流させたりスライドで紹介したりすることで思い出させ、全体で数名に発表させる。その際、出てきたお菓子の写真を黒板に提示し、視覚的に分かりやすくする。

考 え る	2. めあてを知り、本時の学習の流れを確認する。	○お菓子が生まれた土地と長崎街道が関係していることに気付かせるため、めあて提示の時点では空欄にしておく。
	地元のおかし たんじょうの地と（長崎街道）の関係を考えよう。	
	【活動①】 3. 白地図と透明シート、お菓子のシールを使ってそのお菓子が生まれた場所に貼っていき、長崎街道と重なっていることに気付く。	○お菓子のシールには誕生した地名を明記しておき、地図の地名を探しながら楽しんで取り組めるようにする。 ○グループで活動させ、協力して考えることができるようにする。 ○めあての空欄の文字数や、1時目で学習した長崎街道のワークシートと照らし合わせることで、昔からある地元のお菓子が生まれた場所は長崎街道と重なっていることに気付かせる。
	【活動②】 4. グループでお菓子が生まれた場所と長崎街道の地図を重ねて気付いたことを話し合わせ、個人で長崎街道の別名を考え、発表する。	○長崎街道の地図を広用紙に重ねたものを配り、気付いたことを各グループで話し合わせたり書き込ませることで、オリジナルの名前をつけるためのイメージをもたせる。 ○長崎街道は国内外のさまざまな人やものが往来する街道という名前の由来を伝えることで、「お菓子」ということにのみ焦点をあてるとどのような名前になるのか考えやすくさせる。
◆地元のお菓子が誕生した地と長崎街道が重なっていることをもとに、長崎街道の別名を考えている。【思考・判断・表現】 A：地元のお菓子と長崎街道の関係や、材料となる砂糖が海外から輸入されたものであることを根拠に、長崎街道の別名を考えている。 B：地元のお菓子が誕生したところが長崎街道と重なっていることに気づき、長崎街道の別名を考えている。 C：オリジナルの名前が思い浮かばない児童には、グループの広用紙を参考に考えるように助言する。		

まとめる	5. 長崎街道の別名が「シュガーロード」であることを知り、当時の砂糖の価値について考え、シュガーロードについての理解と関心を深める。	○発表した名前に共通するものは何か問いかけたり、地元で生まれたお菓子に共通している材料は何か考えさせたりすることで、児童から「砂糖」というワードを出させる。 ○「シュガーロード」と呼ばれるようになった歴史的背景として、当時の砂糖の価値や砂糖がもたらした影響力について説明する。
振り返る	6. 本時の振り返りをする。 ふり返りのポイント ・すごいと思ったこと ・友達の意見を聞いて考えたこと ・だれかに伝えたいとおもったこと ・これから知りたいと思ったこと	○身近にある地元のお菓子は、長崎街道を通じて海外との交流の中で生まれたものである歴史的背景について意外だったことやすごいと思ったこと、これから知りたいことなど、視点を与えて学習を振り返らせる。
		◆長崎街道が地域発展のために大切な役割を果たしていたことや、今まで長い間愛されてきたことなどをふり返っている。 【主体的に学習に取り組む態度】 A：地元で長く愛されているお菓子は、海外との文化交流としての役割を担ってきた長崎街道との関係があることや、地元には歴史ある宿場や建物がたくさんあったことをふまえ、これからも大切にしていこうと考えている。 B：長崎街道の別名がシュガーロードであることをふまえ、地元のお菓子や建物には長い歴史があったことに気付く。 C：今でも長く伝わっているお菓子は、海外との交流がなければ誕生していなかったことを伝える。

②研究会での話題

自評

- ・歴史がらみの授業の組み立て方が難しかった。
- ・グループでの活動で良かった。役割分担ができていたりしてよかった。
- ・児童の感想も「楽しかった。」が多く聞かれた。
- ・「大村寿司」の説明が時間内にできなかった。帰りの会での説明補足をした。
- ・ワークシートを最初に配っておけば、もっと見通しがもてたのでは？
- ・グループでの意見を書くところの説明をもう少し具体的にした方が良かった。

意見・感想

- ・シールの枠を書いておけば、ワークシートでの作業がスムーズになってよかったのではないかな。
- ・シートで作業してその後、地図に重ねるというアイデア良かった。地図なので上下の印をいれておけばよかった。逆さまになっていたところがあった。
- ・教具の工夫がすごかった。
- ・評価：A 評価にある海外から砂糖がきたことにふれるとあるが。事前の授業の中でふれていたのか。

→事前の授業で学んだことを掲示しておけば子供自身が掲示物を見ながら振り返りができて良かったのではないかな。

- ・求める子どもの姿は？

→4年生だけでなく、今後の学びの中で今日の授業のことを思い出してくれればと思い設定した。

- ・子どものなぜ？（問い）をゴールにしていく授業展開がとても良かった。
- ・2年生の生活科で田代の事を学んでいるのでそこから掘り起こす。〈2時目に想記させていた〉
- ・単元の構成に感心した。その単元だけで終わらず、先のことも系統立ててカリキュラムを組めば素晴らしい学習になる。
- ・準備がすばらしい。他にもどんなものがあるか？今後も問いかけていってほしい。
- ・自分の「問い」が今後の子どもの学習に生きていくと良い。
- ・めあての出し方：今日の学びの見通しを最初の5分～10分以内にしたいほうが

→最初から書いておくと児童が気付いてしまうので、後になった。児童の発言を拾ってめあてにすればよかった。街道という言葉を使わずに、「地元のおかしのひみつをさがろう！」にしておけば。秘密＝長崎街道と重なる、に気付くのでは？

- ・めあてにつながる振り返りを考える。
- ・〇〇街道のネーミングは、おもしろかった。「和」にちゃんとつながっていた。3人のネーミングの共通点を児童に発言させればさらに良かった（時間があれば）
- ・ネーミング：シュガーロードって誰かがつけたんだろうけど、みんなだったらどうつける？とふれば一生懸命に考えようとしたかも。
- ・シール貼り：最初にお菓子を県ごとに割り振っておけばすぐに終わっただろう。
- ・付箋に思ったことを書いて後で意見交流すれば良い。個人→グループ→全体：協働的な学習になる。

【若葉小学校 5年生の取組】

①指導案

【本授業の主張】落語を実際に見て感じた面白さや疑問から自分の問いを立てる児童の姿を目指します。自分の問いを立てる際には、クラス全員の問いが可視化できるようにスプレッドシートを活用します。

1 単元名 落語を楽しもう（伝統文化）

2 単元の目標と評価規準

◎単元の目標

落語の作品にふれ、落語について自分なりの方法で表現する活動を通して言葉の面白さや落語の良さに親しむことができる。

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
○見ている相手に伝わるように演技手のポイントを意識しながら演じることができる。 ○落語に関係する事について調べ、理解することができる。	○前時のふり返りをもとに自分の問いを立てることができる。 ○落語について自分なりの方法で表現することができる。	○「落語博覧会」を通して自分が立てた問いの解決に向けて、粘り強く取り組むことができる。 ○友達作品や発表を見ることができ、落語について慣れ親しむことができる。

3 単元計画（全5時間）

時	学習活動	指導および手立て	評価の観点
1	○実際に落語を見て、落語について知る。	○ゲストティーチャーを招き、実際の落語に触れさせる。	○落語の世界に触れ、落語に興味を持つことができる。【主体的に取り組む態度】
2 3 4	○前時の授業をふり返り本単元の見通しをもつ。 ○前時のふり返りをもとに自分の問いを立てる。 ○自分の問いが解決できるように落語を演じたり落語を調べたりする。 ○次時にやってみたいことを考える。	○前時の落語で出てきた疑問や面白さなどをふり返らせることで自分の問いにつなげる。 ○自分の問い（やってみたいこと）を考えやすくするためにタブレット端末を活用させる。 ○児童が自分の問いを解決できるようにするために友達と協働したり、ゲストティーチャーに聞いたりしながら活動を進めさせる。 ○次時の活動が円滑に進むよう次時の時間で取り組みたいことを考えタブレット端末に記入する時間を設定する。	○前時のふり返りをもとに自分の問いを立てることができる。【思考・判断・表現】 ○問いの解決に向けて粘り強く活動に取り組むことができる。 【主体的に取り組む態度】 ○見ている相手に伝わるように演技手のポイントを意識しながら演じることができる。 ○落語に関係する事について調べ、理解することができる。【知識・技能】
5	○落語博覧会を開催する。	○児童が立てたどの問いも解決できるように、授業の前半では展示会を、後半では発表会を実施する。 ○友達の作品や発表を見た後に感想を交流することで達成感を味わわせたり新たな意欲につなげさせたりする。	○「落語博覧会」を通して自分が立てた問いと活動の成果を表現することができる。 ○友達の作品や発表を見ることができ、落語について慣れ親しむことができる。 【主体的に取り組む態度】

4 本時の指導（2／5）

（1）目標

落語の面白さや疑問点からこれからしてみたいことを伝え合う活動を通して、自分の問いを立てることができるようにする。【思考・判断・表現】

（2）展開

学習活動と児童の反応（ ）	教師の指導・支援等（○）と評価（◆）
1. 前時のふり返しをする。 （児童の反応） ・演じる役によって表情が違った。 ・本当にそばを食べているみたいだった。 ・声を使い分けていた。 ・金ちゃんの解答が面白かった。 2. 全体の見通しをもつ。 3. 自分の問い（やってみたいこと）を考える 自分の問い（やってみたいこと）を考えよう （児童の反応） ・落語を実際にしてみたい。 ・落語の歴史を調べたい。 ・道具を使って演じてみたい。 ・落語の他の話を知りたい。 ○どのようなことができそうか大まかな見通しをもてるようにするために、自分がしてみたいことを発表させたり近くの友達と交流させたりする。 ○自分の問い（やってみたいこと）を考えやすくするためにスプレッドシートをクラス全体で共有する。 ◆落語の面白さや疑問点を活用して自分の問いを立てている。 【思考・判断・表現】（スプレッドシート） →自分の問いを立てることができない児童は、友達の問いや例を参考にして自分の問いを立てさせる。	○落語の面白さや疑問点を思い出しやすいように、前時の動画を見せ、話し合う場を設定する。 ○児童に本単元の見通しをもたせるために黒板に簡単な単元計画を提示する。
4. 自分の問いの解決に向かって活動を進めて行く （児童の反応） ・次の時間は、そばの食べるシーンの練習をしよう。 ・声色を使い分けて演じてみよう。 ・おちを面白く言えるようになろう。 ・一人で何役も演じ分けてみよう。 ・せんすの使い方を練習してみたい。 ・同じ問いのままいこう。 5. 次時にやってみたいことを考える。	○児童の主体性を尊重するために個人の問いが似ている児童同士で協力して進めたり、個人でしたいことがあれば個人で進めたりしてもいいことを声かけする。 ○次の授業の見通しをもたせるために次時の授業でやってみたいことを考えさせる。次時にやりたいことが本時と同じ児童は、引き続き同じ問いでもよい。

②研究会での協議内容

- ・子ども自身が問いを立てるということが初めてだったが、問いを共有したことで自分の問いをもつことができた。
- ・自分の問い（やってみたいこと）をもったことで、色々な個性をもった児童がどの活動でも意欲的に学習に取り組むことができた。
＝「自分の問い」が「自分の考えをもち、自分の言葉で説明する姿」や「協働的な学びを通して、課題に取り組む姿」につながった。
- ・楽しもう、親しもう どのような姿をイメージしているのか、どんな基準なのか
→自分の問いに向かっている姿が見られていたらそれで OK。
「小咄つくっていいですか」「高座に座ってみたい」それって楽しんでいた証拠だと捉えている。
- ・せっかく問いを立てた後、「やってごらん」よりも、同じ問いを持つ子を集めてもよかったのでは？ →共有、モデル化も手立ての一つであるが、問いの解決方法はまず子供たちにゆだね、主体性を大切にしたい。
- ・子供たちが「やらされている感」がなく、みんなが楽しめる授業だった。
- ・準備、学びの環境がよかった。全体の流れを出したことで、見通しがもてていた。
- ・自由に行っているようで、教師の意図がはっきりしていた。

【弥生が丘小学校 1年生の取組】

①指導案

1 題材名 「ありがとうのしょくじ」(こころをこめて しょくじのあいさつをしよう)

2 題材の目標及び評価規準

・食事の挨拶には感謝の気持ちが込められていることを知り、食事の挨拶の大切さについて考えることができる。

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
・食事には、様々な人が関わっていることを理解しようとしている。	・給食の時間に気持ちを込めて「いただきます」「ごちそうさま」を言うことができる。	・学習したことを給食の時間に粘り強く続けようとしている。

3 題材と指導について

(1) 題材設定の理由

この題材は、教科「日本語」と学級活動(2)の領域で扱い、教科等横断的な視点で授業を組み立てる。

本題材名「ありがとうのしょくじ」には、「いただきます」「ごちそうさま」という挨拶に込められた感謝と赤・黄・緑の栄養素が私たちの体を作ってくれることへの感謝という二つの意味が込められている。授業では、食材を「食べるもの」としてだけでなく、「感謝の気持ちをもつ対象」「体を元気にしてくれる大切な存在」として捉えることができるようにする。

1年生は「いただきます」「ごちそうさま」の挨拶が形式的になっている。成長期の児童にとって、まずは「食」そのものを正しく知る、身近に感じる、感謝の気持ちをもつことが、食を大切にする態度の土台となると考える。

そこで本題材では、ロイロノートの音声機能を使って「ありがとう」の気持ちを言葉にする活動や、キャラクターを使って3つの栄養の大切さに気付く活動を通して、楽しく主体的に学べる工夫をする。そして、学級活動(2)の終末では、感謝の気持ちをもちながら今後給食を食べるときに意識することを意思決定し、食への気づきを深め、「知る」ことから「続ける」ことへとつなげていく学びを目指す。

(2) 児童観

本学級は、元気で明るい児童が多い。入学して4か月あまりで、給食の時間の準備・片付け、食事に慣れてきた。学級では、自分が食べることができる量を知り、残さず食べることなどの目標を決め、達成できた日にはシールを貼る取り組みをしてきた。クラスのほとんどの児童が給食に対し前向きである。

(3) 指導観

食事は、心と体の成長の源であるとともに、多くの人や命とつながっている。児童がそのことに気づき、「いただきます」「ごちそうさま」に感謝の心を込めたり、3つの栄養素を知り自分の体に合った食事を選んだりすることは、食育の基礎となる。本題材では、教

科「日本語」と学級活動（２）との連携を図りながら、日々の給食を題材に、感謝の気持ちと栄養の知識を学習することで、「ありがとうの気持ちをもって食べる」「自分の食べ方を振り返る」といった生活に根ざした態度を育てたい。また、ロイロノートの音声機能や操作活動を取り入れることで、学びを自分の言葉で表現し、考えを深める機会をつくる。

4 単元計画

	指導内容	指導及び手立て	評価の観点
本時	こころをこめて しょくじのあいさつをしよう (教科「日本語」)	・感謝の気持ちをもつことができるようにロイロノートを使って「ありがとう」の言葉を吹き込ませる。	・食事には、様々な方が関わっていることを理解しようとしている。 (知識・技能)
シ ョ ー ト	<u>ふりかえりカード</u>の取り組みをする。 ※本題材は学級活動（２）のエ食育の観点を踏まえた学校給食と望ましい食習慣の形成と教科横断的な視点で授業を構成している。学級活動（２）の中で、本時での学習も含め今後の目標を立てる。	・保護者にも学習内容を伝え、家庭と学校が連携できるようにする。	・給食の時間に気持ちを込めて「いただきます」「ごちそうさま」を言うことができる。 (思考・判断・表現) ・学習したことを食事の時間に粘り強く続けようとしている。 (主体的に取り組む態度)

5 展開

学習活動と児童の反応（  ）	教師の指導・支援等（○）と評価（◆）
1. いろいろな挨拶（おはようございます、ごめんなさい、ありがとうございます）をクイズで振り返る。 2. 食事の挨拶の言葉の意味を知り、クラス全体の問いをたてる。 「いただきます」→食べるとき 「ごちそうさま」→食べ終わった時 命をいただく→肉、魚、野菜等の食材 感謝の気持ち→作ってくれる 「ありがとう」をさがそう。 3. 給食ができるまでの動画を見て、どんな人が関わっているかを知る。	○Khoot!を使い楽しい雰囲気ですクイズに取り組むことができるようにする。 ○意味を伝える際には、絵カードを使い意味が分かるようにする。 「いただきます」…「いのちをいただく」という意味。 「ごちそうさま」…「ご馳走様」の「馳」「走」は、ともに走るという意味。昔は走りまわって獲物を捉え、お客様に食事を振舞っていたので、そのことへの感謝の気持ちが込められている。 手を合わせる（合掌する）…敬意や感謝の気持ちの表れ。 ○給食ができるまでの動画を途中で止めながら見せ、大変な状況の中、どんな人が作って下さっているかを黒板に分かるように示す。

4. ロイロノートの音声機能を使って感謝したいものを選び、ありがとうマークに「ありがとう」を吹き込む。 ・ 食材を作ってくれる人 ・ 食材 ・ 運んでくれる人 ・ 調理してくれる人 ・ 栄養教諭	○実際に使われているしゃもじ、ざるを見せながら、大きい道具を使って大変な中作って下さっていることに気づかせる。 ○給食の写真や、献立表から何が使われているかわかるようにする。 ○～してくれてありがとうだけではなく、どのように「ありがとう」かが伝わるようにする。
5. 「ありがとう」を見つけたものを全体で交流する。	○例文を示し、子ども達が取り組みやすいようにする。
6. 教師の話聞き、振り返りをする。	◆食事には、様々な方が関わっていることを理解している。(知識・技能) ○ありがとうを黒板に貼っていき、視覚的に分かるようにする。 ○直接伝えることができないからこそ、残飯をしないようにしたり、心を込めて食事の挨拶をしたりすることを気付かせる。

②研究会での話題

・ 児童は給食センターの動画や実際に使っている「ざる」や「しゃもじ」を見て、給食に関わる人・食材のことを知り、感謝の気持ちをもつことができた。自分が感謝を伝えたい人・ものを選択し、「～してくれてありがとう」と感謝の気持ちをこめてロイロノートに吹き込むことができた。

→動画や具体物、ロイロノートの音声を吹き込める活動が、自分の考えをもち、自分の言葉で表すことにつながった。

→ロイロノートの録音機能によって、声に出して自分の気持ちを表す、声を聴いて自分の気持ちを再確認することができた。

→録音した音声は編集し、次時の食育の学習に使った。栄養教諭に見てもらい学習に対する感想をもらった。

・ 教科「日本語」として、「いただきます」「ごちそうさま」をきちんと言える変容が見えるようにしたい。

・ 給食に焦点を当てていたのので、「家庭でも」ということを押さえると、食事に向かうのではないか。

→学校便り、学級通信で、学習した内容を保護者に発信した。

・ 心をこめて食事の挨拶をしようの「心をこめて」が、どのような姿を心をこめた姿とするのかが曖昧で難しかった。

【弥生が丘小学校 4年生の取組】

①指導案

1 題材名 日本らしさが表れる言葉を知ろう

2 単元の目標及び評価規準

(1) 単元の目標（この単元で身に付けさせたい資質・能力）

陰暦や二十四節気，天気を表す言葉などを知り，漢字の意味や言葉の由来などについて調べたり，自分で言葉を作ったりして日本らしさが表れている言葉に興味・関心をもち，いろいろな表現に親しむことができる。

(2) 単元の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
・日本らしさが表れる言葉について調べ，理解することができる。 ・いろいろな表現があることに気付くことができる。	・言葉の由来や漢字の意味などに着目し，題材に合う自分なりの言葉やかきたの読み札を作ることができる。 ・自分の問いをもつことができる。	・日本語らしさが表れる言葉についての関心を高め，進んで調べたり，友達と交流したりして，自分の問いを解決しようとしている。

3 単元と指導について

(1) 題材観

本題材では，日本古来の言葉（和語・大和言葉）の中でも，「陰暦」，「二十四節気」，「天気を表す言葉」を知ることを通して，日本らしさが表れている言葉について，興味・関心を高めていく。言葉を知ること・覚えることをねらいとするのではなく，色々な表現があることに興味・関心をもちたせることをねらいとする。

「陰暦」は，国語科の学習や学習予定表の表記において卯月～長月までの言葉に触れており，児童にとっては，日常遣いはしないが馴染みのある言葉である。「二十四節気」や「天気を表す言葉」は，陰暦よりも馴染みは少ないと考えられるが，春分や冬至，快晴や通り雨などの言葉は，日常で聞いたこともあるだろうと考えられる。これらの既知の言葉をきっかけにして他の言葉を知ることにつなげたり，魚編の漢字や国の名前を表す漢字など，他の日本古来の言葉に興味・関心をもちせたりすることができる題材である。

さらに，国語科・理科・社会科など，他教科と関連させながら，教科横断的な指導計画を立て，より効果的に興味・関心をもちさせることができる。

(2) 児童観

本学級の児童は，「なぜだろう？」「～～だからじゃないか」「――をやってみよう」と，問いや予想をもつことを，国語科や理科，社会科の学習など多くの活動を通して行っている。多くの児童が自分なりの問いをもつことができるようになってきたが，2割程度の児童は自分で問いをもつことが困難である。

児童はこれまでに，国語の授業において，陰暦で日付を書く活動が続けてきている。その中で，「皐月の一字目の漢字は初めて見た」「なぜ，雨が降る6月が水無月なのか？」など，素朴な感想や疑問を抱いている児童が複数いる。また，興味をもって自主的に調べた児童もいる。児童にとって，陰暦は他の日本古来の言葉より馴染みがあると考えられる。一方，国語科の学習で，季節や行事についてまとめる活動，理科の学習で，天気に関する活動をしてきているが，ノートや発言において，「二十四節気」や「天気を表す言葉」は1つも出てこなかった。これらに関しては，児童にとって本単元の学習を通して初めて目にする言葉がほとんどであると考えられる。

(3) 指導観

教科「日本語」だけでなく、国語科や理科など他教科の内容と横断的に関連した単元計画を立てることで、児童が日本古来の言葉に対する興味・関心を継続してもつことができるようにする。そのために、2時目では、国語科「春の楽しみ」、「夏の楽しみ」の学習で書いた春の行事を紹介する文章や夏の俳句、理科「季節の生き物」の学習で探した生き物の一覧を資料の一部として、それぞれの月の行事や生き物という視点からオリジナル陰暦を考える活動に繋げたい。また、単元の終末では、学習してきたことを使って日本古来の言葉かるたを作成し、雨の日などに遊ぶことで継続的に学習をふり返ったり、日本古来の言葉に触れたりすることができるようにする。

問いをもたせる活動の際には、児童の疑問や予想を全体で交流し板書に残してから問いを書かせることで、自分の問いをもつことが困難な児童も、友達の発言を借りて問いをもつことができるようにする。

調べ学習、創作活動においては、タブレット端末内の資料、関連図書、国語辞典、漢字辞典、教室周辺の掲示物を資料とし、「1人で」、「ペアで」、「グループで」、「教師と」と活動形態を児童自らが選択することができるようにすることで、個別最適な学習を目指す。事前に、それぞれの学習形態の良さを児童と共有しておく。児童の発達実態を見ると、インターネット上の情報を正しく使用することが難しいので、本単元の活動においては、インターネットで閲覧できるwebサイトや使用できる端末の台数を限定する。

本単元の学習後は、国語科や理科において季節の学習をする際に、ショートの間を使って本単元の学習を想起させ、児童の興味・関心を継続させるようにする。

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
「日本語」 教科			もう (一) 短歌・俳句に親し			日本らしさが表れ る言葉を知ろう		もう (二) 短歌・俳句に親し				
国語		春のたのしみ	俳句や川柳を読もう・楽しもう	夏のたのしみ			秋のたのしみ		冬のたのしみ			
理科	春の始まり		星や月	夏		夏の終わり			秋	冬の星		春の始まり

4 単元計画（全4時間）

時間	ねらい（学習活動に含む） ○主な学習活動 ●教師の指導・手立て	評価規準 ・指導に生かす評価、○記録に生かす評価 評価方法（ ）		
		知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
1	○陰暦について問いをもち、調べ学習で解決する。 ●児童の疑問から話題を広げ、問いをもたせる。調べ学習の環境を整える。	・問いの解決のための方法を選んで調べ、陰暦について理解することができる。 (発言・行動)	・自分の問いをもつことができる。 (発言・ワークシート)	・問いの解決に向けて粘り強く取り組むことができる。 (発言・行動)

2 (本時)	○オリジナル陰暦を作る。 ●児童と一緒に例となるものを作り、見通しをもたせる。様々な資料を用意する。オリジナル陰暦を田代小、若葉小の4年生に見せて、感想をもらうことを伝える。		○選んだ月から連想する生き物や行事、気候などに着目し、オリジナル陰暦を作ることができる。 (ワークシート)	・資料を駆使したり、友達と交流したりしながら、考えることができる。 (発言・行動)
3	○二十四節気や天気を表す言葉について問いをもち、調べ学習で解決する。 ●比較的多くの児童が知っている言葉を提示し、季節や関連する物事について広げていくことで、児童が問いをもちやすいようにする。	・二十四節気や天気を表す言葉についていろいろな表現があることに気付くことができる。 (発言・ワークシート)	・自分の問いをもつことができる。 (発言・ワークシート)	・問いの解決に向けて粘り強く取り組むことができる。 (発言・行動)
4	○日本古来の言葉かるたの読み札を作る。 ○単元のふり返しをする。 ●完成品の例を示し、見通しをもたせる。完成したかるたでミニゲームをし、いろいろな表現に親しませる。		○調べたり、友達の話の聞いたりしたことを使って、かるたの読み札の文章を書くことができる。 (ワークシート)	○いろいろな日本古来の言葉に親しむことができる。 (発言・ワークシート)

5 本時の展開 (2/4時)

(1) 本時の目標

○興味・関心のある月を選び、その月から連想する生き物や行事、気候などをもとに、オリジナル陰暦を作ることができる。【思考・判断・表現】

(2) 展開

過程	学習活動 (児童の反応)	教師の指導・支援等 (○) と評価 (◆)
つかむ	1 前時の活動をふり返し、教師の創作例を聞く。	○前時の活動で児童が調べたものをまとめ、板書・掲示しておく。
見通す	【予想される児童の反応】 卯の花のことはよく知らない。桜月の方が分かりやすい。	○卯月の由来である「卯の花」を例として挙げ、自分だったら「桜月」という名前にすることを伝える。
		○4月から連想するものが児童から出てきた場合は1つ取り上げて、全体で「○月」を考える。
	その月にぴったりのオリジナル陰暦を作ろう。	
考える	2 見通しをもつ。	○漢字で表記することを押さえる。 ○連想する際の視点として「生き物」「行事」「気候」「料理・食べ物」「星座」を示す。

深める	3 オリジナル陰暦を作る。 【活動形態】※児童が自分で選択する 【予想される児童の反応】 〈生き物〉 ・ 8月はセミが鳴くから「蟬月」にしよう。 〈行事〉 ・ 2月は豆まきをするから「豆月」だ。 〈気候〉 ・ 6月は雨が降るから「雨月」がいいな。 〈料理・食べ物〉 ・ 1月はおせちを食べるから「御節月」かな。 〈星座〉 ・ 7月は七夕があるから「天川月」にしよう。	○他教科で既習内容のものを含めて、視点に合う資料を用意しておく。 【資料】 ・ タブレット・関連図書 ・ 壁面掲示 ・ 辞典（国語・漢字） ○ウェビングマップで連想する物を広げ、色々な視点から複数の「○月」を作るように声掛けする。 ◆選んだ月から連想する生き物や行事，気候などをもとに，オリジナル陰暦を作ることができる。（ワークシート、発言） →：オリジナル陰暦を作ることができない児童には，視点を1つに絞らせ，資料を使って連想される物事を探させたり，教師と活動するようにしたりする。
	5 全体交流をする。 【交流の視点】 ・ すてきなところ・納得したところ ・ 新しい発見 ・ 自分と比べて ・ もっと知りたい	○お気に入りのオリジナル陰暦と，その表記にした理由を交流することを伝える。 ○友達と交流する際には，相手の考えを聞いた感想を伝えたり，質問したりすることを押さえる。
		○クイズ形式で発表させることで，聞き手の「月へのイメージ」を膨らませたり，漢字の意味への関心を高めたりする。 ○日本古来の言葉である陰暦とオリジナル陰暦を比べて感じたことや自分の考えと友達の考えを比べて感じたことを視点にしてふり返りを書かせる。 ○作った言葉は，田代小・若葉小の4年生に見てもらい，感想をもらうことを伝える。

②研究会での協議内容

- ・「日本語に親しむ」とは教科日本語で学習したことを、日常生活や学習で使っていきたいという気持ちを育むことだと考える。そのためにも、様々な授業の中で教科日本語に立ち戻ったり関連付けたりしてきた。
 - ・小中一貫とは、小学校と中学校の繋がりをイメージしやすいが、小学校同士の繋がりをもちたい。同じ中学校にあがったときに、こんな学習したよねと話し合うことで学習がより深まるのではないかと考える。
 - ・題材名の「日本らしさ」には、クリスマスやハロウィンも含まれていていいのか。
- 今回は良いこととした。クリスマスやハロウィン行事としては今の子どもたちに馴染んでいる。
- ・タブレット端末を2台に絞った意図は何か。
- インターネットを上手く活用できていない。しかし、教師がサイトを限定して閲覧する方法も手立てとしてあってよかった。
- ・作ったオリジナル陰暦はどのように田代小・若葉小に共有するのか。
- タブレット端末を使用し、送りあいたい。
- ・授業の1つの案として、クラスのオリジナル陰暦を作る方法もある。
 - ・場の設定が素晴らしい。タブレット型端末や本、辞典の準備がしっかりされている。

3 研究全体の成果と課題



3 研究全体の成果と課題

本校区では、「豊かな人間性と自立心を培い、生き抜く力をもった児童生徒の育成～小中9年間を通した取組～」を研究主題として掲げ、4校が共通理解のもとに小中一貫教育を推進してきた。

その中核には、教科「日本語」で重視される言葉を通した思考と表現の力を位置づけ、これを全教育活動に通じる共通の視点として取り組みを進めてきた。

また、学力向上・ICT部会、人間関係づくり部会、特別支援教育部会、教科「日本語」部会の4部会がそれぞれの専門性を生かして研究を深め、小中9年間を見通した一貫教育の推進を図ってきた。

以下に、田代中学校校区の研究目標（小中一貫教育に期待される効果）に基づき、成果と課題や改善策を整理する。

① 学力の向上

【成果】

- ・授業の導入時に「見通し」をもたせ、終末に「振り返り」を行う授業改善が定着し、児童生徒が学習の目的を意識しながら課題を追究する姿が見られるようになった。
- ・ロイロノート等のICTツールを活用して考えを共有する活動が広がり、友達の意見を踏まえて自らの考えを再構築する協働的な学びが定着してきた。
- ・教科「日本語」を中心に、他教科でも「自分の言葉で説明する」活動が広がり、言語能力と論理的思考力の育成に寄与した。
- ・校種を超えて授業を参観し合う取組により、小中の教員が相互理解を深め、授業づくりに一貫性が生まれた。

【課題や改善策】

- ・「見通し」や「振り返り」が形式的に行われる場面があり、児童生徒が学びの意味を実感するまでに至らない場合がある。
- ・ICT利活用が「発表」や「記録」ととどまり、思考を深める手段として十分に機能していない。
- ・9年間を見通した評価や指導内容の系統化について、校種間の情報共有に課題が残る。
- ・ICTの活用を手段として位置づけ、児童生徒が主体的に思考を深める授業づくりを進めるとともに、小中9年間を見据えた学びの系統性を意識した研究をさらに深化させていく。

② 社会性の向上

【成果】

- ・構成的エンカウンターを活用した活動により、互いの意見を尊重し、協働的に課題を解決しようとする姿勢が育まれた。
- ・教科「日本語」での話し合い活動が、他者理解や自己表現力の育成につながり、社会的スキルの向上に寄与した。
- ・「田代スタイル」（時間・挨拶・掃除）の共通実践を通して、基本的生活習慣や公共意識が向上した。

- ・地域と連携した文化的行事や礼儀指導により、ふるさとへの誇りや感謝の心を育むことができた。

【課題や改善策】

- ・活動の定着や振り返りの質には差が見られ、形だけの取組にとどまる場合がある。
- ・小学校と中学校で指導の深まりに差があり、児童生徒の発達段階に応じた展開の工夫が求められる。
- ・家庭・地域と一体となった社会性育成の仕組みづくりが十分とは言えない。
- ・今後は、活動の意義を児童生徒自身が実感できるよう、自己評価や相互評価の仕組みを充実させるとともに、地域と連携した礼儀・文化教育を通じて社会性のさらなる育成を図っていく。

③ 教職員の意識の醸成

【成果】

- ・4部会による合同研修や授業参観を通して、小中の教員が共通の視点で授業を見取り、互いの文化や指導観を理解する関係が構築された。
- ・学力向上・ICT部会の活動を通して、ICTを活用した授業改善や校種を超えた授業交流が進み、教職員の意識改革が促進された。
- ・特別支援教育部会では、個別の教育支援計画や合理的配慮に関する協議を重ね、支援の共通理解が進んだ。

【課題や改善策】

- ・時間的制約により、日常的な交流や授業研究の共有が十分に確保できていない。
- ・研究成果を全教員で共有し、校区全体の共通課題として取り組む仕組みが十分に整っていない。
- ・校種を超えた協働を一層活性化させるために、オンラインによる情報共有や共通データベースの整備など、日常的な連携の仕組みを構築していく。

④ 生徒指導上の諸問題の改善

【成果】

- ・小中間での情報共有が定着し、特別な教育的支援を必要とする児童生徒への対応が継続的かつ一貫して行われるようになった。
- ・特別支援教育部会では、ロイロノート等のICTツールを活用した個別最適な支援により、学びへの参加意欲が向上した。
- ・人間関係づくり部会との連携により、コミュニケーションスキルを育てる活動が広がり、トラブルの減少につながった。

【課題や改善策】

- ・支援記録や引継ぎの方法が学校ごとに異なり、統一した運用体制が整っていない。
- ・交流学級における発表場面などで、自己表現に不安を抱く児童生徒への支援が十分とは言えない。
- ・家庭・地域との連携をさらに深め、未然防止・早期対応の仕組みを強化する必要がある。

- ・ 今後は、情報共有や支援記録の統一化を進めるとともに、障がいの有無にかかわらず、すべての児童生徒が安心して学べる環境づくりを推進していく。

⑤ 地域の教育力の向上

【成果】

- ・ 教科「日本語」部会を中心に、地域教材や地域人材を活用した授業を実践し、地域文化の理解と郷土愛の育成につながった。
- ・ 地域行事や清掃活動への参画を通して、児童生徒が地域とのつながりを実感する機会が増えた。
- ・ 保護者や地域への発信を通して、田代中学校区としての教育への信頼が高まった。

【課題や改善策】

- ・ 地域や保護者の参画が特定の層に偏っており、持続的な協働体制の構築を図る必要がある。
- ・ 地域資源を教育課程に体系的に位置づける仕組みが十分ではない。
- ・ 今後は、地域の多様な人材を巻き込みながら、学校・家庭・地域が一体となった教育活動を展開し、地域全体で児童生徒を育む環境づくりを一層進めていく。

<総括>

本研究では、教科「日本語」を柱として、協働的に学び、自分の考えを自分の言葉で表現する力を全教育活動の共通視点として取り組んできた。その成果として、児童生徒の主体的・対話的な学びの深化、教職員の協働意識の醸成、地域との連携強化など、校区全体における教育の質的向上が見られた。

一方で、学校間の実態差や実践の質の均衡、連携の持続性など、今後に向けた課題も明らかとなった。

引き続き、9年間の系統性と連続性を意識した取組を継続し、児童生徒一人一人が自らの言葉で未来を切り拓き、生き抜く力を育む教育の推進を図っていく覚悟である。

おわりに

本紀要は、「豊かな人間性と自立心を培い、生き抜く力をもった児童生徒の育成」を研究主題に掲げ、小中一貫教育において取り組んできた実践をまとめたものである。

現代社会は、価値観の多様化や急速な技術の進展、将来の予測が困難な状況など、子どもたちにとってますます生きづらい時代となっている。そのような中で、他者と協働しながら主体的に考え、自分らしくたくましく生き抜く力を育むことは、教育の重要な使命である。田代中校区では、小中一貫教育の枠組みを活かしながら、9年間を一貫した見通しの中で児童生徒の育ちを支え、「豊かな人間性」と「自立心」を軸とした教育実践に取り組んできた。

その実践の中では、教職員同士が校種を越えて協働し、共通理解のもとで4つの部会に分かれ研究を進めてきた。学習面だけでなく生徒指導や教育相談、特別支援教育など、児童生徒の全人的な成長を支えるための連携を重視し、継続的な指導の工夫と改善を重ねてきた。中でも、鳥栖市の特徴である教科「日本語」の学習は、児童生徒にとって、ふるさとの良さを認めふるさを愛する機会となるとともに、地域に根差した学習を通して生きる力を育み、本研究において特に重要な柱となった。

今回の研究を通じて、児童期から思春期に至るまでの子どもたちの成長の過程を、より深く理解しようとする姿勢が小中の教職員の間に共有され、教育活動全体がより一体感のあるものへと変化していったことを実感している。一方で、カリキュラムや評価の一貫性、教職員間の連携体制の持続可能性、保護者や地域との連携の在り方など、今後の課題も明らかになった。これらの課題に対しても、今後さらに検討と改善を重ねていく必要がある。

本研究にあたりトークセッション並びに講演をお引き受けいただいた 西九州大学 副学長 上野景三先生、並びに、本紀要の作成にあたり日々の教育実践の中で真摯に取り組んでこられた教職員の皆様、またご理解とご協力を賜った保護者・地域の皆様に心より感謝申し上げます。子どもたちのよりよい未来のために、私たち教育に携わる者はこれからも不断の努力を続けていかねばならないと改めて感じたところです。

本紀要が、今後の小中一貫教育のさらなる充実と、教育実践の深化に寄与することを願って、あとがきとさせていただきます。

令和7年11月

鳥栖市立田代中学校区

田代中学校 教頭 原田聡子、主幹教諭 伊達幸長

田代小学校 教頭 村岡美保

若葉小学校 教頭 久保明広

弥生が丘小学校 教頭 川副 暢、主幹教諭 古城武史

令和6年度 田代中学校区小中一貫教育 組織図

田代中学校区小中一貫教育研究会 会長

田代中学校区小中一貫教育 事務局

研究部（広報）

弥生が丘小 田崎校長

弥生が丘小 今村教頭

弥生が丘小 川副主幹

部会	学力向上・ICT部会			
オブザーバー	田代中 福田副校長			
部会長	田代中 納富主幹			
	田代中	弥生小	若葉小	田代小
副部長	坂口 領	宮原ひろみ	森田 祐介	横尾 弘樹
1	深川 尚紀	秋山富美子	坂元 研太	田中 由紀
2	岡野 夢花	白石 竜也	毛利 裕美	宮川結実子
3	瓜生 翔太	東島 美緒	杵島 薫	坂田 郁
4	武久 有香	吉良 寿子	六丸 拓実	中山 陽一
5	鶴田 菜月	田栗 幹久	木原 敏	宮崎 万智
6	上田 美月	森 陽奈子	松尾美値余	小宮 理子
7	佐々野仁美			長友 孝樹
8	豊田 博司			
9	日野 順子			
10	山口 美晴			
11	牛島 奈央			
12				
13				
14				

部会	人間関係づくり			
オブザーバー	田代中 中島校長			
部会長	田代中 原田教頭			
	田代中	弥生小	若葉小	田代小
副部長	大石 将司	菖蒲 星斗	有馬 利恵	西森 秀行
1	宮本 晃子	中垣 由理	城野 瑠衣	木原 秀徳
2	花牟禮憲枝	米光 花絵	江頭美穂子	松枝 龍平
3	武富千穂子	早田 椋祐	古川 彩星	八谷 晋平
4	中野 薫	高須 祥太	前原 恵理	野口 彩花
5	鶴 勝己	西川 萌	緒方 誠	中川 宏美
6	陣川 幸久	宮崎 泉実	林 さおり	甲斐田真実
7	森 千代子	西村 光平		立石 香
8	山村 昌大			
9	末松 海音			
10	竹下 裕梨			
11	杉崎 絢香			
12	裕下 佳代			
13				
14				

部会	特別支援教育部会			
オブザーバー	田代小 黒田校長			
部会長	田代小 村岡教頭			
	田代中	弥生小	若葉小	田代小
副部長	高木さおり	成富 雅世	城戸 由里	吉井知恵美
1	古賀 美加	天野 玲子	立石さゆり	山田 涼子
2	岩下 隆宣	深町 貴美子	小川 早苗	重松 孝信
3	小田 歩	松本 由紀子	久米まゆみ	柳島加奈子
4	石橋留美子	永松 笑美	仁戸田紘輝	田中 睦美
5	養父 友美	川原 悦子	中島絵梨夏	藤本 愛美
6	牟田菜央子	成富 京子	田中 亮史	増田 光司
7	宮崎 啓	吉松 智子		上野 恵
8	荒木 李春	毛利 多美得		
9	岡 大介	槇 明美		
10	水落 理子			
11	緒方 志帆			
12	吉田 博幸			
13	三島 洋一			
14				

部会	教科「日本語」部会			
オブザーバー	若葉小 江頭校長			
部会長	若葉小 遠藤教頭			
	田代中	弥生小	若葉小	田代小
副部長	守田 茂	副島 香織	小野 華恋	毛利 多津子
1	山田 美月	執行 ルリ子	井上 節子	井手 佑莉那
2	長野 謙治	永野 由紀子	尼寺 公子	藤井 容子
3	奥園智恵子	森元 日向子	木原 優衣	伊東 靖子
4	戸高 宏樹	時 奈生	諫山 直子	草場 奈菜
5	古川英理子	高尾 理紗子	直塚 美生	伊東 美幸
6	末永 翼	吉田 昇		末安 大祐
7	太田家佑輔	(岩橋 ひとみ)		
8	末永 成			
9	原口万柚子			
10	松岡 明希			
11	園部 祐希			
12	能塚 啓子			
13	日山 亮一			
14	高尾千江子			

令和7年度 田代中学校区小中一貫教育 組織図

田代中学校区小中一貫教育研究会 会長

田代中学校 中島校長

田代中学校区小中一貫教育 事務局

田代中学校 原田教頭

田代中学校区小中一貫教育 事務局・研究部（広報）

田代中学校 伊達主幹

部会	学力向上・ICT部会			
オブザーバー	田代中 藤家副校長			
部会長	弥生が丘小 古城主幹			
	田代中	弥生小	若葉小	田代小
副部長	坂口 領	宮原 ひろみ	森田 祐介	横尾 弘樹
1	深川 尚紀	吉良 寿子	松田 浩和	田中 由紀
2	宮崎 啓	田栗 幹久	松尾美値余	甲斐田 真実
3	鶴 勝己	白石 竜也	堤 香凜	中山 陽一
4	末永 成	東島 美緒	六丸 拓実	宮崎 万智
5	岩下 隆宣	菖蒲 星斗	木原 敏	最所 美紀
6	武久 有香	桑原 千佳		溝口 賢一
7	西依 稚菜	執行 ルリ子		山領 菜津
8	古川 英理子			
9	伊東 麟太郎			
10	山口 空			

部会	人間関係づくり			
オブザーバー	弥生が丘小 今村校長			
部会長	弥生が丘小 川副教頭			
	田代中	弥生小	若葉小	田代小
副部長	古賀 将史	高須 祥太	小形 優衣	西森 秀行
1	瓜生 翔太	中垣 由理	城野 瑠衣	木原 秀徳
2	伊東 幸一郎	榎 明美	江頭美穂子	井手 佑莉那
3	永家 美緒	早田 椋祐	古川 彩星	八谷 晋平
4	森 千代子	西村 光平	毛利 裕美	中島 結実子
5	陣川 幸久	川内 綾	緒方 誠	山浦 沙也香
6	宮本 晃子	米光 花絵	林 さおり	中川 宏美
7	松下 佳代	秋山 富美子		立石 香
8	太田家 佑輔			
9	岡野 夢花			
10				

部会	特別支援教育部会			
オブザーバー	田代小 豆田校長			
部会長	田代小 村岡教頭			
	田代中	弥生小	若葉小	田代小
副部長	小田 歩	毛利 多美得	城戸 由里	坂元 研太
1	高木 さおり	松本 由紀子	有馬 利恵	増田 光司
2	古賀 美加	花田 譲司	黒川 三香子	伊東 美幸
3	原 志津子	永野 由紀子	尊田 明子	柳島 加奈子
4	高島 明子	成富 雅世	仁戸田紘輝	坂田 郁
5	松岡 明希	永松 笑美	中島絵梨夏	上野 恵
6	末松 海音	成富 京子		藤本 愛美
7	園部 祐希	天野 玲子		森 理子
8	栗田 明美			
9	吉田 博幸			
10	藤原 貴史			

部会	教科「日本語」部会			
オブザーバー	若葉小 江頭校長			
部会長	若葉小 久保教頭			
	田代中	弥生小	若葉小	田代小
副部長	守田 茂	金屋 香織	小野 華恋	茂田 ゆかり
1	白水 広子	時 奈生	井上 節子	藤井 容子
2	戸高 宏樹	吉松 智子	末安 大祐	田中 睦美
3	長野 謙治	吉田 昇	古澤 華月	長友 孝樹
4	上田 美月	益田 瑞生	諫山 直子	草場 奈菜
5	花牟禮 憲枝	西川 萌	直塚 美生	松枝 龍平
6	山田 美月	高尾 理紗子	加藤 一帆	小野 和奏
7	盛 こと美	(木村 嘉身)		田中 聖奈
8	末永 翼			
9				
10				